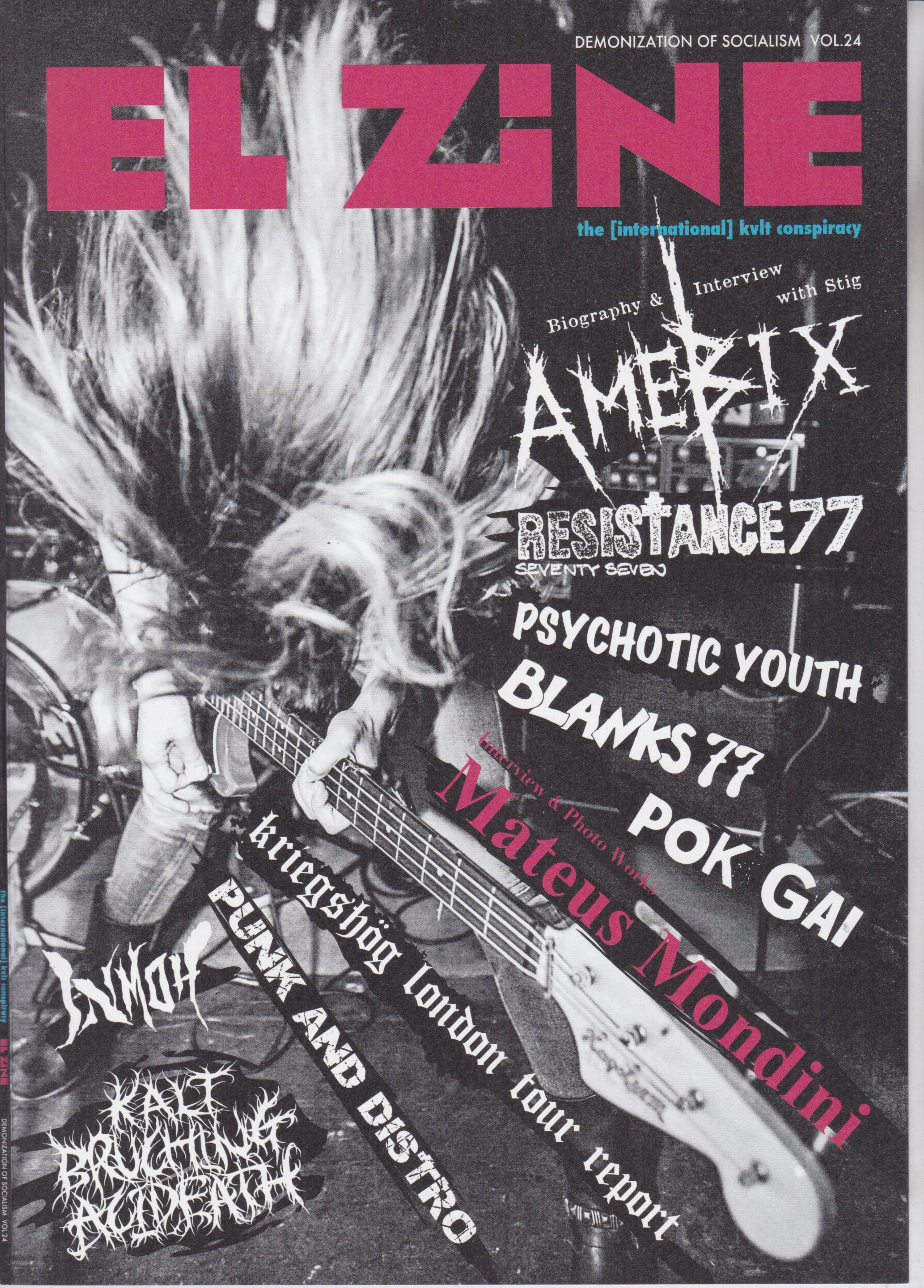


DEMONIZATION OF SOCIALISM VOL.24
EL ZINE
the [international] kvlt conspiracy
Biography & Interview with Stig
AMEBIX
RESISTANCE 77
SEVENTY SEVEN
PSYCHOTIC YOUTH
BLANKS 77
POK GAI
Interview & Photo Works
Mateus Mondini
kriegshög london tour report
PUNK AND DISTRO

CONTENTS VOL.24



RAKTA Photo by Mateus Mondini

Mateus Mondini Interview & Photo Works



Mateus Mondini

"遅きに逸した"とはまさにこのインタヴューのためにある言葉だ。知っている人は知っているが(…当たり前である)、その昔、株式会社ドールが発行していたDOLLという月刊誌の休刊号(＝廃刊号)、その表紙を飾ったのはMateus Mondiniが撮影したMASSHYSTERIの写真だった…。
そして2016年、EL ZINEという不定期発行ファンジン、そのvol.21の表紙となったBELGRADOの写真を撮影したのも、…他ならぬMateus Mondiniである。更には前号、vol.23の「Recordshops Recommended Records 2016」でいくつかのショップさんが名前を挙げていたレーベル、Nada Nada Discosを主宰しているのも、…彼である。
もう、インタヴューをやらない理由はどこにもない!2017年一発目のEL ZINEは世界最高峰のパンク・カメラマンfromブラジル/サンパウロ:Mateus Mondiniのインタヴュー＆フォト・ワークスでイクゼ!!
(尚、奇遇なことに今号の表紙も、彼が撮影したMASSHYSTERIの写真ですが、幣誌はまだ終わりません・笑)

PHOTO:Mateus Mondini


Xavero



■まずは日本の読者に自己紹介をお願い。
「やぁ、僕はMateus Mondini。33歳で、僕の愛しき妻、Talitaと一緒にブラジルのサンパウロに住んでいるよ。Nada Nada Discosというレコード・レーベルを運営していて、新しいバンドや昔のクラシックな音源、未発表音源の再発なんかをヴィニールでリリースしているんだ。主にブラジルのバンドだけど、全部がそうってわけじゃないよ。あとはパンク・ロックのレコード屋をサンパウロの繁華街でやっていて、その店はThe Recordsというんだ(バカバカしい名前だろ、分かっているよ)。僕と友人のAlemaoとKalotaでやっているんだけど、小さいながらもクールな店さ。それと"アート・レーベル"のRolo Secoを友人のLucas Cabuとやっていて、音楽に関係しているアーティストの巨大なシルク・スクリーン・ポスターを主に作っているんだ。時々、ショーやツアーを企画したりもするけど、いつもやっているわけじゃないよ。今、僕がメインで取り組んでいるのはサンパウロの初期パンク・シーンを映し出した本で、2018年には発売できるだろうね。どれも楽しいことばかりなんだけど残念ながら稼げないから、クソみたいなモノの写真を撮ったりビデオをまわしたりしているよ。まぁ、問題ないかな」

■そのRolo Secoについて詳しく聞かせてもらえる?
「それはアーティストによるアートワークを出している、アート・レーベルさ。プリントしたり、レコードを何枚か手掛けたり、あとはオリジナルのアートもやったりしているけど、主にやっているのは96センチ x 66センチという大きなシルク・スクリーンのポスターだね。アーティストは全員、音楽に関わっているんだけど(ミュージシャンじゃなくても、バンドのアートワークを担当していたりね)、素晴らしいアーティストのポスターを既に50枚以上制作しているんだ。名前を挙げると、Sam RyserとEugene Terry(2人ともCRAZY SPIRIT)、Teodoro Hernandez(OTAN、REALIDAD)、Jonathan SiritandとPatrycja Anna(2人ともBELGRADO)、Guilen El Muro(INVASION、UNA BESTIA INCONTROLABLE)、Jess Scott(FLESH WORLD)、Winston Smith(DEAD KENNEDYSのアートワークを担当していた)、Yecatl Pena(CINTAS PEPE)、Heather Benjamin(※HOAXなどのアートワークを手掛けている)、Martin Sorroneguy(LOS CRUDOS、LIMP WRIST)、Tim Kerr(BIG BOYS)だね…」

■いつからカメラや写真に興味を持つようになったのかな?初めて撮影したバンドは何だったか覚えている?
「質問に答える前に、僕はもうパンク・ロックの写真家ではないと言っておきたい。ツアーの最中だったり、僕がそのショーを企画しているのなら撮影しているんだけど、今は"アート"としてよりも、ドキュメントに関心があるんだ。もちろん今でもパンクのライヴ写真は大好きだよ。でも、写真は僕にとって"退屈な仕事"になってしまっているから、楽しんでいるときにはもう写真は撮りたくないんだよね。それでも、写真について話すのはすごく楽しいんだけどさ。
質問に戻ると、僕が19歳の頃だったかな、メディア・スクールに通っていたんだ。そこでは写真の授業もあって僕は結構気に入っていた。それでカメラを購入して、写真だけに特化したクラスを受講することにしたのさ。でもクラスのレッスンは全然受けずに、友人のバンドの写真を撮ってばかりいたな。僕が初めて撮ったバンドは、Verdurada(※サンパウロで1996年から開催されているハードコア・イヴェント)でプレイしたGrind Dayだね。このバンドは何も音源を残していないんだけど、メンバーの2人とは今でも親友なんだよ」

■パンクに惹かれるようになったのはいつ、

どのようにして?キッカケとなったバンドは何だったの?

「14歳のときに、僕が通っていた学校にHOLLY TREEというパンク・バンドがいたんだ。彼らは僕より3歳ほど年上でね、学校でショーをやったりしていて格好良かったんだ。それから僕と何人かの友人とで、学校外でやっている彼らのショーを見に行ったんだけど、そこで他のパンク・バンドのことを知ったってわけさ。当時、僕はGaleria do Rock(ロック・ミュージック全般を扱う巨大なショッピング・モールで初期ブラジリアン・パンクの中心部)に通い始めていて、それからHangar 110という大きなパンクの会場にも足を運ぶようになった。毎週末になるとパンクのショーがあってね、色んな人たちとそこで出会ったよ。彼らは今でも友人さ。僕はネットワーク・オブ・フレンズとしてのパンクも大好きなんだ。だって、世界中どこに行こうとも、同じ趣味の人たちと出会い、楽しい時間を過ごすことができるからね。それにあらゆるDIYなことも。パンク・ミュージックは最高さ」

■ショーで撮影するときに、特に意識していることは?

「何か違うものを撮ろうとしているよ。時々、カメラを手にした人がたくさん来ているショーもあるよね。他のカメラマンと同じような写真は撮りたくないんだ。自分だけの光が欲しくて、外部フラッシュを使うこともあるかな」

■難しいだろうけど、これまでに撮影したパンク・バンドのベスト・ショットって何になるかな?

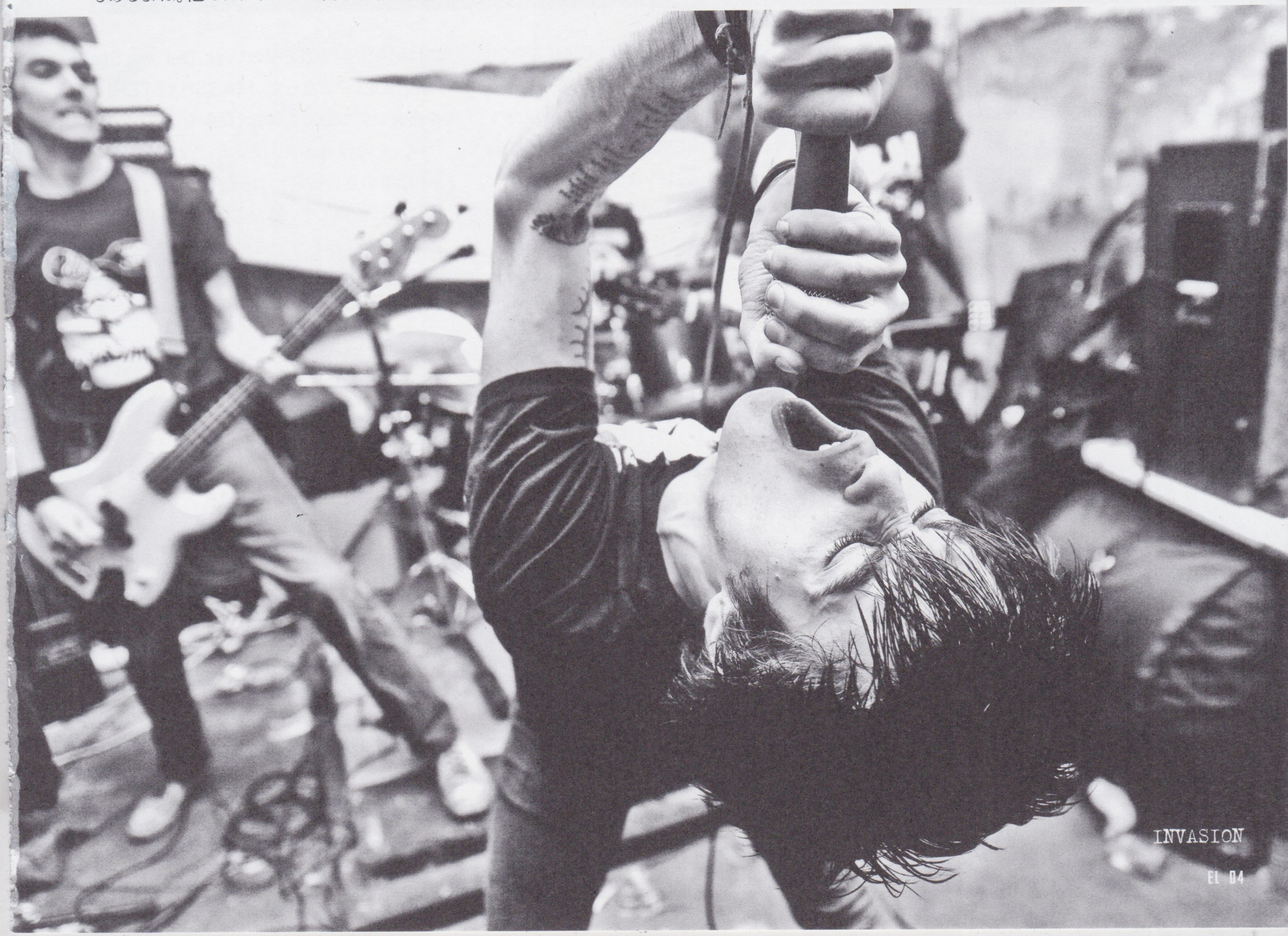
「そいつは難しいな。でも、バルセロナのスクワットで撮ったINVASIONの写真はかなり気に入っているよ。最高のバンドだよね。それとNYで撮ったTOTAL CONTROLの影の写真に、RAKTAの1st LPの裏表紙で使った、ポーズをとった彼女たちの写真もね(※今号の裏表紙や目次で使わせてもらいました)。あれは僕の住むアパートの目の前にある広場で、何時間もかけて大量に撮影した中の、最後の一枚だったんだよ」

■パンク・シーンに好きなカメラマンはいる?LOS CRUDOSのMartinは素晴らしいよね。

「Martinは写真家、シンガー、レーベル・オーナー、レコード・コレクター、友人、そして人間としても最高だよね…。写真に限らず、色んな面において彼からは影響を受けている…。僕が初めてサンフランシスコを訪れた際に、彼は自宅に僕を泊めてくれたんだ。それまで僕らは話したこともなかったのにさ。それから僕らは良き友人となり、僕はLIMP WRISTとLOS CRUDOSのブラジル・ツアーを企画したんだ。数年前には、サンパウロで彼の素晴らしい写真展も開催した。僕が最もパンクの写真にのめり込んでいたのは、"Flickr時代"だね。Flickrでフォローしていた、僕が影響を受けた写真家というとMark Murrmann、Emma Svensson、Karoline Collins、Canderson、Shawn Brickbill、Eric Altimis、そしてもちろん良き友人でもあるDaigo Oliva。彼とは一緒にフォト・ジン『Fodido e Xerocado』も作ったね。日本を旅したときには、2人の素晴らしい日本人写真家と出会った。ChiroとKenta Nakanoのことさ。もちろん、僕はGlen E. FriedmanやEd Colver、Gary Leonard、Jim Jocoy、Bill Daniel、あとはブラジル人のRui MendesやPenna Prearoのことも大好きだよ」

■Nada Nada Discosを始めたのは2008年か2009年?

「2008年の後半だね。2007～2008年にかけて僕はヨーロッパ、主にロンドンでシルク・スクリーンの仕事をしながら、Talitaと一緒に暮らしていたんだ。だけどバルセロナに住んでいたときはたくさんのツアーに同行してね、最初はCLOROX GIRLSとFEELERSによる2ヶ月間のツアーだった。そのツアーで数多くのクールな人たちと出会って、その後にMASS HYSTERI、REGULATIONS、PRESS GANG、CINDER、AUTISTIC YOUTHとツ



INVASION

Mateus Mondini



FUTURO

アーしたんだ…。ヨーロッパには多くのイカしたバンドがいた。それで僕はそういったバンドのレコードを出して、ブラジルにいる人たちにも届けられるようにしたかったんだよ。ブラジルの友人たちに、他国の新しくてグレートなパンク・バンドを知ってもらいたい、それがレーベルをやるにあたっての最初の意図だったんだ。自分の大好きな昔のバンドの再発をしたり、ブラジルの仲の良いバンドを出すというアイデアもあったけどね。ただ、500枚をプレスするよりも、ヨーロッパでプレスされたレコードを100枚ブラジルに取り寄せて、それにシルク・スクリーンで作ったカヴァーをつけるほうが遥かに安いからさ…」

■影響を受けたレーベルはある?

「Nada Nadaはすごくミックスされているんだ。主に現行のバンドを出しているけど全てではないし、サンパウロのバンドが多いけど、外国のバンドも出している。それに再発もしている。だから何か一つのレーベルだけをお手本にしているということはないけど、大好きなレーベルを挙げてみるよ。OLHO SECOのシンガー、FabioがやっていたPunk Rock Discos/New Face Recordsだね。80年代当時、彼はここブラジルでRATTUSやTERVEET KÄDET、EXPLOITED、ENGLISH DOGS、VARUKERS、ANTI CIMEXやCRUDE SSが収録されたコンピレーションのレコードをリリースしていたんだ(※余談ですが、今号に掲載のRESISTANCE 77の『Russia』[元々のタイトルは『Vive Le Resistance』]をリリースしたのもNew Face Records)。…ブラジルのパンクスはこのレーベルの作品を聴いてすごく影響されたんだよ。彼はVA『Grito Suburbano』、OLHO SECO『Botas Fuzis Capacetes』7"、RATOS DE PORAO『Crucificados Pelo Sistema』LP、LOBOTOMIAの1st LPといったクラシックもリリースしていたね。当時はバンドがレコーディングするのも大変だったし、海外のパンクスとコミュニケーションをとるのも難しかったから、Fabioがレーベルとしてやったこと全てと、それに向けられた愛情に対して、僕は心の底から感謝しているんだ」

■過去には別のレーベルやディストロ、もしくはバンドをやっていたのかな?

「バンドをしたことはないよ。ちゃんとしたディストロもやったことはないけど、Nada Nadaを始める前からレコードを輸入してブラジルで販売していた。けど、真剣にはやっていなかったな」

■僕が初めてNada Nada Discosを知ったのはMASSHYSTERIの『Var Del Av Stan』の限定LPでだった。MASSHYSTERIとの出会いについても詳しく聞かせて。

「うん、その作品がNADA001だね。ウメオで2007年の夏に彼らとは出会ったんだ。あそこは北部に位置しているから太陽が24時間沈まなくて暗くならないんだよね。それも面白かったし、THE VICIOUSがキッチンでやったライヴを見られたのも良かった。その後、僕は2008年までヨーロッパに滞在していたんだけど、MASSHYSTERIがAUTISTIC YOUTHとヨーロッパ・ツアーをするというじゃないか。僕も同行したいと思っていたら、彼らはいいよと言ってくれた。すごく嬉しかったね。MASSHYSTERIは僕のお気に入りの新たなバンドだったし、10年を経て今も尚、大好きなバンドの一つだからさ。MASSHYSTERIのファーストLPのジャケットは、僕がそのツアーで撮った写真を、メンバーであるRobertがアートワークに使っているんだ。それと、Nada Nada Discosのロゴを作ってくれたのもRobertだよ」

■ブラジルに限らず色んな国のバンドをリリースしているけど、それは意識して?それとも国を問わずに、自分の好きなバンドをリリースしているだけなのかな?

「僕はDangerhouseが大好きなんだ。70年代後半に、ロサンゼルスのパンク・バンドだけを出していたよね。しかもどの作品もアートワークが素晴らしかった。地元のバンドしか出さないというレーベルのアイデアはすごく好きだよ。Dischordもそうだったよね。…でも、今やパンクはものすごく広いから。もしくは、サンパウロがあまりにも狭すぎるのかもしれないけど。だから他の国のバンドもリリースしているんだ」

■では、レーベルを運営する上での信念は何かな?

「僕は自分の好きなバンドをリリースしているだけだよ。サンパウロのバンドをリリースするのがすごく好きなんだ。彼らは友人だし、いつもショーを見に行っている。バンドがレコードを出したり、ディストリビューションするのに協力して、世界中のパンクスにバンドの存在を知ってもらうのはナイスなことだよね。再発に関しては、高値になっているレコードを再び手に取りやすい、キッズでも買えるような形でリリースするのが好みだな。それに僕は、メンバーからのテキストやフライヤー、写真といったエクストラなものに時間を費やすのも好きでね。再発は常に、オリジナルのレコードよりも何かが追加されているべきだと考えているんだ。まぁ、ときにはそれが不可能なこともあるけどさ。あとは、未発表のテープをリリースするのにも情熱を傾けている。MERCENARIASであったりLOBOTOMIA、SP CAOS、3Dといったバンドの古いテープを7インチ化して発売しているよ。知られざる素晴らしい音源はまだまだたくさん控えているからね」

■ANTI CIMEXのヴィニールもたくさん再発しているよね。どのような過程を経て、再発するに至ったの?

「インターネットを介して、ドラマーのCharlieに連絡をしただけだよ。当初は、僕の大好きな『Raped Ass』だけを再発するつもりだったんだけど、Charlieと話しているうちに全ての7インチを出したり、ボックス・セットにすることにしたんだ。その後に、LPもやることに決めたのさ。僕はANTI CIMEXが大好きだ。80年代にFabioがリリースしたコンピレーションLP『Afflliceted Cries In The Darkness Of War』にはスウェーデンの4バンドが収録されていた。CRUDE SS、FEAR OF WAR、ROVSVETT、そしてANTI CIMEX。だからブラジルのパンクスはANTI CIMEXには特別な感情を抱いているのさ」

■リリースしたいけど、オファーを断られたバンドや再発はある?

「うん、僕の夢は『Grito Suburbano』コンピLPを再発することなんだけど、Fabioが許可してくれないんだ。毎年のように頼み込んでいるんだけど、彼はいつも、自分がいつかやるからと言うのさ。一緒にやれればいいんだけどね」

■最も印象深いリリースは何かな?

「それは『SUB』LPだね。『Grito Suburbano』同様に、僕のお気に入りのブラジルのレコードだからさ。再発にはすごく情熱を注ぎ込んだよ。『SUB』は元々Redson(COLERAのシンガー/ギターで2011年に亡くなった)のアイデアによるものだけど、収録バンドもアートワークもレコーディングも大好きなんだ…。ダブルLPで再発したんだけど、それはリリースする数ヶ月前にFabio(OLHO SECO)が『SUB』のプリ・レコーディング音源をくれたからなんだよ。全バンドとも、異なるヴァージョンで、いくつかは聴いたことすらない曲だった。『SUB』のためにレコーディングされた曲はもっと存在しているという噂はあったんだ。ファースト・プレスのトラック・リストは実際のLPとは異なっていたし、みんな、Redsonは最初に行なったレコーディングが気に喰わなくて、全バンドを再度録り直したんじゃないかと言っていたね…。あとは、RAKTAのファーストLPも感慨深いな」

■時々Spicoli Discosと共同リリースをしているけど、これは誰のレーベル?

「SpicoliはAlemaoのレーベルだよ。レコー



FRAMTID

ド・ショップを一緒に経営しているパートナーでブラジルの再発モノの多くは彼とともにやっているね」

■共感を持てるレーベルはある?

「Spicoli以外にも共同リリースをしているレーベルはたくさんある。サンパウロの新しいバンドに関してはDama da Noiteと一緒に出しているね。それはRAKTAのCarlaのレーベルだよ。REPLICANTESと3Dの7インチはPunch Drunkと共同リリースした。ブラジル南部のクールなレーベルだし、その2バンドも南部出身だから理にかなっていたよ。Mouse Recordsのおかげで日本に僕のリリースを流通させることができてすごく嬉しいし、ヨーロッパに関してはDe O ForaとSabotageが、アメリカはWarthog Speakが流通してくれている。以前はFeral Wardとも、とても良好な関係だったよ」

■2016年にはRAKTAと一緒に来日したけど、何か驚いたことはあった?最近の日本のバンドは好き?

「2014年に妻と休暇で来日したことがあるから、昨年は2度目だったんだ。最高だったし、この2度目の来日はさらに良かったね。KazuとChiro、そしてNaokiは僕たちの人生の中でも最良と言えるツアーを組んでくれた。素晴らしい人たちさ。日本は世界中で一番好きな場所なんだ。本当、飛行機で28時間もかからなければいいのにね。ベストな人々、ベストなレコード・ショップ、ベストな食べ物(日本の友人と一緒のときは、僕がヴェジタリアン・フードを注文するのをみんな助けてくれた)、ベストな飲み物、ベストなショー、そしてベストなバンド…、EXTRA PLANTS、UNSKILLED LAB、CONTRAST ATTITUDE、KRIEGSHÖG、EIEFITS、MALIMPLIKI、CODE、FEROCIOUS X、WOTZIT、ISTERISMO、AKKA、SOW THREAT、UNARM、POIKKEUS、FRAMTID…。こういったバンドのライヴ、そのほとんどを見ることができた。できれば全て見たかったけどね。日本の最高のレーベルの人たちとも会えて嬉しかったよ。MangroveにToo Circle、Black Hole、Hardcore Survives、Overthrow、そしてMouseといったレーベルさ…」

■最近のサンパウロのパンク・シーンはどんな感じ?

「今のシーンは悲しいことにとても停滞しているね。数年前まではグレートだった。GATTOPARDO、CADAVER EM TRANSE、RAKTAといったバンドがほぼ毎週末プレイしていたし、他にもクールなバンド、SPEED KILLS、VENENO LENTO、FUTURO、URUTU、MODULARESなどがたくさんいたね…。いくつかはまだ活動しているけど、もう"シーンのフィーリング"は変わってしまったよ。演奏できるクールな場所もあるし、もしなければ路上で演奏すればいいだけさ。RAKTAはまだバンドの形を保っているけど、ドラムのNathaは今、アルゼンチンのブエノスアイレスに住んでいるから、ここでいつでも演奏できるわけじゃないんだ。GATTOPARDOも同じさ。ドラムのAlanは今イタリアのミラノにいてね。すぐにでも帰って来てくれればいいんだけど。でも、シーンはもうすぐ良くなると確信しているよ。ナイスな人たちが新しいバンドを始めているから。できれば、もっとキッズが登場してくれることを願っている」

■今後の予定は何かある?

「80年代のサンパウロ・パンク、その写真やフライヤー、文書にジン、記憶すべき事柄…を網羅した本に取り掛かっているんだ。気の遠くなる仕事量だけど、これまでにやってきた中でも最高の作品になるだろうね。昔からのパンクスの自宅を訪れては、"パンクのお宝"を拝見させてもらい、彼らの歴史に耳を傾ける。こいつはクールだよ。あとはサンパウロの、初期ポスト・パンクのドキュメンタリーを撮影していて、それと同時に、ポスト・パンクのデモ・テープを収録したコンピレーションLPにも取り組んでいる。もうすぐリリースできるタイトルは、OLHO SECO『Botas Fuzis Capacetes』7インチの再発、GATTOPARDOの7インチ、Pedro(GATTOPARDO)とLaura(CHROMA、ex RAKTA)による新バンド、MENTIRAの7インチだね。キーボードとベースだけのバンドなんだけど、昨年末にLauraがサンパウロを訪れた際にレコーディングしたんだ」

■インタヴューさせてくれてありがとう。日本の読者にメッセージをお願い。

「誰か僕に仕事をちょうだい。そしたら明日にでも日本に引っ越すから」

Websites:
www.nadanadadiscos.com
www.roloseco.com



RAKTA and FLESH WORLD Tour in 2014



Martin Exhibit in Sao Paulo

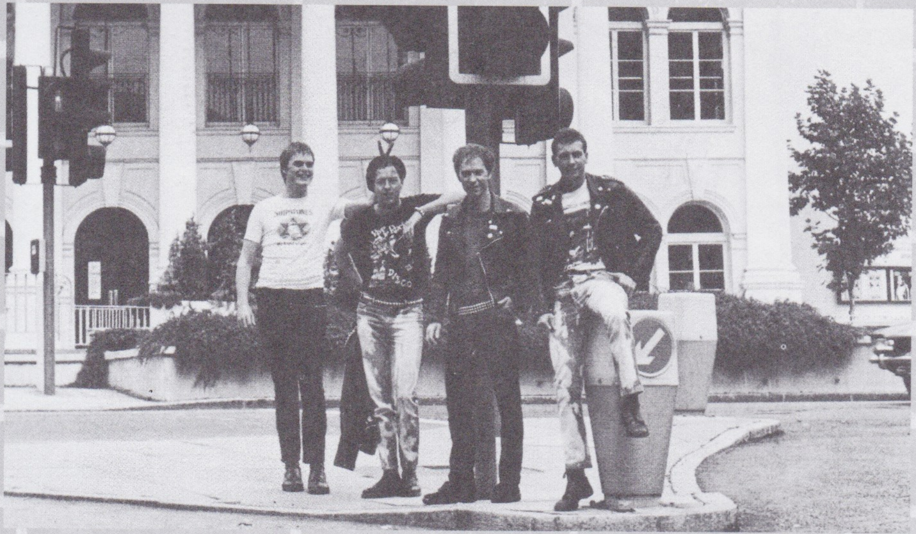


RESISTANCE 77
SEVENTY SEVEN

前号・前々号とRiot City Recordsオーナー:Simon Edwardsへのインタヴューをお送りしましたが、"Riot Cityからリリースしたことのあるバンドのインタヴューも一緒に掲載しよう!"という計画が、実は私の脳裏にはあったのです。
自分の好きなバンドで現行、且つインタヴュー可能というと…。ウンウン悩んだ結果、"ヨシ!RESISTANCE 77にインタヴューだ!"となったのが、昨年の夏真っ盛りの8月…(汗)。インタヴューOKの返事はヴォーカルのOddyからすぐに来たのですが、そこからが長かった…。
"もうSimonのインタヴューも掲載しちゃったし、諦めるか…"と思いつつも、シツコーク催促していたら、遂に届きました(ヤッタネ)!
時間はかかりましたが、それだけの価値があるインタヴューになったと思います。また、大変にデリケートな質問に対しても誤魔化すことなくキチンと答えてくれたので、ますますRESISTANCE 77のことが好きになった次第です!尚、一部で誤解を受けているようなので、ココにも明記しておきますが、"RESISTANCE 77はファシズム/レイシズムとは一切関わりがありません"。まぁ、デリケートな質問ってそのことなんですけどね…。
ともあれ、青春返り咲きを狙ったかのショボい再結成組とは一味違う、True Punk & Oi!バンド:RESISTANCE 77、そのヴォーカリストであるOddyの言葉の一つ一つをお楽しみくださいませ!

PHOTO:Dave Ugly Punk Photography

■あなたが初めて聴いたパンク・バンドって何でしたか?SEX PISTOLS?また、あなたはそれをどのように感じましたか?
「NEW YORK DOLLS、STRANGLERS、CLASHで、俺たちは当時16とか17歳だったな。そのサウンドは新しくて荒々しかった。爽快でいて、これまでとは違っていたのさ。そして、誰にでもできることのように思えたんだ」
■結成する際に影響を受けていたバンドは何になりますか?SEX PISTOLSやCLASH、STIFF LITTLE FINGERSとかでしょうか?
「おい、それをどうやって知ったんだ?お前が挙げたバンドはまさに俺たちに影響を与えたバンドだよ。2人の兄弟、GaryとGuyが楽器を購入した(ドラムとギターだったな)。俺とGary、Guy、それに他の友人たちとで定期的にギグに通っていてね、そうしていたら自分たちでもバンドをやりたくなったんだよ。GaryとGuyはもう楽器を演奏していたから、俺はシンガーとして志願した。オーディションではSTIFF LITTLE FINGERSの"Wasted Life"を、自分の寝室で歌ったもんさ。Garyは階段の下でそれを聴いていた。俺があいつの目の前で歌うなんて、馬鹿みたいなことに思えたからさ」
■80年代初頭にはどんなバンドとよく共演していましたか?今でも覚えている、ショーでのハプニングは何かありますか?
「初期の頃で一つ覚えているのは、ノッティンガムでTHE EXPLOITEDと共演したギグだな。俺たちの地元でのギグだったから多くの人たちはRESISTANCE 77を見に来ていて、THE EXPLOITEDはお呼びじゃなかった。俺たちの演奏が終わるとみんなTHE EXPLOITEDが始まる前に帰ろうとしたんだけど、警備員がドアを閉じたせいで出られなくなってケンカになっていたよ。俺たちはFLUX OF PINK INDIANSやTHE 4 SKINSなんかとも共演したものさ。ウェールズでSUBHUMANSのサポートをしたとあるギグでは、俺たちが3曲やったところでステージが崩壊したこともあったな。ショーはそのまま終わったよ」
■Riot City Recordsのコンピレーション『Riotous Assembly』に参加していたり、同レーベルから1stシングル『Nowhere To Play』をリリースしましたよね。どのようにしてRiot City Recordsとは知り合ったのですか?オーナーのSimon Edwardsとの思い出は何かありますか?
「Simonが突然俺たちに連絡してきたんだ。そして、コンピレーションに1曲参加したくはないかと訊ねてきた。その曲が"Bricks In Brixton"なんだけど、この曲は俺たちが初めてレコーディングした曲でもあるのさ。シェフィールドにある4トラックのスタジオで録ったんだったな。80年代初期にイングランドで起こった暴動について書いた曲なんだが、俺た



ちはこの曲で、政治家たちが人々の声に耳を傾けなかったことや、問題の解決には時間が必要なこと、そしてこの国が人種的に分断されてほしくないといった、自分たちの意見を歌っていた。俺たちはSimonと会ったことはないんだ。でも、彼との仕事はやりやすかったな。彼は俺たちの音楽スタイルを好んでいたから、EPのリリースをオファーしてきた。それが『Nowhere To Play』になったんだ。俺たちはギグができる場所を探すのに苦労していたから、それでこのタイトルにしたのさ。80年代初期は、暴動が都市から都市へと飛び火していた。そのせいで当時のイングランドでは、ギグの会場はパンクに対してその門戸を閉じていたのさ。このEPは、あの頃NMEと肩を並べていたミュージック・ペーパー、Soundsのパンク・チャートのトップ10に数週間に渡ってランク・インしていたんだぜ」

■だけど2ndシングル『Vive Le Resistance』と1stアルバム『Thoroughbred Men』はRot Recordsからのリリースでしたよね。どうしてRot Recordsから出すことにしたのですか?『Wet Dreams』にも参加していますし、Rot Recordsのオーナーがやっていたバンド、RIOT SQUADとも親しかったのでしょうか?

「そうだね、俺たちはRIOT SQUADのことはよく知っていたし、今でもオリジナル・メンバーの何人かとは連絡を取り合っているよ。メンバーでもありRot Recordsを始めたDunkがアルバムをリリースしたくないかと訊いてきて、それが最終的に『Thoroughbred Men』になったんだ。この作品は、カントリーとウエスタンをやっているシンガー・ソングライターのスタジオで録音とミックスを行なったんだが、3日間で全てを終えたんだよ。最初のうち、Dunkは俺たちがそこで何をしているのか疑問に思っただろうけど、最終的には俺たちが作ったものをかなり気に入ってくれたね」

■『Vive Le Resistance』はブラジルのNew Face Records(OLHO SECOのFabioがやっていたレーベル)からも再発されていますが、タイトルが『Russia』に変更されていますよね。これはどうしてですか?

「数年前まで、俺たちはそんなものがリリースされていたことすら知らなかったんだ。だからタイトルが変更された理由も分からない。つい最近、スコットランドに住む友人からそのレコードをもらったけど、このリリースについて、俺たちの口から言うことはないね」

■シングル『You Reds』はResistance Recordsからのリリースですが、これは自主レーベルですか?最近の作品はR27 Recordsから出していますが、これも自主レーベル?

「あぁ、Resistance Recordsは『You Reds』のための、一度きりのレーベルだったんだ。この曲はノッティンガム・フォレスト・フットボール・クラブへのオマージュなんだよ。ベーシストのKieronが熱烈なサポーターだったこともあってね。あいつはStuart Pearce(※Psychoというニックネームで呼ばれていた有名なサッカー選手)とも知り合いになったんだけど、Stuartはパンクが好きでさ、RESISTANCE 77のファンだったんだよ。彼と、ノッティンガム・フォレストの選手の何人かと友情を築くことができたおかげで、彼らがレコーディングに参加して歌ってくれることになったんだけど、レコーディングを予約していたその週末に、彼らはイングランドの代表戦に呼ばれてしまってね。それで俺たちは彼ら抜きで進めなければならなくなったんだ…。残念だったね、もし実現したらバンドにとっては最高だったんだけどさ。Captain Oi!から何枚かリリースしたあとに、俺たちは今後のリリースはもっと自由にやりたいと思うようになって、それで自分たちでR27 Recordsを設立したんだ。始めるにあたっては、Captain Oi!のMark Brennanが励ましと手助けをしてくれた。彼の長年に渡る協力にはものすごく感謝しているよ」

■アルバム『Long Time Dead』のジャケットにはSid ViciousやJoe Strummer、Joey Ramone、Johnny Thundersの墓石が描かれていますが、Joey RamoneとJohnny Thundersというのはちょっと意外で驚きました。ニューヨーク・パンクも好きで聴いていたんですか?

「うん、もちろんさ。俺とKieronは幸運にも初期のRAMONESのライヴをシェフィールドで見ることができたんだ。俺はスピーカー横に設置された柵の真正面にいたせいで、その後の数日間、耳鳴りが止まらなかったよ。Johnny Thunders & The HeartbreakersはKieronのお気に入りのバンドの一つだったし、初期のニューヨーク・パンク・シーンからはとても影響されたな。だからどうしてお前が驚いているのか不思議だよ」

■アルバム『Survival Of The Richest』のジャケットはフリーメーソンっぽいデザインですよね?これはどんな意図があるんですか?

「アルバムのアートワークに悩んでいたんだけど、USAツアーに行ったときの1ドル札が財布に残っていたのさ。それでこのアートワークを閃いたんだ。タイトルが『Survival Of The Richest』だから、このデザインはピッタリだし良いアイデアだと思ったんだよ。ちなみに、俺たちは"イルミナティ"(※秘密結社)のメンバーではないからな!」

■SHAM 69の"I Don't Wanna"のカヴァーをアルバム『No Escape』に収録していますが、やっぱりSHAM 69はあなたにとって別格なバンドですか?2つのバンドに分裂したりしていましたが、この件についてはどう思います?

「そう、SHAM 69はシェフィールドで俺が初めてライヴを見たバンドの一つだし、友人たちへ捧げるために『No Escape』で俺たちはあの曲をカヴァーしたんだ。最高の曲だよな。俺にとってのSHAM 69は一つだけしかありえない。そう、オリジナル・ラインナップでのSHAM 69だけさ」

■答えたくなかったら飛ばして頂いても構わないのですが、ドラマーだったPaul Marshall(Mushy)は90年代初頭、SCREWDRIVERに参加していましたよね。実際のところ、SCREWDRIVERについてはどう思っているのですか?

「その話しにはウンザリしているんだ。そうさ、彼は実際にあのバンドでしばらくの間、ドラムを叩いていたよ。俺たちの活動が停滞していたとき、前述したように、Mushyは別のバンドでドラムを叩いていたようだ。でも、俺たちはそれがなんてバンドだったのか知らなかったんだよ(ロックのトリビュート・バンドか何かだと思っていたんだ)。そのバンドが何だったの

かを知るまでに、しばらく時間がかかったんだ。俺たちは、Mushyのやったことに対して賛同はしていなかったことを明らかにして、彼とは距離を置くことにした。しかし『Long Time Dead』のレコーディングをしていたから、彼の代わりを務められるドラマーが見つからなかったんだ。いくつかのバンドとも相談した上で、俺たちは代わりのドラマーが見つかるまで、彼をそのままバンドに留めておくことにしたんだよ」

■RESISTANCE 77は、結成した1979年から休むことなくずっと活動を続けているんですか?それとも活動を停止していた期間がありましたか?

「80年代後半から90年代前半にかけては、たまにギグはやっていたんだ。だけどもう曲のアイデアにも枯渇していた。だからしばらくの間、バンドに全然面白味を感じなくなっていて、最終的にはギグから何年も遠ざかるようになっていたのさ。振り返ってみると、その頃にMushyは自分の活動をしていたんだろうな。それで一旦、自分たちの腰を据えないと、バンドを存続できなくなると思ってね、新曲を作り始めたんだ。そしたらCaptain Oi!がアルバムのオファーをしてくれて、それが『Retaliate First』になったのさ。この作品がバンドに若さを取り戻すための第一歩となったね。アルバムをレコーディングすると、ギグにも誘われるようになったよ。過去にやっていたときと同じくらい、俺は今も楽しんでいる。バンドのおかげで若さをキープできるからな、ハハハ。俺たちのソングライティングもより良くなっているし、ラインナップ、そしてサウンドも、RESISTANCE 77は恐らく現在ベストな状態にあるぜ」

■けど35年以上も音楽スタイルは不変ですよね。それは本当にすごいことだと思います!曲作りの秘訣は何でしょうか?

「褒めてくれてありがとう。俺たちは常に音楽的にはより良いものであろうとしているけど、曲作りに関しては自分たちのルーツを守り続けている。フックとメロディはすごく重要だね。歌詞は現代が抱えている問題をずっと扱っているんだ。あとは、ライヴのときに観客が参加しやすくなるような、シンガロングなコーラスとキャッチーなメロディは狙っているぜ」

■70年代や80年代のパンク・シーンと比較して、今のシーンは大きく様変わりしてしまったと思いますか?

「みんな年をとって皺が増えたな、ハハハ。パンクの初期の頃はみんなもっと楽しんでいたように思う。今は、シーンに政治性が強すぎるんじゃないかな。若い世代は物事をとにかく政治的な面に結びつけようとするし、過去を理解せずにあまりにも自説に固執してしまっている。まぁ、あくまでも俺の意見だけどな」

■同世代のベテランのパンク・バンドには、やはり共感を覚えますか?

「RIOT SQUADやTHE SEPTIC PSYCHOSといった、俺たちと同じ、第二世代のパンク・バンドかな。彼らは素晴らしいバンドなのにあまり評価されていないから残念だよ。いくつかのバンドは活動を続けようとしているが、多分、もう切り上げるべきだな。あまりにもバンドのラインナップが変わってしまっているし、もうオリジナルの頃の曲を再現できなくなっているから、結局は自分たち自身のトリビュート・バンドみたいになっちまっている始末さ」

■ところで、仕事は何をされていますか?バンドで生活しているのですか?

「残念ながらバンドは俺の本業ではないな。だから、真剣に取り組んでいる趣味だと思っているよ。俺はバーやレストランの座席を作る会社を経営しているんだ」

■ちなみにEU離脱の国民投票については、残留と離脱、どちらに投票しましたか?

「個人的な政治観を話し合うのは好きじゃないんだ。たとえバンドのメンバーとでもね。曲や音楽のほうが遥かに重要だから、その手のことについて議論したことはない。俺たちは政治的に中立なんだよ。国民投票の結果については、とにかくそれが現実さ。何が正しいのかは時が教えてくれるだろうね。まぁ、正直に言って、俺はブリュッセルのEUが定めたルールのいくつかにはウンザリしていたけどな」

■最近はどんな音楽を聴いていますか?知っている日本のバンドは?

「最近はアメリカのTHE INTERRUPTERSを毎日聴いているな。あとはDROPKICK MURPHY'S。昨年の彼らのツアーで共演してね、それから友人になったんだ。それに俺は車で旅に出るときに、CLASHの作品を持って行かなかったことはないね。DRONGOS 4 EUROPEも友人のバンドだけど、俺のプレイリストの上位に位置しているぜ。ドンカスター(※イギリス、サウス・ヨークシャー州の都市)の新しいバンド、INEQUALITY STREETも友人なんだけど聴いているよ。俺たちのリズム・ギター、Magziの義母は東京の近く、千葉からやって来た日本人でシノブというんだ。彼女は俺たちにTHE BLUE HEARTSを聴くのを勧めてきたな」

■『True Punk & Oi! Will Never Die』というシングルをリリースしていますが、あなたにとっての"真の"パンクとOi!とは?

「俺たちにとっての"真の"パンクとOi!とは、意見を押しつけられようとも、いかなる固定概念に縛られることなく反抗し、自分たちの声を上げることさ。政治家は全員同じ穴のムジナだし、白々しい嘘をついていやがるから、俺たちは今でも反政府だ。でも、だからといって無政府主義を主張しているわけではないぜ。メンバーは誰もモヒカンにしたことはないけど、昔は髪を染めて鋲ジャンを着たりしていたな…。今でもドクター・マーチンやコンバース、フレッド・ペリーやバンドTシャツなんかにはこだわっているよ…」

■今後はどんなことを予定していますか?

「日本ツアーだね(手助けしてくれないか?)!ニュー・アルバムにも着手していて、現在のラインナップとそのサウンドによる『Thoroughbred Men』の再録についても話し合っているよ。今でもライヴではこのファースト・アルバムの曲をかなり演奏しているし、曲自体も少し変化してきているんだ。年月を経て、良い具合に進化しているんだよ。それに、元々この作品は特に売れたからね!あとはUSAツアーも再びやりたいと思っている。次は西海岸かな。Rebellion 2017フェスティヴァルには出演が確定しているし、チェコへのミニ・ツアーや他のヨーロッパの国々でのショーも予定していて、アントウェルペン(※ベルギーの都市)ではTHE EXPLOITEDと共演するから、そいつは懐かしい感じになるだろうね」

■インタヴューさせてくれてありがとうございました。最後に日本の読者にメッセージをお願いできますか?

「RESISTANCE 77に関心を寄せてくれてありがとう。いつの日か日本でギグができたらいいな。俺たちが日本でどのくらい受け入れられるかも、すごく興味があるね。だからFacebookやウェブサイトで気軽にコメントしてくれよ。ライヴを見たり、自分でバンドを始めたりしてシーンをキープしていこうぜ。パンク・シーンに参加していこう。サポートをありがとう」



LASHING SPEED DEMONS VOL.25

今号のEL ZINEはAMEBIXのインタヴュー掲載ということで、このページも乗っかることにしました(ちゃんと載ってるんでしょうな、インタヴュー…)。当然ながら(?)このページでクラストとかアナーコ・パンク云々の話をすることはないんで(というか出来ないし…)、まずは改めてAMEBIXの足跡をたどりつつ(意外と、日本でまとまった記事になったことがあまり多くない)、AMEBIXの音楽の成り立ちに影響を与えて来た"ハードコア以外"の要素についても言及してみたいと思います。よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる



クリスとロブのミラー兄弟によってAMEBIXの前身バンド・THE BAND WITH NO NAMEがイングランド南西部のデヴォン州ダートムーアで結成されたのは1978年のことだった。当時のメンバーはロブ・ミラー(ヴォーカル)、クリス・ミラー(ギター)、クライヴ・バーンズ(ベース)、アンディ"ビリー・ジャグ"ことアンディ・ホー(ドラム)の4人。

THE BAND WITH NO NAMEは地元のホールを中心にライヴ活動を開始する。しかし当時のバンドにはまともに演奏出来るメンバーが一人もおらず、オーディエンスからビールの缶を投げつけられたりしていたとか。

当然ながら(?)パンク・バンドとしてスタートしたTHE BAND WITH NO NAMEだったが、ミラー兄弟は元々パンク・ロックに限らず、実に様々な音楽を聴いていた。ロブ曰く、THE DAMNED、KILLING JOKE、JOY DIVISIONといったパンク/ニュー・ウェイヴ勢以外に、BLACK SABBATHやデイヴィッド・ボウイやブライアン・イーノ、そしてJAPAN(!)やT.REX(!)なども好んでいたという。

AMEBIXのダークでヘヴィな音楽性に、BLACK SABBATHとJOY DIVISION、そしてKILLING JOKEが影響していたことはよく知られている。実際これらのバンドには、ロブは本当に入れ込んでいたらしい。

後にメタル・クラストの祖と呼ばれることになるAMEBIX。しかし彼らがクロスオーヴァーやスラッシュ・メタルに向かわなかったのは、AMEBIXがその後ブリストルをベースにDISORDERなどと活動していたのもさることながら、ハード・ロック/ヘヴィ・メタル方面の主要な影響源が他でもないBLACK SABBATHであったことによる部分も大きかったのではと思う。

そして一方にJOY DIVISIONとKILLING JOKE。自己の内面の暗い深淵を覗き込むような歌をつぶやきながらあの世に行ってしまったイアン・カーティス(JOY DIVISION)と、初期はいわゆる"ポジティヴ・パンク"に含めて語られたりもしつつ本質的にノイジーで時にダンサブルでさえあったKILLING JOKE…これらの影響をハードコア・パンクに持ち込んだAMEBIXのセンスが、彼らの音楽を特異なモノに仕立て上げていた。

DISORDERのバンド名もJOY DIVISIONの曲名に由来するというし、音楽的にはハードコアとの共通点があまりないJOY DIVISION…がハードコア勢に影響していたというのは興味深い。JOY DIVISIONのあのダークさがそれだけ大きなインパクトを持っていた、ということでもあるのだろう。

そしてAMEBIXがハードコア・バンドでありながらシンセサイザー奏者を擁していたことも、同時代のハードコア勢と一線を画する要因になっていた。一度解散するまでのAMEBIXでは、シンセサイザーはほとんど旋律を担当することなく、一貫してノイズ的な使われ方をしている。コレについてはHAWKWINDあたりの影響があったのかも知れない(AMEBIXと仲の良かったANTISECTも、ライヴでHAWKWINDをカヴァーしていたという)。

それにしても、JAPANにT.REX?…以前(2008年)DOLLの248号に載ったインタヴューではヒップホップも聴くと言っていたロブ、根っこは相当雑食な人らしい。THE BAND WITH NO NAME結成当時は



学生だったロブだが、学校を出た後はしばらくデヴォン州の地方紙で音楽のレヴューを書く仕事をしていたということで、様々なジャンルの音楽に対するオープンな耳の持ち主だったと思われる。

あと、ロブはMOTORHEADにもかなり影響されていたようだ。80年代のAMEBIXのライヴ写真やYouTubeの動画を見ると、ロブはマイクを高い位置にセッティングして、ベースを弾きながら上を向いて歌っている。コレは多分というか間違いなくMOTORHEADの影響だろう。

ともあれ、その後ベースがリック・ギャズビーに交代し、THE BAND WITH NO NAMEはAMEBIXと改名して、1979年には6曲入りのデモテープを制作。ロブによれば4本(!)しか売れなかったというが(本当かな…)、そのデモがCRASSの目にとまり、CRASSのレーベルからリリースされたオムニバス『BULLSHIT DETECTOR』(80年)に「University Challenged」が収録されたことから、AMEBIXはその名を知られるようになる。

「University Challenged」の時点では、AMEBIXの音はハードコアには聴こえない。ノイジーではありつつ、ダークなニュー・ウェイヴといった風でもある。ロブの歌いっぱなしなヴォーカルはパンク・ロック風ではあったが(そもそもAMEBIXはどの時期でも典型的なハードコアを演奏してはいなかったが…)。

その後、更にメンバーが交代し、ロブがベースを兼任するようになる。1981年には"ザ・バロン"(または"ザ・バロン・フォン・エイフィッド")ことロブ・ミラー(ベース、ヴォーカル)、"スティッグ・ダ・ピッグ"(または"スティグマス・マキシマス")ことクリス・ミラー(ギター、ヴォーカル)、マーティン(ドラム)という3人で活動していたAMEBIXだったが、当時はメンバー全員ヘロイン漬けで、昼夜逆転生活を送っていたという。結局マーティンは両親により精神病院に入院させられてしまうのだった。

マーティン脱退と前後してノーマン(シンセサイザー)が加入したバンドはブリストルに移り住んで、新たに"ヴァイルス"ことニール・ワーシントン(ドラム)を迎え、DISORDERやCHAOS U.K.とツルむようになる(皆様御存知と思うが、ヴァイルスはDISORDERと掛け持ちだった)。

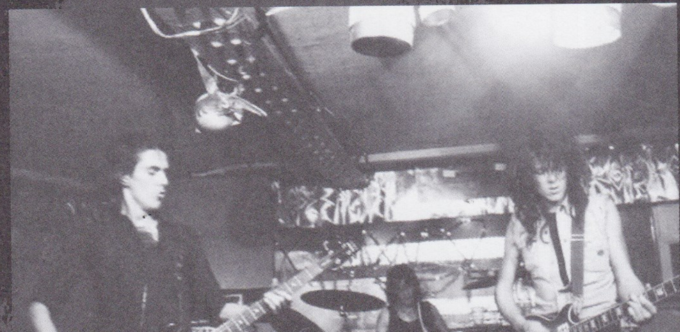
ブリストルに移ったAMEBIXはFLUX OF PINK INDIANSが運営していたスパイダー・レッグ・レコーズから1982年8月に4曲入りEP「Who's The Enemy」をリリースし、単独でのレコード・デビューを果たす。82年といえばもちろんUKハードコア大盛り上がりの年だったが、必ずしもスピードに走らないダークでヘヴィなAMEBIXのサウンドは、他のハードコア勢とは一線を画していた。

メタリックに、しかし訥々と刻むギター、不穏なシンセサイザー、シンプルでモノトーンにしてニューウェイヴィー(かつ時にトライバル)なドラム、そしてベンベンベケベケと津軽三味線のような(?)ベースを鳴らしながらぶっきらぼうに叫ぶヴォーカル。音楽的には、BLACK SABBATHよりかはKILLING JOKEに近かったと思う。一方で全体を彩るささくれ立ったノイジーな感触は、当時のバンドがDISORDERあたりと通じていたことを如実に表していた(「Curfew」は、AMEBIXには珍しい突進ハードコア・ナンバー)。

ここで話を少し戻すと…この時点でハードコア・バンドがBLACK SABBATHの影響を標榜していたというのは、かなり珍しかったはずだ(「Who's The Enemy」の時点でAMEBIXの音楽がBLACK SABBATHに似ていたワケではなかったとはいえ)。1982年当時のBLACK SABBATHといえば、2代目ヴォーカリスト、ロニー・ジェイムズ・ディオ(元RAINBOW)が脱退する前後(その後に加入したのはDEEP PURPLEのイアン・ギラン!)。リアルタイムではハードコアとはほとんど縁もゆかりもない存在だった。21世紀の今でこそBLACK SABBATHはあらゆるラウドなロックの元祖的な捉えられ方をしているが、82年の時点ではあくまでもメタル・ファンだけが聴くようなバンドだった(はず)。

当時"New Wave Of British Heavy Metal"(本誌VOL.16参照)のシーンで活動していたWITCHFYNDEやWITCHFINDER GENERALといったメタル・バンドには絶大な影響を与えていたBLACK SABBATHだったが、それらの英国メタル・バンド勢はパンク/ハードコアとはまったくリンクしていなかったし(例外中の例外はVENOMか。あと、ANGEL WITCHはパンクの影響をかなり受けていたという)、数年後にCATHEDRALでBLACK SABBATHの影響を前面に押し出すことになるリー・ドリアンも、82年の時点ではNAPALM DEATHに加入すらしていなかったのだ。アメリカのBLACK FLAGが『MY WAR』のB面でリスナーを驚愕させるのも、「Who's The Enemy」の翌83年のことだ。





その後80年代後半になると、パンク/ニュー・ウェイヴに発してネオ・サイケに向かったDOCTOR & THE MEDICSやTHE UNDERNEATHといったバンドが続々とBLACK SABBATHのカヴァーをリリースし、パンク以降のバンドにもBLACK SABBATHが大きな影響を与えていたことは可視化される。その頃のDISCHARGEのメタル化を思えば、当然80年代初頭のハードコア勢もBLACK SABBATHをはじめとするハード・ロック/ヘヴィ・メタルを聴いていないはずはなかったのだが、82年当時にそれを窺わせていた数少ないバンドのひとつがAMEBIXだったと思う(ANTISECTのメンバーたちもBLACK SABBATHが好きだったというが)。

ともあれAMEBIXは1983年2月、スパイダー・レッグ・レコーズから7inch「Winter / Beginning Of The End」をリリースする。食うや食わずのスクワット暮らしでドラッグに溺れる生活を"冬"という一語で象徴した「Winter」、そして"終わりの始まり"を告げる「Beginning Of The End」…AMEBIXはBLACK SABBATHが先鞭をつけた"ドゥーム・ロック"を、83年のハードコア・シーンの中で受け継いでいたと言ってもいいだろう(もっとも82年にDISCHARGEの「Doom's Day」もあったのだが)。

「Winter」で連打されるドラムとロブの絶叫は、BLACK SABBATHというよりもむしろ当時のインダストリアルに近かったが…(ちなみに70年代のBLACK SABBATHも、コカインに耽溺していた自分たちの姿を「Snowblind」という曲に凝縮している)。「Beginning Of The End」も、音楽的にはBLACK SABBATHよりもやはりKILLING JOKEに近いと思うが、ノイジーな演奏といい絶望的な叫びといい、ドゥーミーというか終わってる感は半端ない(これまた82年のDISCHARGEにズバリ「The End」という曲があったものの)。

ただ、AMEBIXは絶望や終末を歌いながら、歌うことでそれらを対象化し、そこから這い出そうとしていたのでは…と、個人的には思っている。だからこそ、その後の活動も続いて行ったのではないかと。

「Winter / Beginning Of The End」リリース後にはノーマンが脱退するが、バンドはトリオ編成で活動を続け、1984年には6曲入り12inch EP「No Sanctuary」がリリースされる。AMEBIXのメンバーがジェロ・ビアフラ(DEAD KENNEDYS)と知り合ったのは、このEPのレコーディング時だったという。



耳障りなシンセのノイズで始まる「No Sanctuary」だが、(歌詞は別として)音楽的には同時代のVENOMにかなり近いと思う(先の7inchでもそれらしい感触はあった)。AMEBIXのメンバーはVENOMが好きではなかったらしいが、それはヘヴィ・メタルの定型たるサタニックな歌詞が好きになれなかったのでは、と思われる。何を弾いているのかわからないような(?)ノイジーなリフ、ドカドカ突進するドラム、メロディ皆無の絶叫ヴォーカル…スピードこそ遅めながら、部分的にはほとんどVENOMだ。当時のVENOM同様に演奏技術があまりなかったが故に整合感が出ず、結果的にAMEBIXは典型的なスラッシュ・メタルやクロスオーヴァーに行かずに済んだのでは、とも思う。一方で(彼らなりに)メロディを追おうとすると、途端に侘しい感じになるのも実に独特だ。

ハードコア/クラスト・コアに分類されながらも2ビートの速い曲がほとんどなかったAMEBIXだったが、彼らが後のエクストリームな音楽に大きな影響を及ぼしたのは、バンドのサウンドがわかりやすい速さなどのインパクトによらない、底知れぬ重さとディープさを持っていたからではないかと思う。ヘヴィ・メタルならぬ"ヘヴィ・メンタル"な音楽だったとでもいうか。

その後しばらくはトリオ編成で活動していたAMEBIXだったが、1984年末に"ジョージ・ザ・ドラゴン"(または"ジョージ・スマットピッグ")ことジョージ・フレッチャー(シンセサイザー:THE SMARTPILS)が加入し、再び4人編成に戻る。その後ドラマーが"スパイダー"ことロバート・リチャーズに交代。そしてジェロ・ビアフラの誘いを受けたバンドは、ビアフラのレーベル、オルターナティヴ・テンタクルズから85年9月に1stアルバム『ARISE!』をリリースする。AMEBIXは、同レーベルからリリースされた初の英国バンドとなった。

『ARISE!』でのAMEBIXは、ギターの刻みなどそれまで以上にメタル色を強めていたが、それでもやっぱりメタルそのものにはなっていない(相変わらず一部VENOMに近い気はするし、タイトル曲なんかは相当メタルっぽいが)。全体にメタリックな感触ではありつつ、楽曲の構造はいわゆるヘヴィ・メタルとは一線を画し、やはりパンク/ハードコアに由来していると感じさせる。唐突な展開をプログレッシヴと評する向きもあるが、個人的には"天然"ではなかったかと思う(そして相変わらずスピードは控えめ)。

2005年のDOLL・216号に掲載されたインタヴューで、ロブは『ARISE!』のことを"自分たちにとってBLACK SABBATH的作品"と評しているが、それは音楽的にBLACK SABBATHに似ているということではなかった。そして広範な影響を彼ら流にまとめ上げたAMEBIXの音楽は、ブリストルで共に活動していたDISORDERやCHAOS U.K.(『ARISE!』にはガバが参加している)とも、少し後のクラスト・コアとも、そしてもちろん同じ85年にアルバムを出したENGLISH DOGSやONSLAUGHTともまた違っていた。『ARISE!』のCDのライナーノーツで、ロブは『ARISE!』について"パンクのアティテュードでヘヴィな音楽を演った、他にないモノだった"と語っている。

しかし、オルターナティヴ・テンタクルズにとって『ARISE!』はメタリック過ぎる作品だったようで、AMEBIXはレーベルからプロモーションに関するバックアップをほとんど得られないまま、結局関係を断つ。そしてジョージがバンドを脱退し、AMEBIXは再びトリオ編成となった。

その後AMEBIXはウォルヴァーハンプトンのヘヴィ・メタル・レコーズとの契約を得る。ヘヴィ・メタル・レコーズは名前のとおり、WITCHFINDER GENERALやTHE HANDSOME BEASTSといったNWOBHMのバンドを中心にリリースしていたレーベルだったが、それが何故




AMEBIXを出すことになったのかは知らない(その後はBROKEN BONESなんかもリリースしている)。ともあれ新たに"A・ドロイド"ことアンディ・ウィギンス(シンセサイザー)を迎えてスタジオに入ったAMEBIXは、1987年に2ndアルバム『MONOLITH』をリリースする。

この時点で、AMEBIXは更にメタル化を進めていた。演奏技術の向上と作曲の習熟がスムーズにメタルっぽく聴こえる音に結び付いたことは間違いないだろう。楽曲の構造もかなりメタルっぽくなっているし、スラッシーなリフや叙情的なアルペジオや速弾き(?)ギター・ソロも『ARISE!』以上にフィーチュアされている。ロブはこの頃にはドイツのACCEPT(英国盤はヘヴィ・メタル・レコーズからリリースされていた)やデンマークのMERCYFUL FATE(本誌前号参照)なんかを好んでいたというし、意識の如何に寄らずヘヴィ・メタルの影響を大きく受けていたモノと思われる(ロブはAMEBIXがクラスト・コアにカテゴライズされることが不満だとも発言している)。ただ、この時点でもクラスト的なプリミティヴさは保持されていたし、シンセの奇妙なノイズも随所に挿入されていて、ヘヴィ・メタルそのものには聴こえない。AMEBIX…本当にストレンジでオリジナルな音を作り上げたバンドだったと思う。

しかし、バンドの活動は行き詰まっていた。スティッグのドラッグ中毒もひどかったらしい。ヨーロッパまで精力的にツアーしていたAMEBIXだったが、金銭的に報われることもなかった。サラエヴォ(旧ユーゴスラヴィア)でツアーを終えて帰国した後、2曲のデモを録音したAMEBIXだったが、結局1987年末に解散となる。

AMEBIXが87年に録音した2曲のデモは、その後『ARISE!』のCDにボーナス・トラックとして収録されている。「Right To Ride」でのヴォーカルはかなりレミーっぽい(ロブはMOTORHEADの『ORGASMATRON』にAMEBIXの影響を感じる、という大それた発言をしているが)。一方で「Beyond The Sun」でのロブのヴォーカルは、「Curtain Call」(『BLACK ALBUM』)あたりのデイヴ・ヴァニアン(THE DAMNED)、あるいはイアン・カーティスなどを彷彿とさせる。

AMEBIX解散後、スティッグとスパイダーはジョージを呼び戻し、THE SMARTPILSのティム・シャープランド(ベース)を引き入れてZYGOTEを結成するが、長続きはしなかった。ロブは音楽をやめてしまい、90年代にはスコットランドのスカイ島に移り住み、刀鍛冶(!)の仕事に専念することになる。そうしてあっという間に時が経った。

解散後、AMEBIXに対する評価はむしろ高まっていく。アルバムが再発されたりEPがまとめられて編集盤になるだけでなく、ブートまがいの未発表音源やライヴ盤が次々にリリースされるのだった。

カナダのスラッシュ・メタル・バンドVOIVODの一連のアートワークは、明らかにAMEBIXを連想させるモノだった。ブラジルのSEPULTURAが1991年にリリースしたアルバム『ARISE』がAMEBIXのアルバム・タイトルにちなんだモノだったことは、間違いないだろう。初期のNEUROSISへの影響については、90年代の時点で行川和彦さんが(DOLL増刊「パンク天国2」で)指摘していたし、いわゆるメタルパンクへの影響については言うまでもないだろう。

解散から21年…2008年、DOLLの248号に掲載されたインタヴューでは、ロブは再び曲作りをしていると語っているが、その時点ではAMEBIXの再活動については一言も触れていない。しかしその後、AMEBIXは突然再始動するのだった。

AMEBIX復活については、本誌VOL.2にも記事があるので、ここではなるべく重複を避けたいと思う。ともあれロイ・マヨルガ(ドラム:元NAUSEA～SOULFLY)を迎えて、ロブとスティッグはAMEBIXの名を復活させる。

復活したAMEBIXは、80年代にはやらなかったアメリカでのツアーも実現させ、TRAGEDYをはじめとする当代のハードコア勢とも共演を果たす。そして10年には12inch「Redux」がリリースされる(本誌VOL.8で行川和彦さんがレヴューしている)。この時点では「Arise!」をはじめとする旧レパートリー3曲が再録されただけだったが、当然それだけでは済まなかった。

11年6月、AMEBIXは片面1曲の12inch「Knights Of The Black Sun」をリリース。続いて9月には実に24年ぶりとなる3rdアルバム『SONIC MASS』をリリースする。演奏技術もプロダクションもかつてとは較べものにならないレベルで(何しろドラムが上手い)、ロブのヴォーカルも叙情と情感に溢れ、シンセサイザー/キーボードもかつてのようなノイズ発生装置的な使い方よりもシンフォニックな荘厳さを与える方向で作用している。しかしAMEBIXはやはりAMEBIX…この時点でもメタル度を更に増しつつメタルにはなっていないのだった。

『SONIC MASS』から、既に6年近くが経過している。ロブは2012年の時点でAMEBIXについて「もうやらない」と発言し、その後15年にはロブがVOIVODのアウェイ(ドラム)らと組んだ新バンド・TAU CROSSのアルバムもリリースされているが、AMEBIXについてはやり切ったのか、12年以降どういう状態なのか…が、今号のインタヴューで明らかにされるのかどうか(って、本当に載ってるんだろうなインタヴュー…)。



AMEBIX
THE POWER REMAINS

AMEBIXのダークなサウンドに触れる度に、このサウンドの源になっているものが何なのか気になっていた。今回、ギタリストのStig Millerに接触し、バンドの始まりや彼らの地元のパンク・シーンについて話すことができた。みんなが楽しんでくれることを望むよ。

INTERVIEWED:Luis

■ヘイ、Stig。まずはちょっと自己紹介をしてもらえるかな?

「俺の名前は"Stig" C Miller。AMEBIXの共同設立者にしてギタリストで、他にも長年に渡って色んなバンドやプロジェクトをやっているぜ…。俺が17歳くらいだったときからな…。1978年から、ずっとバンドをやっているのさ」

■あなたは何から影響を受けてギターを始めたの?



「俺の眼前に横たわっていた、退屈な人生というやつから逃れる手段、もしくは、どうにかそいつを追い返す手段に思えたんだ…。音楽を通して変化をもたらしたかったんだ」

■AMEBIXを始める前にはどんなバンドを聴いていた?

「初めてライヴを見たバンドはHAWKWINDとTHE PINK FAIRIESだった。70年代のはじめで、ベースを弾くLemmyを見た俺はまだたったの13歳だったよ。しかし、あの状況は俺の想像力に大いなる刺激を与えてくれたな。あとはT.REXとTHE STOOGESの『Raw Power』を聴いていた。…その後に、様々な初期のパンク・バンドが俺にインスピレーションを与えてくれたのさ」

■メンバーはどのようにして出会い、バンドの結成を決意したのかな?

「1978年、俺はジャージー(※イギリス領ジャージー島のことだと思われる)のホテルで働いてて、ギターと練習用の小さなアンプを買ったんだ。それから故郷の小さな町に戻ると、俺の弟(Rob The Baron。あいつは当時、まだ学校に通っていたな)と、あと友人の何人かとでバンドを始めることにしたんだよ」

■バンドを始めるにあたって、頭に描いていたサウンドは明確にあった?

「全くなかったね、俺たちは演奏の仕方も分かっていなかったんだ…。何かしらの形になるまで、俺たちはひたすらやり続けたよ…。もし演奏方法を学んでいたとしたら、俺たちのサウンドは他の奴らと同じようなものになっていただろうよ…。だけど、当時はパンクが始まったばかりの頃だったから、俺たちは色々と試して、やりたいことを何でもやることができたのさ」

■あなたたちは廃城でリハーサルをしていた、なんて話しを聞いたことがあるんだけど、本当かな?

「いや…ハハハ、俺たちがリハーサルに使っていたのはダートムーア(※デボン州南部)の端にある、古い館だったよ…。かなり薄気味悪い場所だったな」

■どうしてAMEBIXという名前にしたの?

「俺たちが生み出すエナジーを説明するために、俺が思いついたバンド名なんだ…。そう、言葉の響きさ…、英語としては何一つとして意味を成していないんだが、マントラ(真言)のように、それ自身を表しているんだよ…」

■歌詞について、あなたたちが伝えたかったメッセージとは基本的にどんなことでした



か?

「俺の弟が主に歌詞を書いていたんだ…。だけど、俺は"力を与えたかった"のさ。人々が邪悪なもの、それは秘儀的であったり、政治的であったり、また個人的な意味合いでもあるんだが…、を払いのける助けになればと思っていた」

■初めてのデモはいつリリースしたのかな?何というタイトルだった?

「のちにいくつかデモは作ったんだが、バンドのかなり初期段階において、俺たちは何曲か練習していたんだ。そしてみんなで金をどうにか出し合って小さな安いスタジオに入ると録音した。それから、俺たちのためにリリースしてくれる奴がいないか探したのさ…」

■曲にキーボードを加えるというアイデアはどうやって思いついたのかな?

「俺たちの知り合いにキーボードを持っている奴がいたんだ…。"こいつはいいな、弾いてくれよ"、"…え、いや、ちょっと"、"……よし、決まりだ!俺たちのバンドに入りたいか?"、"………(無言)"、そんな話しさ、ハハハ」

■バンドのアートワークを担当していたアーティストは誰なの?

「俺の弟か、少しは俺もやっていたが、まぁ、ほとんどは弟だな」

■あなたたちの地元のパンク・シーンについても少し話してもらえるかな?そこでは、AMEBIXは最初のパンク・バンドの一つだった?

「時が異なっていたのさ。"パンク・シーン"が登場したとき、この田舎の小さな町には"パンク・シーン"なんて存在していなかった。一体何が起こっているのか、1970年代当時にそれを知る唯一の方法は、自分が手に入れられる限りの、ありとあらゆるミュージック・ペーパーを読み漁るだけだったのさ。…みんなは俺たちを見て"エイリアンがやって来た"と思っただろうね。…俺たちが自分たちの手で作り上げたものは、本物の"パンク・シーン"ではなかった。何千人もの若いキッズが都市でやっていたことを、ここにもたらしただけなんだよ」

■対バンするのが好きだったバンドは?

「書き切れないな…。気の良い奴らがやっているバンドとなら、俺は喜んで共演したものさ…。長年に渡って大抵、俺たちは良い奴らと一緒にやってこられたと思う…。クソ野郎も何人かいたが、多くはなかったぜ」

■オートバイのシーンとは関わっていたのかな?

「俺はカスタムしたバイクを持っていたし、バイクは好きだった。だけど、"バイク・シーン"はそんなに好きじゃなかったな…。弟は"バイク・シーン"やバイカーと関わっていたが俺はそうじゃなかったんだ。俺はバイクが好きなだけだったのさ」

■AMEBIXで初めて敢行したツアーはいつのこと?どこに行ったのかな?

「普段はブリストルのDISORDERやCHAOS UKと一緒に、みんなでバンに乗って数週間おきにギグをやっていたな。…それを"ツアー"とは言わないのかもしれないが、そうやってライヴで演奏していたんだ。…80年代の初期にはノッティンガムでANTI SECTやNAPALM DEATHと共演していたな。数多くのバンドがいて演奏していたんだ…。そうこうしているうちに、俺たちを支持する奴らが現われてきたから、俺たちは自分たちでギグを企画するようになったのさ」

■AMEBIXの全アルバムのうち、お気に入りの一枚というのはあるかな?また、その理由は?

「一枚というのはないかな…。どのアルバムにもどこかしら良いところがあるからさ。俺の控えめな意見としてはね、ハハハ」

■アルバム『Monolith』をリリースした1987年にバンドは解散したけれど、何か特別な理由があったの?

「俺が思うに、弟はもうこれ以上やりたくなかったんだろうな…。それに…、当時は色んなことが今とは違っていたんだ。俺たちはメッセージを打ち出そうとしていた。しかし当時、俺たちがやろうとしていたことを誰も全く理解していなかったし、認められることもなかった…。山にある巨岩を押すようなものさ…。とんでもない労力をかけても、報いは皆無だった…。あの時代に俺たちは早すぎたんだよ…。AMEBIXを必要とするレコード・レーベルもなかった。当時のあらゆる音楽の傾向に、俺たちはフィットしていなかったからな」

■あなたたちの周りの"シーン"はどのようにして変わっていった?また、それはあなたたちの音楽に影響を与えたのかな?

「そうだな、今でこそ、AMEBIXは一般的な音楽シーンにも"受け入れられている"。…でも、正直に言うと、俺はみんなから嫌われて、俺た







"Wrap up warm, you'll catch your death. Don't let your death catch you. The winter tears the earth apart, let' s hope we see it through." ~Winter~







ちがやっていることを理解されなかった時代のほうが好きだったな。…そう、まさに“世界に背いて”いたのさ。…ミュージック・ビジネスがバンドを破滅させる。…クソッタレ!俺はそう言うのさ……。俺の音楽に影響があったかって?…そんなものはないよ」

■AMEBIXのあと、あなたはZYGOTEを結成したよね。このバンドについても少し話してもらえる?

「ZYGOTEは俺とSpider(AMEBIXのドラマー)、あとは友だち何人かで始めたんだ。演奏を続けたかったのさ。ヨーロッパ中で飲みまくったりドラッグをやったりして大いに楽しんだ…。しかし、夢中になってやっていたのに続けることができなかった。…ムカつくことに俺は病気になっちまったからさ…。それでも楽しい時間を過ごせたよ…。俺たち自身のサウンドを確立するだけの時間がなかったのが残念だったけどな…。でも、ときに人生とはそういうものだろ…」

■どうして2009年にAMEBIXを再結成しようと思ったのかな?

「弟がDVDとそれに収録するインタヴューや古い映像なんかに取り掛かっていたんだが、そのDVDのサウンド・トラックとして使うため、昔の楽曲を手直しする必要に迫られたんだ…。それで俺たちはアイルランドにあるリハーサル・スペースにRoy Mayorgaを招いたのさ。そうして演奏をしてみたら…、このすばらしくタイトなドラマーと共に再び演奏することが正しいことのように感じられたんだよ。…それでバンドとして再結成することに決めたんだ。…全てはあっという間に、そして混沌のままに進んでいったな」

■2009年には北米ツアーを敢行したけれど、あれほどまでに大盛況になるなんて思っていた?

「物好きな観客が数人いてくれることを、俺は期待していた…。ところが、そいつはとんでもない“大成功”だったな!どこもソールド・アウト!…素晴らしかったぜ。…あのツアーで、俺たちの存在が正当化されたように感じたよ。…昔から、あのツアーみたいに物事が進んでいたらな。…まぁ…神のみぞ知るってところさ」

■僕はあなたたちを見るためにBowery Ballroomへ行ったんだけど、ショーは大入りだったね。NYCでの思い出は何かある?

「最高の雰囲気だったな。…心の底から、“超越的”に感じられたギグの一つだったよ。…どんなことでもできるような…素晴らしい記憶だね」

■『Sonic Mass』は2011年にリリースされたけど、このアルバムはどのようにしてレコーディングされたの?

「本当に大急ぎで…、何曲かはツアーやリハーサルで様々な場所に滞在している間にレコーディングしたんだ…(RoyはPro Toolsとコンピューターを持っていたが、それを使うというアイデアは却下した。…個人的には、レコーディングのスキルを学ぶことには興味を抱いたけどな)。…アルバムの後半部分はノーザンプトンのスタジオでレコーディングしたんだ…」

■2017年のAMEBIXにはどんな予定があるのかな?

「本当に何も予定してないな…」

■あなたが今、取り掛かっているプロジェクトは何かある?

「俺はちょっとしたソロ・プロジェクトをやっていて、独学でレコーディングのスキルも勉強しているところさ。過去に6年間、病院にも通っていたが体調も良くなっているしね。…FacebookのページやBandcampも持っていて、そこにはよりエクスペリメンタルな楽曲をアップしている。クソみたいなデジタル処理を施された、フラットなサウンドの時代において、“アナログなサウンド”を保つにはどうすればいいか、その良い勉強にもなっているよ。…プラグ・インの少ないアンプとマイクを使ってね。…FacebookはRecreational Democideという名前だ。…気になるならチェックしてみな」

■インタヴューさせてくれてありがとう。日本のみんなに何か言いたいことはある?

「ハロー、日本のみんな!……stay true!…Stigより」





North America Pogo Attack!!



POK GAI

カナダのオタワを拠点に活動しているポゴ・パンク・バンド、POK GAI!INSTANT AGONY～初期CASUALTIES、そして日本の90'sポゴ・パンク勢を彷彿とさせるサウンドで、曲名からして"Pogo City"に"Capital City Party Punks"と、とにかくサイコーなのだ!
ヴィニール音源としてはこれまでにTHE ERECTIONSとのスプリットと単独作を一枚ずつリリースしており、今年2017年にはニュー・シングルも予定している(この号が出る頃にはもうリリースされているかも)。
パーティ・パンクスっていうから、何でもかんでも"イェーイ!!"みたいな、能天気なノリかと思っていたら、シッカリとした分別のある回答を寄せてくれました(※とっても長いです)。
ちみなに、上記の謎の漢字っぽいバンド・ロゴですが、実は"POK GAI"のスペルを組み合わせて、漢字風にしていることに気がつきましたか?ナイスなアイデア&デザインにすごく感心しました(笑)。

PHOTO:Richard Ramos

■POK GAIの結成と、これまでにやってきたバンドについて聞かせて。

Will(Vo)「俺たち4人で新しいバンドを始めて、オタワのパンク・シーンに加わりたかったのさ。俺たち全員が、同じようなサウンドを目指していたからね。そして、ツアーをしてまわり、このバンドに自分の人生の一部を捧げたかったんだ。俺は今でも他に2つバンドをやっていて(SHACKLESとALCOHOL FUELED)大忙しだけど、このプロジェクトを断わることなんてできなかったよ。3人の親友が、俺と一緒に最高の音楽をやろうって言うんだぜ?俺はこのバンドをすごく楽しんでいるよ。俺はオタワでベストな会場、House Of Targというキッチンを運営しているんだけど(ほぼ毎晩、ラウドな音楽がかかっているぜ)、THE ERECTIONSを連れて行ったことがある。きっと彼らはすげークールな場所だと思ってくれただろうな。毎日、俺は"ピエロギ"を作っているんだが(ほとんど餃子みたいなもんだけど、違うんだよな)、ここのオーナーたちはみんなミュージシャンだから、居心地がいいんだ。ツアーに出たくなったら、いつでも行けるしね」

Tasha(Dr)「私がやっていたバンドを挙げるわね。GET WRECKED、WHISKEY BENT AND HELL BOUND、RAW VIOLENCE、RULE OF THUMB、それにカヴァー・バンドも。最近やっているバンドはSLUMLORDとPOK GAIよ。それと、Willがドラムを叩いているALCOHOL FUELEDというバンドがあるんだけど、ショーの最中にウッカリ彼が眠っちゃったときには、私が代わりにドラムを叩いているの!でもこれって別の話しね、ハハハ!」

Tim(Ba)「POK GAIの結成については2年くらい前から話していたんだ。メンバーの才能をもとにしたバンドをやりたかったんだよ。全員がようやく揃って音楽に取り組み始めたんだけど、リリースした1st EPに収録した5曲に一年近くも費やしてしまったんだ。バンドの経歴だけど、スタジオで練習をしてカヴァー曲をやる以上のことをしたのは、ALCOHOL FUELEDとPOK GAIだけさ。両バンドともまだやっているし、どちらもツアー・バンドとしてアクティヴに活動しているよ」

Matt(Gu)「俺はGONE DRINKIN'…あとはSILENT ORDERでプレイしていたよ」

■どうしてパンクに夢中になったの?それは何歳くらいのことだった?

Will「覚えているのは、俺が小さな子供だったとき、父親と繁華街に行ったんだ。そしたら、ストリートの角で、派手な格好をしたスパイキーなパンクスが物乞いをしていたんだよ。俺はこう思ったね、"この人はなんてクールなんだ。大きくなったら彼みたいになりたい"と

ね。14歳くらいになると、ハイスクールの奴らの大多数と同じようにはなりたくなかったんだ。スポーツにはムカついていたし、ラジオから流れてくるクソみたいな音楽も嫌いだったし、みんなが着ているような服も気に入らなかった。学校にもムカついていたよ。そんなときに、俺はスケボーを始めて、地元のパンク・ショーに通うようになった。それから何年もかけて夢中になっていったんだよ。なんて素晴らしい、有意義なコミュニティであるかに気がついてね。俺の姉の一人もショーによく行っていたんだけど、俺は彼女のCDを盗んでは初期のパンクを聴いていたよ。それがイケてることだと思ったんだ」

Tasha「私は17歳くらいのときからドラムを叩いているんだけど、色んなスタイルの音楽をやってきた。パンクからメタル、カントリー、ロックンロールって感じでね。数多くのパンクやメタル・バンドでギターを弾いてきた兄がいる環境で私は育ったから、とてもラッキーだったのよ。それに私が11歳のとき、父がオールエイジ・ショーに私を連れていってくれたのを覚えている。クラブは暗くて、天井からチェーンがぶら下がっていたり、そこいら中にゴシックな調度品が置かれていたわ。キッズは鋲や棘を身に着けタトゥーまみれ、私がモッシュ・ピットとパンク・バンドのライヴを目の当たりにしたのも、そのときが初めてだったな。私はそれからものすごく夢中になったの。すぐにでもあの場所に戻りたかったし、一員になりたかったのよ」

Tim「僕は何よりも最初に、パンクにのめり込んだよ。僕が12歳くらいだった頃に、兄がミックス・テープやCDをくれてね。恋に落ちたってわけさ。当時はまだパンクの持つ政治的な部分には気づかなかったけど、もっと聴いていくうちにそれに気づいたんだ。歌詞の背後には、すごいメッセージがあることにね。そして、学校で与えられていたものとは全く異なる世界に、僕は目覚めていったのさ」

Matt「俺がまだかなり若かった頃に、初めてパンクに夢中になったんだ。パンクとメタル、その両方にね(今でも夢中だよ!)。一人のティーンエイジャーとしてショーには足を運んでいたけど、バンドをやったりショーをブッキングしたりとかは、20代前半になるまではやらなかったな」

■POK GAIの意味を調べたんだけど、これは広東語で"Go die on the street"になるのかな?メンバーには中国系カナダ人か、中国からの留学生とかがいるの?

Will「"Pok Gai"という言葉は、直訳すると"Go die in the street"だけど、違う文章でも使えるフレーズなんだよ。文脈にもよるけど、"Drop dead"とか、あとは"Go fuck themselves"や"Fuck off"という意味合いでもかなり取れるね。広東語のPOK GAIという名前にしたのは、攻撃的でユーモラス、そして酷い悪態だからさ。俺は中国系カナダ人だし、広東語は母語なんだよ。俺たちのバンドを、俺のルーツである言語で表現するのはナイスなことに感じたんだ…。多くの中国人が不快に思うかもしれないけど、俺がそうしたかったんだよ!!」

■"Pok Gai"という曲にある歌詞の一節、"Ngo dai hai Pok Gai"というのはどういう意味?

Will「"Ngo dai hai Pok Gai"は"We are Pok Gai"って意味だよ」



■今のところ、持ち曲はどれくらいあるの?作詞や作曲のプロセスも聞かせて。

Will「他のメンバーに回答は譲るよ。俺は歌詞を書いてるだけさ。Rhymezone.comを使っているよ。感謝しているぜ」

Tasha「今のところ9曲あるわ。これまでに5曲を発表していて、2016年12月には更に4曲を完成させた。曲作りの過程はとっても簡単。私たちは練習しているときもすごく仲が良いし、自分たちがやっていることの好き嫌いをお互いにズバズバ言うからね。曲は全てMattとTimが書いてくる。通常、彼らがリフをいくつか持ってきて、その中から気に入ったものを私たちは採用するの。そこから作り上げていく。私はドラムをつけ加えて、メンバー全員で歌詞に取り掛かるんだけど、でもほとんどの歌詞はTimとWillとMattが書いているかな。曲作りに時間がかかり過ぎることはないんだけど、ライヴで演奏するまではしばらく寝かせておくの。私たちが出そうとしているサウンドと、その曲の全てに満足できるか、確信が欲しいからよ。初めてのショーの日程を決めるまで、8ヵ月間もジャムっていたしね」

Tim「今のところオリジナルが9曲とカヴァーが2曲あるんだ。簡単に出来上がった曲もあるけれど、ゴミ箱に投げ込んだアイデアの数のほうが、残ったものよりもはるかに多いね。何週間もかかる曲もあれば、一発で決まる曲もあったりさ」

Matt「俺たちの曲の多くは、まず俺とTimとで作曲する。それから、俺たちの曲のアイデアをバンドに持っていってそれから決議する。もしそのアイデアを気に入ったのなら曲として作り上げていく。ある程度まで仕上がったら俺のハンディ・レコーダーで録音して、それをみんなで聴いて、どこが良いのか悪いのか、レパートリーに加えたいかを判断するんだ。それから微調整をして歌詞を乗せていく。時間がかかることもあるし、時には忙しいスケジュールの合間をぬって、みんなで新曲に取り組むこともあるよ。でも時々、ジャムっているときにそれがそのまま新曲になることもあるんだ」



■Fear Of War Recordsがリリースした『Raw Pogo』EPのアートワークは中国の"兵馬俑"みたいだよね。誰のアイデア?

Will「そいつは全てTimのアイデアだ。この件について話したことはなかったんだけど、戦争の写真はカヴァー・アートには珍しくはないよ

ね。じゃあ、中国をテーマにしてみたらどうかな?とは思ったんだ。兵馬俑は兵隊、戦争、歴史、そして中国文化を表現している。メチャクチャこのアイデアが気に入ったし、結果は素晴らしいものになったね」

Tim「それは僕のアイデアだよ。兵馬俑は、中国を初めて統一した始皇帝を、その埋葬後も守るために作られたものだから、中国の歴史上においても重要だよね。パンクの兵馬俑がパンクを永遠に守ってくれることを願っているのさ」

Matt「兵馬俑で遊んでみたのさ。Timがこのアイデアを思いついて、彼は精巧に作り上げたね」

■POK GAIは日本のポゴ・パンクや80年代のUKハードコア・パンクから影響を受けていると思うけど、実際はどう?あと、90年代のUSポゴ/ストリート・パンク、CASUALTIESやUNSEEN、LOWER CLASS BRATS、DEFIANCE、DEVOTCHKASなんかはどうなんでしょ?

Will「日本のポゴ・パンクとUK82には釘付けになったよ。だけど90年代USストリート・パンクはそうでもないな。ずっと前、それが出てきた当時、俺はキッズだったから大好きだったけどね。いくつかのバンドは今でも聴いているな。たまにライヴを見たりもするよ」

Tasha「そうね、私たちのサウンドはものすごく日本、あとは韓国のポゴ・パンクから影響を受けている。バンドで言うとTHE ERECTIONS、TOM AND BOOT BOYS、DISCOCKS、それにGUK-DOね。私たちがやりたかった、ファンでスチューピッドなパンクの良いお手本ね。それにあなたが挙げたいくつかの90年代のパンク・バンドからも、私がティーンエイジや20代になったばかりの頃には大きな影響を受けていたな!ドラミングに関してもね。だけど、年齢を重ねることによって私の趣味も変わってきた。今はポスト・パンクやD-Beat、ポップ・パンク、ポゴ・パンク、それにNWOBHMなんかを聴きまくっているわ」

Tim「うん、その通りさ。POK GAIにおいて僕は、GUK-DOやTHE ERECTIONS、WKSJ?、UPROAR、DEAD WRETCHEDから多大なる影響を受けている。POK GAIの他のみんなはきっと違うことを答えているだろうけどさ…。メンバー全員が、パンクの様々なサブ・ジャンルから影響を受けているから、影響されたバンドのリストを作るのは難しいよ。みんな、自分が望んでいるサウンドのアイデアを練習時に持ってくるけど、大抵、バンドは独自の形を成していくものだし、それを特定の方向に導くのは難しいことだと思うんだ」

Matt「個人的には、ニューヨークと日本、そしてUKの音源には完全に影響されたね。でもアメリカのストリート・パンクには全然夢中にならなかった。DEFIANCEはすごく格好良いし、いくつか良いバンドもいるけど、基本的には日本のポゴ・パンクと80年代のUKハードコアだね」



■好きなバンドについてはよく聞かれるだろうけど、嫌いなバンドっている?

Will「俺はどんなバンドも嫌いだなんて言わないけど、自分が楽しめないサウンドに、自分の貴重な時間を費やしたくはないね」

Tasha「私は色んなスタイルの音楽を聴いているし、色んなバンドに対してすごくオープンよ。嫌いなバンドってのは多くはないわね。でも、最近のカントリー・ミュージックだけは受け付けない。不快なだけなんだもん。グラインドコアもよく聴いていたけど、今はもう聴いていないな。別に嫌いとかじゃなくて、単純に聴いてても楽しめなくなっちゃっただけよ」

Tim「そのマヌケ野郎は、ミルキー・ウェイが酸っぱくなっちゃったよ〜、なんてことをラジオでしょっちゅう歌っているんだ…。Samなんだっけかな??……Sam Robertsだ!そいつだ、史上最悪のバンドだよ、Boooooo(※カナダのイケてるロックのシンガー・ソング・ライター兼バンドらしいです)」

Matt「エレクトリック・ミュージックやその手のダンス・パーティに熱中しているパンクスのことは理解できないな。好きじゃない特定のバンドはいない。でも、何かしらウェーブと付けられたものには不快にさせられているぜ」

■時々、若いパンクスって最初にまずポゴ・パンク・バンドを結成するんだけど、時間が経つとクラスト・パンクやスラッシュ・ハードコア、70'sパンク・ロック、ニューウェーブとかにその音楽スタイルを変えちゃうよね。自然なことかもしれないけど、TOM AND BOOT BOYSやTHE ERECTIONSは決して自分たちのスタイルを変えないから、僕はすごいなと思っているんだ。バンド(パンクス)がスタイルを変えることについてはどう思う?

Will「音楽をやるようになってから、俺はいつも同じようなバンドで演奏してきた。どれもUK82の影響下にあるバンドだったぜ。他のスタイルが流行っていようとも、どんなものであれ拒絶してきた。"トレンド"に乗っかるためだけにバンドを始めるような奴らが大嫌いなんだよ。クラスティーズがUK82やD-Beatではなく、ポスト・パンクに鞍替えするのを俺は見てきた。どっちが"クール"なんだろうな。奴らはまるでカメレオンみたいだぜ。自分のルーツにこだわった方がリアルだと思うけどね」

Tasha「色んな理由があって、バンドはその音楽性を変化させるんだと思う。バンドのメンバーに家族ができただとか、年をとったとか、熱が冷めたとか、宗教に目覚めたとか、イデオロギーを変えたとか、そういったことに、バンドの音楽性は直接的な影響を受けるのよね。あとは自分たちのサウンドに単純に飽きて違う音楽を始めたりだとか、お金を得るためやレーベルと契約するために、違う音楽をやるバンドもいる。いずれにせよ、人が変わっていくのを止める術はないわよね。でも大抵の場合、最初の数枚のアルバムに、そのバンドの一番格好良いパンクが詰まっているものよ。そう私は感じている。特にパンクにおいては、バンドは荒々しさが減っていき、もっとこなれた、ときにはオーヴァー・プロデュースになる傾向がある。これは私がパンクとメタルに関して気づいた、共通した変化ね」

Tim「間違っているかもしれないけど、多くのバンドは、自分たちが当初やっていたスタイル







に飽きてしまうんだと思う。それでギター・リフだったりドラム・テクニックを駆使して、より技術的であろうとする。そうして、パンクとは言え全然違うところへと行ってしまうんじゃないのかな。僕はバンドがそんなことをしても気にしないよ。だって僕らはいつでも立ち返って、好きだった頃のアルバムを聴くことができるからさ…。バンドはそいつらのものだし、好きなようにやればいいと僕は思うんだ」

Matt「多くのパンクスにとって、若かったときから、多少スタイルを変えることは自然な進化だと思うよ。でも、以前よりも自分に適したスタイルを選択すべきだよね。プレイする音楽のタイプは自分が選ぶものだけど、自分のスタイルの、そのサブ・ジャンルに限定すべきではないよ。ノイズ・パンクスがポゴ・パンクをやったっていいのさ!」

■スパイキー・ヘアだったり鋲ジャンを着ているせいで、トラブルに巻き込まれたり、ストリートでケンカになったりとかはある?

Will「そうでもないよ。もちろん、過去にはヤジられたり異常だと言われたり、笑われたりもしたよ。だけど、"パンクな見た目"はここ数年流行っているから、一般的にもそれほどショッキングなものではなくなった。実際、今では多くの人たちがすごく"クール"だと思っているしね。数え切れないくらい、$400から$700で鋲ジャンを作ってくれと頼まれたこともあるんだ。でも俺の答えはいつだってこうさ。"イヤなこった!Forever 21にでも行っとけよ"」

Tasha「カナダでは大した問題じゃないわね。でも場合にも依る。私がもっと若かった頃は、パンクであるが故にイジメられたりもした。一度、髪の毛に火をつけられたこともあるしね!それに、私はホームレスになったときがあったから、ストリートで生活していたの。だから時々ケンカしなくちゃならないこともあった。もうそんな日々は過ぎ去ったけど、パンクどうこうではなく、私はストリートで生き残るために戦っていたわ。また、私は自分の信念のせいで叩きのめされたこともある。カナダはとても愛国心の強い土地で、ナショナリズムが蔓延している。人々はカナダを完璧な国だと思っているけど、政府は多くの欠陥を抱えていて多くの人たちに悪影響を与えているのよ。ときに、カナダについて話すときは、自分の身を守れるようにしておいてね。一方で、私はたくさん旅行をして、多くの国々と都市を訪れた。パンクが容認されていない場所もね。実際、すごく危険だったわ。パンクの格好をするってことは、自分の頭上に大きな赤い的、それって暴力の的だけど、を描くようなことよ。世界は非常に恐ろしい場所にもなり得る。世界のどこにいるかによって、見た目が違っていたり、意見を発することで、多くの問題を抱える、その引き金になることもあるからね」

Tim「たまに僕は、"変わり者"とか"ホモ野郎"なんて言われるけどね。40年前からこのスタイルは存在していたのに、見逃していた無教養な奴らからね…。ハンバーガーみたいなものを投げつけられたこともあったな…。食べ物を無駄にしやがって、クソ野郎共、ハハハ。ここ最近はぶん殴られることもなくなったから、社会は進歩していっていると思うね」

Matt「全然ないよ。若かった頃は遭遇したけどね。バカな奴らやナチ野郎がたくさんいたから、そいつらがよくトラブルを俺たちにもたらして、その結果ケンカになったりさ。でも、その状況が最近になって復活しそうなんだよ。北米に暮らす右翼たちによって、再び現実化する可能性があるんだ。まぁ、必要に駆られない限り、ケンカするほど俺も若くないからね」

■じゃあ、みんなの"トップ10"パンク・レコードを聞かせて。

Will:

THE VICIOUS/Alienated
ZOUNDZ/Can't Cheat Karma
CHAOS UK/Burning Britain
CRIMINAL DAMAGE/ST
INEPSY/Rock n Roll Babylon
THE ADVERTS/Crossing The Red Sea
THE DISCOCKS/Long Live Oi!
LAUGHIN' NOSE/Pussy For Sale
BLITZ/Voice Of A Generation
SKIZOPHRENIA!/Raw Punk E.A.T.E.R
#11-THE EJECTED/A Touch Of Class

Tasha:
①ASTA KASK/Med Is I Megan
②POX/2015 Demo
③JUANITA Y LOS FEOS/Nueva Numancia
④INEPSY/Rock n Roll Babylon
⑤WKSJ?/Beer Storm Trooper
⑥THE PARTISANS/Police Story
⑦THE PLASMATICS/Beyond The Valley Of 1984
⑧ZMIV/Beware
⑨ARMED AND HAMMERED/Its About Fucking Time
⑩THE VICIOUS/Alienated

Tim:
UPROAR/Rebel Youth
ATTAK/Zombies
DEAD WRETCHED/リリースしたもの全て
JUANITA Y LOS FEOS/Nueva Numancia
INEPSY/Rock n Roll Babylon
INEPSY/City Weapons
UPRIGHT CITIZENS/Bombs Of Peace
LEGION 76/Demo 2014
WKSJ?/Beer Storm Trooper
CHAOS UK/Burning Britain

Matt:
KRIEGSHÖG/LP

D-CLONE/Creation And Destroy
CRUDE/Attitude
ORDER/Taep O Dong
DISCLOSE/Tragedy
DISCHARGE/Why
CONTRAST ATTITUDE/Apocalyptic Raw Assault
OXYMORON/The Pack Is Back
THE PARTISANS/Police Story
G.I.S.M./Detestation

■オタワのパンク・シーンはどんな感じ?おすすめのバンドは?スクワットとかパンクス向けの会場はあるんでしょうか?

Will「オタワのパンク・シーンは最高さ。モントリオールとトロントの間にある小さな都市で、数多くのイカした人たち、新しい人たちが行き来しているんだ。多くの素晴らしいバンドもオタワから出てきているよ。最近のバンドでオススメはDURS COEURS、CHLOROFORM、ATAXIA、ASILE、SILENT ORDER、DOXXだな。今のオタワにはスクワットはないね。あっても一ヵ月以内に閉鎖されてしまうからな。俺が知っている、最も長続きしたスクワットは7年だ。だけど催涙ガスで襲撃され全ての窓もブチ破られて20人以上が逮捕された。オタワでは誰もが家賃を払わなくちゃいけないのさ。でも、クールな"パンク・ハウス"がたくさんあって、みんなそこで暮らしているよ。ショーもそこで企画されるから、俺たちのシーンではすごくリスペクトされている。反人種差別、反同性愛嫌悪、反性差別を掲げているしね。他者やパンク・ハウスには敬意を払うべきさ」

Tasha「オタワのパンク・シーンは私が若かったときよりも、すごく大規模になっているわ。シーンには新しい、若いパンクスがたくさんいて、バンドやジンを始めている。10年くらい前、ここのシーンは完全に終わっていたから、今のシーンにはすごく興奮している。以前は格好良いバンドと言えば、モントリオールかトロントにしかいなかった。でも、今は新しいバンドやキッズがたくさんここにはいるし、ハウス・ショーやパーティ・ハウスがあるおかげでシーンは楽しいものになっているしね。ただ、オタワはカナダの首都だから重要な行政都市でもある。おかげで"警察国家"的なのよ。この都市は常に"クリーン"で"適切"であると思われたがっているから、スクワットなんてないの。あったとしても、あっという間に閉鎖されちゃうでしょうね。不法侵入に関するとても厳しい法律があるし、これまでスクワットの試みはあったけれど、直ちに警察によって閉鎖されてしまった。スクワットに類似したものとして、私たちには"パンク・ハウス"がある。パンクスが共同で借りている家なんだけど、時々ショーや大規模なパーティが開かれるのよ。でも、これも維持するのはすごく大変。近隣住民が警察を呼んじゃうからね。現存しているスペースに対して、パンクスはリスペクトすることが大事なの。少ないながらも、自分たちのスペースがあるってことは幸運なことだからね。オタワのチェックすべきグレートなバンドを挙げるわね。CHLOROFORM、ASILE、DURS COEURS、TOXIC THOUGHTS、ATAXIA、ALCOHOL FUELED、THE CHUDS、OMERTA」

Tim「ここのパンク・シーンは他の場所と同じようなものさ、規模が大きくなれば良いところも、悪いところも出てくるよね。オタワには、どのショーにも顔を出して、ツアー中のバンドを全てサポートするようなパンクスがたくさんいる、ありがたいことにね。オタワのパンク・シーンにはグレートなバンドが溢れているよ。DURS COEURS、OMERTA、ATAXIA、DOXX、TOXIC THOUGHTS、ASILE、CHLOROFORMは最近の僕のお気に入りのオタワ産のバンドさ。これらのバンドはそれぞれがパンク・シーンのために尽くしているよ。いくつかのバンドは、一年以上前にはまだ存在していなかったけどね。でも、チェックしておくべきバンドだよ!オタワにはパンク・ショーのための良い会場がいくつかあってね、パンク・ハウスは数こそ少ないけれど、中でもFuneral Homeというハウスは最高だよ。このハウスの人た

音楽をやるようになってから、俺はいつも同じようなバンドで演奏してきた

どれもUK82の影響下にあるバンドだったぜ



"トレンド"に乗っかるためだけにバンドを始めるような奴らが大嫌いなんだよ

ちはパンク・シーンのためにすごく献身的なんだ。RYUKETSU BLIZZARDは実際にそこで演奏したよ!」

Matt「オタワにはグレートなパンク・シーンがあるぜ!現行のベストなバンドはASILE、ATAXIA、OMERTA、DURS COEURSだな。パンクをサポートしている会場はいくつかあって、その中でもFuneral Homeはありがたいことに、数多くのショーを開催しているんだ。カナダ、その中でも特にオタワ(ここはかなり保守的な街なんだ)にはスクワットは全然ないね」

■カナダ国内の政治だったり、国際政治に関心はある?パンク以外で夢中になっていることは?

Will「政治にのめり込んだことはないな。もっと世界の政治状況にも関心を持つべきだとは思うんだけどさ。俺は動物を飼うのに夢中でね。いつの日か、俺は日本に行ったら大久野島(※瀬戸内海に位置する有人島で、ウサギが大量に生息している)に行ってウサギとたわむれたいんだ」

Tasha「うん、政治には興味があるけど、以前よりもアクティヴではなくなっていることも自覚している。時々、アルコールのせいで政治を諦めたなんてジョークは言うけどね、ハハハ。でも、パンク以外で夢中のものと言ったら、それは旅行と食べ物かな。機会さえあれば、私はまだ見ぬ国や都市を訪れている。ドラッグみたいなものね。しかも、これまで試した中でも最高のドラッグよ。旅行や仕事をしていないとき、私はずっと料理をしている。私は10年以上、キッチンで働いてきたんだけど、本格的な料理業界の仕事に就くことになったの。異なる国を訪れて、そこで食事をすることが組み合わさると、もうそれは私にとって究極に"幸せな状況"なのよね、ハハハ」

Tim「カナダの政治はとにかく複雑でね、僕は27歳だけど未だに理解できないんだ…。パンク以外のことなら、世界中を旅してまわること、他の街のアンダーグラウンドなDIYシーンやバンドを見ることかな。毎晩色んな街に行って、新しい友人を得て、異なる文化を経験できたらな、なんてことを夢見ているよ」

Matt「カナダの政治にも国際政治にも関心はかなりあるよ。俺は大学で社会学を専攻していて政治学や社会構造についても学んでいた。ずっと興味を抱いていたのさ。西側諸国で完全に植えつけられてしまった、共産主義国に関する誤った情報を解明することにも最近は興味があってね。鉄のカーテンの背後に隠されていた人々の生活がどんなものだったのか、真実を紐解いているよ。社会主義を悪魔的とみなすようになり、そして極端なまでに資本主義を正当化してしまっている現在においても、こいつは深く関連しているんだ。西側諸国で極右の復興がドンドン広まっていることにもね」

■みんなは日本を訪れたことがあると思うけど、どんなことが印象的だった?

Will「日本はものすごくエクストリームな国だと思う。全てに対して110パーセントでそれ以下になることがない。テクノロジーにしてもパンク・カルチャーにしても食事にしてもね。常に素晴らしく、衝撃的だよ。俺が日本を訪れたのは、2008年のGERM ATTAKでのツアーだけなんだけど、完全にヤラレちまったよ。日本は大好きだし、もっと見てまわりたいね。あと、納豆はすごく印象深かった」

Tasha「日本は明らかに、これまで私が旅した中でも最もお気に入りの国よ。Timと私はラッキーだったな。新年とクリスマスの休暇でBURNING SPIRITS 2016に行くこともできたから。それに東京と大阪ではTHE DISCOCKS、TOM AND BOOT BOYS、BEER BELLY、THE ERECTIONS、RYUKETSU BLIZZARD、ASUKA AND THE BUM SERVANTS、ACE、NO SURVIVORS、それに見られると思っていなかった数多くの格好良いバンドも見ることができた!日本のパンクスの親切なところと素晴らしさにはメチャクチャ感動したな。私たちのことを、すぐに家族のように扱ってくれて、自宅に招いてくれたり、食事をごちそうしてくれたり、街を案内してくれたの!私たちと共に過ごしてくれたみんなにとても感謝しているわ。THE ERECTIONSやRYUKETSU BLIZZARDといったバンドには恩返ししなくちゃね。東京での、人の混雑にはとてもカルチャー・ショックを受けたな。常にたくさんの人が周りにいるのよ。電車や地下鉄に乗るのに慣れるまで、1日か2日ほどかかったけど、日本の電車って私が見た中で、最も効率的な輸送システムよね。あんなに人が多いのに、みんな几帳面でお互いを尊重していることに、最も感銘を受けたかな」

Tim「最も印象的だったことは、飲みたいときにどこでもビールを飲めることかな、…冗談だけどね、ハハハ。でも、こいつはかなり素晴らしいことだよ。日本で一番印象に残っているのは、僕とTashaは東京から広島に行って戻ってきたんだけど、みんなものすごく親切にもてなしてくれたんだ。それまで知らなかった人たちとも、たったの数時間で親友のようになれた…。次の街へ行くときには、時々泣き出しそうになっちゃったよ。食べ物も驚くべきものだったな。日本で見たバンドも信じられないほどに良かったよ。THE ERECTIONS、BEER BELLY、SLOWMOTIONS、FORWARD、WARHEAD、ACE、LAST SURVIVORS、TOM AND BOOT BOYS、DISCOCKS、それに僕が見たもっともっとたくさんのバンドもファンタスティックだった。僕が日本の好きなところをリスト化していったら、何日もかかっちゃうだろうね」

Matt「俺はこのバンドで唯一、日本に行ったことがないんだ。だからこの回答は他の奴らに任すよ」

■今後の予定や目標を聞かせて。

Will「POK GAIで東南アジアと日本をツアーしたいね。もっともっとツアーをしたいんだ。俺とこのバンドにとって、ツアーは最優先事項だからね。フルLPもリリースしたいけど、ツアーやテープ、7インチ、Tシャツやマーチャンダイズを作るのでかなり忙しくてね。俺たちは結成して一年足らずのバンドだけど、これまでにやってきたどのバンドよりも物事が迅速に進んでいるよ」

Tasha「そうね、ちょうど今、私たちは2017年1月に、2週間に及ぶブラジル・ツアーを行なうんだけど、その準備をしているところ。すごくワクワクしているわ!あとは、新曲が4曲あってもうすぐリリースできると思うんだけど、何も確認してないわね。今、マスタリング作業をしているところなのよ。すぐに出せればいいんだけどね。いつだって、私たちの目標はできる限りツアーをして、ファンでスチューピッドなパンクをプレイして楽しむってことよ!」

Tim「仕事なんて絶対やらないぜ、僕は働くのが大嫌いなんだよ。スチューピッドなパンク・ロック・バンドとして世界中をツアーして廻りたいね」

Matt「今後の予定は新しいEPと2017年の冬にブラジル・ツアーをすることだね。2018年には、どこか他の国へのツアーを組みたいな」

■インタヴューさせてくれてありがとう!日本の読者にメッセージをお願い。

Will「俺は日本に行ったら、君らとストリート・ファイターがやりたいんだ。Kentaro、そして友人たち、会うのを楽しみにしているぜ!HA DO KEN!!!HA DO KEN!!!SHOOOO RYU KEN!!!」

Tasha「聴いてくれてありがとう!!!!!!STAY PUNK!!!!」

Tim「すぐにでも友人たちと日本で再会したいね。みんなに会えなくて寂しいよ!次回、日本を訪れるときは、もっと友人を作りたいな!!俺たちのスチューピッド・ミュージックを楽しんでくれよ!」

Matt「素晴らしい音楽を作り続けてくれよ!日本のパンクはいつも最高さ。いつの日かみんなの前でプレイしたいね!」

North America Pogo Attack!!



BLANKS 77

King Of US Pogo Punk!

90年代当時、CASUALTIESと共にアメリカのポゴ・パンク・シーンを牽引し、双頭をなしていたバンド、BLANKS 77!!
…いや、POK GAIを聴いていたら、"あの時代"へのたまらない郷愁に駆られてしまいまして、"BLANKS 77も最高だったよなぁ…"と目を潤ませつつ後ろ向きに彼らの1stアルバム『Killer Blanks』を聴いていたんです。
そして何気なく"BLANKS 77"とググったら、Oi! Oi!復活して2016年には新譜もリリースしているじゃないか!?こりゃPOK GAIとあわせてカナダvsアメリカ新旧ポゴ・パンク合戦だぜ(!?)と、意気込んでインタヴューをオファーしてみました。

© Mark Stephon

バンドのイメージ的に、失礼ながら"すげーレイジー"な先入観を抱いていたのですが、〆切は厳守するし受け答えは丁寧だしと、良い意味で完全にイメージを裏切られました。気をつけろ!こいつら実はマジメだぞ(笑)!!

■まずはBLANKS 77の結成について聞かせてもらえますか?初期においてはどんなバンドから影響を受けていました?思い描いていたサウンドは?

TJ「俺はその頃はまだバンドにいなかったな」

Mike「結成時、メンバーはみんな高校生だったんだ。俺はRAMONESにメチャクチャのめり込んでいたな。あとはありとあらゆる初期のパンク・ロック・バンド、SEX PISTOLSやBUZZCOCKS、DICTATORSもね。その頃にChadと出会ったんだが、あいつはMISFITSとヘヴィ・メタルに夢中になっていた。でもAGNOSTIC FRONTのカセット・テープも持っていたんだよな。それで俺はあいつに、"CBGBに行ってハードコア・バンドをチェックしようぜ"って言ったのさ。行ってみるとハードコアだけじゃなくパンク・バンドもプレイしていてね、俺たちも自分たちのバンドを始めてみる気になったんだ。それからすぐに、新聞に掲載されていたミュージシャン募集の広告でReneeのことを知った。こうしてメンバー全員が揃ったんだけど、俺たちがやりたかったのは古いスタイルのパンク・バンド、そう、77スタイルだったんだ。当時、そういったスタイルのバンドはそれほど多くはなかったしね。俺たちには都合が良かったよ。時が経つにつれ少しハードなサウンドになっていったけど、自分たちのルーツにはいつだって忠実だったよ」

Renee「私はニュージャージーのミュージック・ペーパー、East Coast Rockerに広告を出したのよ。そこには有名なバンドのインタヴューが時々掲載されていたんだけど、ニュージャージーの全てのクラブが広告を出していたの。だから、80年代当時はそれを読めばどこでダンス・パーティが開催されるのか、どんなバンドがどこで演奏するかが分かったのよ。メタル寄りの新聞でもあったんだけど、無料の広告枠があってね、バンドのメンバー募集とかをそこに載せることができた。私はまだ高校に通う16歳だったけれど、バンドをやりたかったから広告を出してみたらChadから連絡があった。Mikeが彼に連絡させたみたいだけどね、ハハハ」

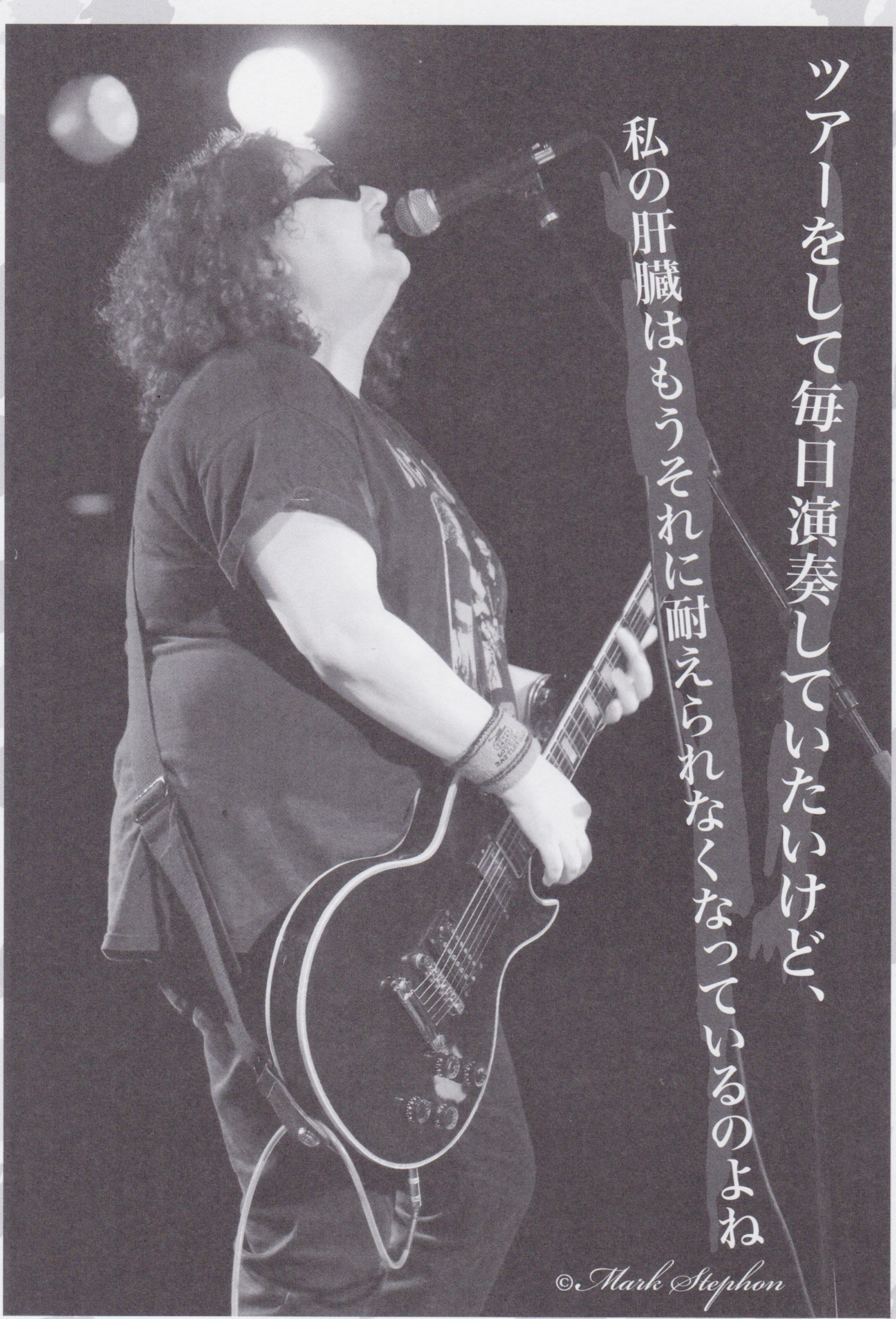
Chad「Mikeが話したことで充分かな。俺の幼馴染のBobbyがMikeと同じ高校に通っていて、彼を通してMikeとは出会ったんだよ。何度かパンクとハードコア・バンドのギグに通ったすぐ後に、俺はドラム・セットを購入して、そしてMikeがバンドをやろうと提案してきたのさ。RAMONESやSEX PISTOLSみたいな音をやりたかったんだよな」

■僕は若かった頃、VA『Pogo Attack』を聴きまくって、『East Coast Pogo Attack』ビデオを繰り返し見ていました。本当、BLANKS 77やCASUALTIES、AUS-ROTTEN、PUBLIC NUISANCE、THE PIST、DEFIANCEといったバンドに夢中だったんです。当時、こういったバンドとはよく共演していたのでしょうか?

TJ「そういったバンドとは毎週末のように共演していたぜ」

Mike「あぁ、90年代初期の俺たちのショーは、いつもそいつらと一緒だったな。CASUALTIESとPUBLIC NUISANCEはNYCのバンドで、BLANKS 77が結成する前から活動していたよ。THE PISTはコネチカットのバンドで、彼らは俺たちよりも後に始めたんだと思う。DEFIANCEは西海岸の出身で、俺たちが西海岸に行くと共演していたよ。ニュージャージーにもかなり強固なシーンがあって、WRETCHED ONESやNIBLICK HENBANEといったバンドがいたな。…90年代半ばには格好良いバンドがたくさんいて、定期的にショーをやっていたものさ。『Pogo Attack』アルバムは東海岸のバンドを良い具合に収録していたね」

Renee「長年やってきているから、私たちが共演したバンドなんてとんでもない数になる



わね。私たちがバンドを始めたとき、CASUALTIESやBOUNCING SOULS、DROPKICK MURPHY'Sといったバンドと共演するのは大したことじゃなかった。…当時、彼らは全てローカルなバンドに過ぎなかったからね。今じゃみんな本当にビッグになったけど、それでもまだ、彼らは地元のショーに遊びに来ているわ。だからロック・スターになっちゃった人なんていないのよ」

Chad「実際のところ、Mikeはあのレコードのリリースに、俺たちの友人であるPedroと一緒に関わっていたんだよな、ハハハ。最高のバンドを収録した最高のレコードさ」

■90年代にあったストリート・パンク/ポゴ・パンク・ムーヴメントについて、実感はしていましたか?地元のニュージャージーのパンク・シーンはどんなものでしたか?

TJ「ニュージャージーには素晴らしいシーンがあった。もちろん、そのほとんどがニュージャージー州ニューアークにあったPipelineという会場を中心にして巻き起こっていたけどな」

Mike「うん、どうしてあんなに盛り上がったんだろうね。振り返ってみると、どのバンドも自分というのを持っていたし、みんな共通のものに関心を寄せていたよな、そう、酒を飲むこと!!!!!そしてポゴ・ダンスにね!!!!!」

Renee「全てが一気に巻き起こったのよ、イカレてるわね。ニュージャージーにとっても、パンク・ロックにとっても最高の時だったわ」

Chad「大きな一つの家族みたいだったから、素晴らしかったのさ。パンクスもスキンズも、スカ・キッズも、誰もが一緒になって楽しんでいた。Pipelineという会場があったことに、俺たちはすごく感謝していたよ」

■あの頃のバンドの多くは既に解散してしまいましたが、一方でCASUALTIESなんかは今やすごい人気バンドになりましたよね。彼らについてはどう思っていますか?BLANKS 77とCASUALTIESは同じテーマを共有していたように思うんです。曲名にしても、"Punx and Skinz"という同名曲があったり、似ている曲、"Let's Riot"と"Riot"、"Bastards"と"Ugly Bastards"、"Police Attack"と"Police Brutality"もあったり。

TJ「俺たちは今でもCASUALTIESと対バンしているよ」

Mike「ハハハ、彼らと共通したテーマがあっただなんて考えたこともなかったな。パンク・ロックに対して真っ直ぐだし、基礎にしているから、共通の類似性がたくさんあるんだろうね。CASUALTIESはかなりビッグになったし、それはすごいことだよ。俺たちBLANKS 77は週末にやるだけのバンドになって、平日は働いている。だけどBLANKS 77のショーがある限り俺たちはやるぜ!!!!」

Renee「音楽で生活ができれば素敵よね。私は毎日働いているけど、ウンザリしているわ。ツアーをして毎日演奏していたいけど、私の肝臓はもうそれに耐えられなくなっているのよね」

Chad「CASUALTIESは大好きだよ。彼らとはもっと共演したいね。面白い事実を教えてあげよう。ベーシストのTJはCASUALTIESのJakeにギターを教えて、彼がオーディションに受かるよう手伝ったんだよ(※多分、2代目ギタリストのFredが脱退した後に、CASUALTIESはギタリストのオーディションをしたんだと思う)」

■そういえば、SUBMACHINEとのスプリットEPではTHE DWARVESのカヴァーをしていましたよね。彼らのことが好きなんですか?どんなところが?

TJ「THE DWARVESを愛さないワケなんてないだろ。彼らの魅力は"Fuck You Up and Get High"だ」

Mike「なんてこった…。初期のBLANKS 77が何度か行なったレコーディングでは、俺たちはまだちょっとスロー・テンポだったんだよ。それで、ある日、俺たちはTHE DWARVESを聴いたんだ。『Blood Guts And Pussy』、『Thank Heaven for Little Girls』、『Sugarfix』はBLANKS 77がツアー中に乗っていたバンでひっきりなしにかかっていたよ。THE DWARVESは俺たち全員が聴けるお気に入りのバンドだったし、彼らの歌詞はときにイカレてて、また突拍子もなく楽しいものだった。音楽性もファストでハード、そしてヘヴィだったよな。大好きなのさ。SUBMACHINEも彼らのことが大好きだったから、ちゃんとした初めてのツアーはSUBMACHINEと一緒にやったのさ。1993年のことだったかな。そのとき

に、THE DWARVESのカヴァーをして、そしてお互いの曲もカヴァーしようと思いついたんだよ」

Renee「彼らは史上最高のバンド…。言うことは以上ね…」

Chad「"Give me aids, fuck that I just wanna get laid"(※THE DWARVESの曲"SFVD"の歌詞の一節)」

■1stアルバム『Killer Blanks』はドイツのNasty Vinylから最初にリリースされましたよね。レーベルからオファーがあったのですか?

TJ「Nasty Vinylは俺たちにフル・アルバムのリリースをオファーしてきてくれた初めてのレーベルなんだ。彼らと会ってみて、大丈夫そうだから一緒にやることにしたんだよ」

Mike「うん、Nasty Vinylがフル・アルバムのCDを出したいと言ってきたんだ。俺たちはすでに『Up The System』10"レコードを作っていたから、レコーディングは済んでいた。だからあとやることは少しだけ、7インチの収録曲を再録して、もっとパンクなサウンドにするくらいだったんだよ。Nasty Vinylとはドイツ・ツアーをやったけど、他には大した絡みはなかったな。再びBLANKS 77にドイツ・ツアーをさせようという声もあまりあがらなかったみたいで、彼らとの関係は全然続かなかった。Nasty Vinylは『Tanked And Pogoed』のLPとCDもリリースしたけど、それ以降、音沙汰はないな」

Renee「あの頃は、私たちのフル・アルバムを出したいなんて言う人は皆無だったし、自分たちでやるのも無理があった。だから彼らがオファーしてきたのを断れなかったのよ!」

Chad「友人のPedroがHohni(※Hohnie Recordsオーナー)を俺たちの練習に連れてきたんだ。それから3週間以内に彼はドイツ・ツアーをセッティングしてくれた。そしてドイツにいるときにNasty Vinylとの繋がりができたんだよ」

■その後にアメリカのRadical Recordsが『Killer Blanks』のCDを出しましたが、ジャケットがホログラムでしたよね(※見る角度によってイラストが動いているように見えるアレです)。あんなジャケット初めて見ましたが、誰のアイデアだったんですか?

TJ「オー、そいつは本当にホログラムなのか?俺はてっきりクソだと思っていたよ」

Mike「そうだね。でも、俺たちより先にやった奴がいるみたいだけどね…。当時、アートワークを担当していた奴が思いついて、動く画像をCDの表紙にしたんだ。すごくユニークだったよな」

Renee「レーベルが賛同してくれて嬉しかったわ。あのとんでもない表紙を作るのには、お金がかなりかかったみたいだからね!」

Chad「Radical Recordsのアイデアじゃなかったかな。ドイツ盤とアメリカ盤だと収録曲が異なっていたんだよね」

■1stアルバム『Killer Blanks』と2ndアルバム『Tanked And Pogoed』はDon Furyによるプロデュースでしたが、どのようにして彼とは出会ったのですか?彼にまつわる、何か面白いエピソードはありますか?

TJ「どのようにして俺たちがDon Furyと一緒にやるようになったかは覚えていないね。俺が思うに、彼とReneeがデートをしたから、そのせいでレコーディングするハメになったんだったかな。面白いエピソード…ウーン、G.G. AllinのレコーディングをDonがやったときの話しだが、Donはスタジオをメチャクチャにされないか心配していたんだ。でもG.G. Allinが礼儀正しいものだから彼はショックを受けたんだとさ。まぁ、G.G. Allinが残していったウンコをDonが見つけるまでの話しだけどな」

Mike「Donは面白い奴だったな。彼のスタジオはチャイナ・タウン近くの地下室にあったんだが、俺たちが小便をするためにはその地下室から出て、彼の暮らすアパートメントに行かなければならなかった。だから俺たちは、メンバーの誰かが小便を漏らす限界まで我慢していたよ。とにかく、Don Furyはその地下室で本当に素晴らしいレコーディングをしてくれたよ。Donが手掛けたNYCのハードコアとパンク・バンドはどれも本当に格好良かったよな。サウンドも俺たちにバッチリだったしね」

Renee「私たちはコンピレーションのために、Johnny Thundersの曲(London Boys)をカヴァーしたの。それがDon Furyとの初めてのレコーディングだったわね。そうして彼と出会ったのよ。あと、彼のリップ・クリームには絶対に触れちゃダメよ!」

Chad「彼とどうやって出会ったかは覚えてないけど、あの頃、俺たちはバンドの金を使って『Killer Blanks』をレコーディングしたんだ。そうしたら、Don Furyは俺たちにこう言ったのさ。"君たちがレーベルと契約したら、僕はもっと手厳しく君たちと接するよ"ってね。『Tanked And Pogoed』のときには、俺たちはRadical Recordsと契約していたんだけど、そしたらDon Furyは本当に厳しくやりやがってさ。俺がそれまでに叩いたことのないテンポをキープしろと言ってきたり、マジでムカついたぜ、ハハハ」

■でも、3rdアルバム『C.B.H.』はDaniel Reyがプロデュースしましたよね。どうしてDonを止めてDanielにしたのですか?

TJ「どのようにしてDanielとやることになったのかは覚えていないけど、RAMONESの全てのアルバムを彼が手掛けていたのが理由だよ」

Mike「Daniel Reyは全然違ったな…。Don Furyは俺たちがレコーディングに嫌気が差していても、いつも単刀直入に物事を言い、何度もやり直さないとならなかった…。Daniel Reyはもうちょっと丁寧でね…。俺たちがウンザリし始めると、心配しないで、もう一度やってみようか、と言ってくれたんだ。Daniel Reyのおかげで俺たちのサウンドはすごくクリアになったと思う…。一番好きだな…。多くのBLANKS 77のファンは『Tanked And Pogoed』をよく聴いているだろうけど、俺は『C.B.H.』をDanielと一緒にやれて嬉しかったね…。彼の歴史はRAMONESとその作品と共にあるんだしさ…」

Renee「私たちは『C.B.H.』のレコードで違うことをやろうとしていたし、違うサウンドで演奏したかったの。Daniel Reyとの仕事はそれまでとは違っていたけど、良い方法だったわね。『C.B.H.』のサウンドは大好きよ。ちょっとした変化を欲していたのよ」

Chad「俺は『C.B.H.』のときは演奏していなかったなぁ」

■では、どうして解散したのですか?2000年か2001年?

TJ「2000年だな。俺たちは燃え尽きたのさ。一年間で、3回も同じ場所で演奏していたんだぜ。休息が必要だったんだ」

Mike「うん、BLANKS 77は道半ばで終わったのさ」

Renee「Mikeは疲れていたわね?」

■BLANKS 77の解散後、あなたたちはDEAN DEAN & THE SEX MACHINESとMIKE BLANX AND THE SDAB'Sを始めましたよね。これらはどんなバンドでしたか?

TJ「どちらもパンク・バンドだったよ。俺はSDAB'Sでギターを弾いて、DEAN DEANではベースを弾いていたんだ」

Mike「そうだね、BLANKS 77が完全にシーンに復帰するまでの間、やっていたんだ」

Renee「DEAN DEAN & THE SEX MACHINESで私はもっとヤバいロックンロールなサウンドをやりたかったのよ。ストレートなパンクじゃなくてね。あのバンドではすごく楽しんだわ…。生き残ることができて良かった、ハハハ」

Chad「SDAB'Sはパンク・ロックンロールなバンドだった。俺は1997年からバンドをやっていなかったんだけど、2001年だか2002年だかにMikeから電話がかかってきて、ドラムを再び叩きたくはないかと聞いてきたのさ。当時、俺はGUNS N' ROSESとACDCを聴いてて、新しいスタイルにも挑戦してみたかった

んだ。ドラムにカウ・ベル(牛の首にぶら下げる鈴)をつけて、あとはTHE DWARVESのテイストも加えれば、SDAB'Sの出来上がりさ」

■いつ、どうしてBLANKS 77を再結成しようと?

TJ「必要だったからさ!!ビールが値上がりしちまったけど、バンドをやればクラブでタダで飲めるからな」

Mike「機は熟したんだよ」

Renee「男性陣は、長いこと私がいないことにもう耐えられなくなっていたのよ…」

Chad「俺はReneeが恋しかったんだよ、ハハハ。それにSDAB'Sを続けるのが難しかったんだ。だってみんなが聴きたがるのはBLANKS 77だったからね。なにせ、SDAB'SのステージにはBLANKS 77のメンバーが3人も立っていたわけだし。それに、俺たちはファミリーだからさ」

■復活後に、THE PARASITIXとのスプリット12インチをJail House Recordsから発表しましたが、リリースに至るまでの経緯を聞かせてください。

TJ「THE PARASITIXのことは以前から知っていたんだ。彼らは既にJail Houseとシングルを出す話しをしていたんだけど、それが俺たちとのフルレングス・スプリットに発展していったのさ」

Renee「THE PARASITIXはJail House Recordsと連絡を取り合っていて、それで彼らがスプリット・シングルを出さないかと提案してきてくれたの。だけど私たちにはたくさん曲があったから、12インチに変更になったの。それに正直言って…7インチより12インチのほうが素敵でしょ!」

Chad「THE PARASITIXのPaulが俺たちとのスプリットを出したがっていた。でも、あいつはみんなで金を出し合って、自分たちでリリースしようとしていたんだよな。だから俺はこう言ったのさ。"そいつは無理な話しだ。誰かリリースする奴を見つけてこいよ"。そうしたらあいつはレーベルを見つけてきたのさ」

■最近はどんなバンドを聴いていますか?

TJ「MOTORHEADをよく聴いているよ。古いパンクもたくさん聴いている。それにブルースと昔のソウルやR&Bも大好きだ」

Renee「私は80年代のニューウェーブ・バンドとUK82パンク・バンドを聴いているけど、グラム・ロックと初期のパンク・ロックンロールの音源も大好きよ」

Chad「俺はまだLemmyを失ったことに嘆き悲しんでいるよ」

■知っている日本のバンドはいますか?

TJ「TOM AND BOOTBOYSは聴いたことがあるね」

Mike「DISCOCKS…。彼らは90年代半ばにニュージャージーやNYC、ボストンでプレイしたよな。俺は2年前に東京を訪れたことがあるんだ。伝統的な温泉に行き、他の男たちと一緒に裸になった。白人男性のペニスに関する神話は全く以って事実ではないからな」

Renee「DISCOCKSね!!!!」

Chad「JETBOYSかな」

■BLANKS 77を結成したときはみなさんティーンエイジでしたが、パンクに対する考えは当時から変わりましたか?

TJ「俺にとってのパンクに変わりはないよ」

Renee「私にとっても同じね。いつだってショーに行ったり、お酒を飲んだり、格好良いバンドを見るのは好きだから」

Chad「俺たちは年をとったから、そりゃ変わったさ。俺は"fuck"と描かれたTシャツなんてもう着たくないしさ。今のキッズが"fuck"と描かれたTシャツを着ているのを見ると、昔の自分と重なるね」

■アメリカ大統領選挙は世界中でビッグ・ニュースとなりましたが、Trumpについて何か考えはありますか?

TJ「Trumpはパンク・ミュージックを再び偉大なものにしてくれるだろうね」

Renee「ウーン…、最悪なところまで、彼がこの国を台なしにしなければいいんだけど。たしかなのは、私は彼のファンじゃないってこと。今こそ、格好良いパンク・バンドが結成されるべきよ…」

Chad「俺たちはピーナッツ農夫を大統領にしたことがあったし(※恐らく第39代アメリカ大統領、ジミー・カーターのこと。カーターはピーナッツ農場を所有していたため、peanut farmerというニックネームがつけられていた)、俳優を大統領にしたこともある(※これは第40代アメリカ大統領、ロナルド・レーガンのことだと思う)。だからビジネスマンがダメってことはない。だけど実際のところ、俺の理想とする最高指揮官ではないな。Reneeが言ったように、俺も彼が"Up The System"しないように願っているよ」

■今後の予定を聞かせてください。

TJ「フル・アルバムをリリースして日本をツアーしたいな」

Renee「そうね!誰か私たちを日本に連れてって、演奏させてくれないかしら!是非ともやりたいわ。私たちが死ぬまでにやるべきことのリストに載っているもの…」

Chad「パンクであり続けたいね。キッズがもう立っていられなくなるまで、演奏しまくりたいぜ。フル・アルバムも出したいし、日本やハワイや、本当どこへでも行きたいね。まぁ、週末だけだけどさ、ハハハ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございました!日本の読者にメッセージをお願いします。

TJ「UP THE PUNKS!!!!!」

Renee「新しいレコードを買ってね。…気に入るはずよ!」

Chad「サポートに感謝しているぜ。インタヴューしてくれてありがとう。教会に募金箱を設置してさ、その金で日本に行こうぜ!」



90's US Pogo Punk Disk Review

BLANKS 77へのインタヴューからの流れで、このまま全力で後ろ向きに90年代のUSポゴ・パンクを振り返ってみたい(POK GAIは全然影響を受けていなかったけど…)。ストリート・パンクではなくあくまでもポゴ・パンク。両者の違いとは、多分、後者のほうがキャッチーでFun & Rawなサウンド。つまり、単純に頭空っぽにしてポゴれるかどうかってこと(…じゃないかな?)。
当時、同じシーンにいたバンドでも、アグレッシヴでハードコア寄りなPUBLIC NUISANCEやOi!に限りなく近かったTHE WRETCHED ONES、またクラスト/アナーコにカテゴリーできそうなAUS-ROTTENなんかは外して、ポゴ指数が高い&自分が好きな作品だけをチョイスしました。…でも、やっぱり線引きが非常にビミョーですよね。

VA/Pogo Attack



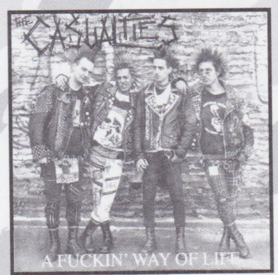
本作なくしてUSポゴ・パンクは語れない!でも、音楽的に全バンドがポゴ系かと言ったら、クラスト/アナーコ・バンドもいたし、THE PISTやTHE WRETCHED ONESも毛色が異なっていた。ただ、当時はそういったサブ・ジャンルによる区別がなかったし、BLANKS 77もインタヴューで語っていたように、とにかくシーンは最高の状態にあったのだ。あの頃のイケイケな雰囲気を収めたのがこのコンピ!
(Pogo Punk Records 001)12"　94年

BLANKS 77/Punks 'N Skins



多作なバンドだが、完成度には差こそあれサウンドそのものには一切のブレがない。なのでどれを挙げるか悩んだのですが、この2曲入りピクチャー盤で!CASUALTIESがブレイクして、どうして彼らはアソコまで行けなかったのか。その理由は…、やっぱりこのルックスのせいではないでしょうか(汗)。両者のファッション・センス(と体型)が逆だったら、今、バンドで飯を食っているのは彼らだったハズ。
(Headache Records HR #29)7"　95年

CASUALTIES/A Fuckin' Way Of Life



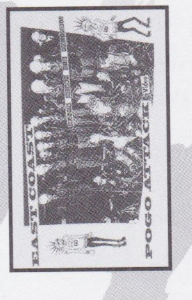
2000年代に入ってからの彼らはストリート・パンクだけど、初期に関してはポゴ・パンクと呼称したい。この感覚、伝わるでしょうか!?1stシングルはちょっとRaw過ぎるので、個人的にはこの2ndシングルが一番好きなんだよなぁ。本作にしか入っていない曲"Fuck You All"が最高なんですよね。で、サンクス欄をよくよく見ると高円寺のRECORD BOYが載ってたりして興味深いのです。
(Eyeball Records EB001) 7"　95年

THE BRISTLES/Generation Annihilation



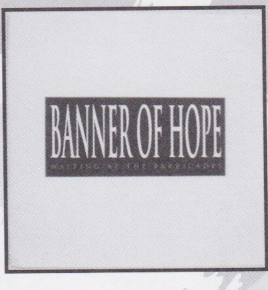
BLANKS 77のインタヴュー冒頭で、"BLANKS 77とCASUALTIESがポゴ・パンク・シーンを牽引していた〜"なんて書きましたが、そこにもう一バンド加えるなら、それはもう誰が何と言おうとこのTHE BRISTLESだ。前にツンノメっててドラムが追いついていなかったりと、天然のグダグダ初期型ポゴ・パンク・サウンドが炸裂!整合性と演奏技術こそが"敵"であることがよく分かる作品。
(Beer City Records #13)7"　94年

VA/East Coast Pogo Attack



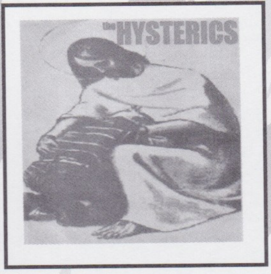
YouTubeなんてものは存在しなかったので、海外のバンドのライヴ映像を見るために、西新宿のブート・ビデオ屋さんに足繁く通っていたという人も多いのではないでしょうか(ただし映像は劣悪、そしてお高い)。そんな中、夢のようなメンツの作品が!!レコードからしかその姿を想像できなかったバンドのライヴを、自宅のTVで見れるなんて…!!と大層感激したものです。
(Tribal War Records No Number)VHS　96年?

BANNER OF HOPE/Waiting At The Barricades



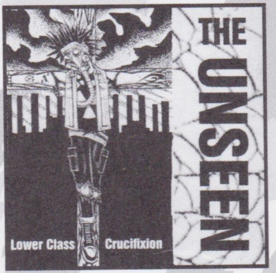
のちにベルギーのFUNERAL DRESSとスプリットを出したり、女性Voがとても象徴的だったニュージャージー産のバンド。しかし、この1stシングルの時点ではまだ男性Voで音もUKのTHE REBELSなんかを彷彿とさせるガキ・パンク・ロックが基調でした。ただ、B面ラストの"Where Are You?"、これが高速ポゴ・ナンバーで最高に痺れるのです!バンド後期の名曲"Pogo"もメチャクチャ格好良いけどね。
(Obnoxious Records #1)7"　94年

THE HYSTERICS/ST



定番ばかりなのもアレなので、変化球としてニュージャージーのこのバンドも挙げておきたい。当時、ポゴもクラストも任せておけ!とばかりに一世を風靡していたTribal War Recordsからリリースされた1st EPはトッテモ"CASUALTIES風味"だったが、本作ではグッとメロディーに磨きがかかっており、「もっと続けていたらイイところに行けたのでは?!」と思わずにいられない(※しかし本作を以って解散)。惜しい!
(Let It Rock Records No Number)7"　97年

THE UNSEEN/Lower Class Crucifixion



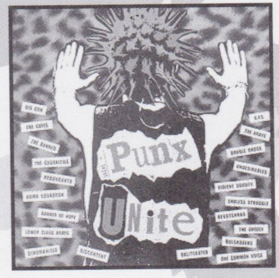
USポゴ・パンク第二世代筆頭fromボストン。このバンドも初期だけポゴ・パンク、その後はストリート・パンクという認識をしているんだけど、僕だけかもしれません(汗)。Pogo 77からのリリースもありつつ(TOM AND BOOTBOYSとのスプリット)、その後はEpitaph Records傘下のHellcat Recordsからも出している、そんな稀有な経歴を持つバンドです。SHIT-FACEDとのツアーも懐かしい…。
(V.M.L. Records VML 046)12"　97年

DEVOTCHKAS/ST



メンバー全員女性でファッションもキマッていたため、当時はかなり話題になりましたが、本作(1stシングル)ではドラムのみまだ男性。しかしそのドラムが強烈に下手というところが実にナイス!"Oi! Toy"というナンバーが何を言いたいのか購入当時は理解不能でしたが、今になって改めて歌詞を読むと、スキンズの彼氏をゲットした女友達が調子に乗っててムカつくわ!的な、女同士のドーデモイイ歌詞なのでした…。
(Punk Core Records Boot Boy 03) 7"　98年

VA/Punx Unite



もちろん念頭には「Pogo Attack」があっただろう。ただ、多様性を内包していた「Pogo Attack」と決定的に異なっているのは、"統一感"が出てしまっていることだ。この時点で、アンダーグラウンド・シーンにおける盛り上がりは臨界点に達し、その後は見た目も音も"CASUALTIESみたいな"バンドが世界中で量産されることになった…ような気がするんだけど、皆さんはどう思います?
(Charged Records CHARGED 001)12"　98年



PSYCHOTIC YOUTH

PSYCHOTIC YOUTH。EL ZINE読者の方にとっては懐かしいバンドなのではないかと思いますが、実は現在再結成をして2016年春に日本ツアーを行ったんです。そして、解散前にTarget Earth Recordsから出した最後のアルバム「STEREOIDS」から18年ぶりとなるニュー・アルバム「THE VOICE OF SUMMER」を2017年1月18日に産み落としたところなんです。これが全くもって衰えることはないどころか、PSYCHOTIC YOUTH史上最高傑作なパワーポップ・パンク・アルバムに仕上がってますんで、たまにはキャッチーなのもいかがでしょうか?!ということで、PSYCHOTIC YOUTHのメイン・パーソンでもあるヨルゲンにインタヴューを敢行。自身のことまで包み隠さず話してくれているもんで、面白い内容になっているんではないでしょうか。

INTERVIEWED:オニギリギリオ(Waterslide Records) PHOTO:中上マサオ(Target Earth Records)

■やあ、ヨルゲン調子はどう?まずは自己紹介とEL ZINE読者のために結成のいきさつを教えて。

「やあ、みんな。俺がPSYCHOTIC YOUTH創設者のヨルゲン・レッド・ウエストマン。1984年か1985年にスウェーデン北部の小さな村でアンダースっていう幼馴染と始めたんだ。俺が18歳の時だったよ」

■1999年に活動停止する前のことを聞きたいんだけど、それまでの活動においてツアーってどこの国を回ったことがあった?

「そのスウェーデン北部に住んでいる時に2枚のアルバムといくつかの7"をリリースしてたんだけれど、そこにはライヴをやる場所なんて一切なかったから、俺たちは南のヨーテボリに引っ越した。そして、1989年のアルバム「SOME FUN」が注目を集め、その後8年間そこでコンスタントに活動してたんだ。ツアーの殆どはスウェーデン国内だったけど、ドイツ、オランダ、オーストリアを回るといったヨーロッパ中部のツアーは数十回はやったよ。ヨーロッパ以外はその頃はやったことがなかった」

■スペインやイギリスとか他のヨーロッパの国からツアーのオファーって当時なかったの?メジャーからリリースされてた日本からは?俺が一番最初に君たちを知ったのは、日本のテレビで君らの曲のPVが流れたからなんだよ。レーベル間の話で君たちまで、オファーが知らされてなかったんじゃないの?

「スペインやフランスなどの国からも誘いはあったんだよ。けど当時、俺たちにはツアー・マネージメントが付いていて、奴らがスカンジナビア半島ツアーの方が金になるって思ってたようで、国内周辺ばっかりだったんだ。俺たちのレコードはスペインやフランスでもリリースされていたけど、80年代、90年代にその国々を訪れることはなかったな。日本からは2回誘いはあった。最初は当時の日本でのレーベル、テイチクが90年代初頭にその手配をしてくれた。けれど、その時ツアーを全て計画してくれていた人が心臓発作で亡くなってしまったためツアーはキャンセルになったって聞か

されたんだ。次の誘いは90年代中頃に、ボーダーブレーカーズってとこで、またもやツアーはキャンセルになったんだ、担当者が脳卒中になったって理由で。俺たちのツアーをブッキングするのは危険みたいだぜ（笑）」

■その当時、仲が良かったバンドは？誰とツアーを回ったりしていたの？

「スウェーデン国内だったらジャンル問わずに、その頃に人気のあった全てのバンドとは一緒にやったことあるんじゃないかな。ヨーロッパ・ツアーだったら、HARD-ONS、SURF TRIO、RICHIESなんかと一緒に回ったな。スイスのハードロック・バンドKROKUSとか、ジャマイカのレゲエ・バンドTHIRD WORLDなんかとも何回か一緒にやったんだぜ。フェスとかで言ったらGREEN DAYやRED HOT CHILI PEPPERSともやったな。その頃って俺たちがフライヤーの一番上に名前があって、逆に彼らは一番下に名前があったんだけどね（笑）」

■本当に？今じゃ立場大逆転だね（笑）。本当に当時のPSYCHOTIC YOUTHは凄かったんだな。GREEN DAYやRED HOT CHILI PEPPERSと一緒にやったフェスってどのくらいの規模だったの？

「1990年のROSKILDE FESTIVALで俺たちはトリで深夜2時の出番だった。最初は照明のせいでステージ上からは客席が全く見えなかったんだ。けど、ライヴの終わりに照明を客席に当てた時に数千人のお客さんが見えたんだよ。その瞬間、俺の膝が震えた（笑）。スウェーデンで最大のHULTSFREDっていうフェスにも出たことがあるんだけど、デンマークでライヴをやった後に急いで会場に向かったんだ。会場に着く直前、俺たちのツアー・バンのタイヤがどっかに転がっていっちゃってさ。メンバー全員凍りついて、その日のライヴは散々だったよ」

■PSYCHOTIC YOUTHって日本だとポップ・パンクや、パワーポップが好きな人に最も人気があるんだけど。スウェーデンではどんな感じだったの？もっとガレージ寄りの人に人気があった？それとも、アルバムごとに支持層が変わっていった感じ？

「君の言うように、俺たちは時期ごとに音楽性も違ってたからな。活動を開始し始めた1985年から88年頃は60'sガレージ・バンドだったからね。数年前に大きなフェスで当時のラインナップでライヴをやったんだよ。まあ、それは置いといて、1989年以降1999年までは、俺たちはパワーポップ、サーフポップ・パンク・バンドに変わっていった。その変化によって今日までも俺たちが注目を集め、多くの人に愛されるようになったんだけどね」

■なるほど、やっぱり日本と同じ感じなんだね。売れてた頃はバンドだけで生活出来ていたの？他に仕事をしなくてもやっていけてたの？

「実は俺が18歳でこのバンドを始めた時ってメンバー全員サーブ（車会社、SAAB）の工場で働いてたんだよ。1990年頃まではそのままだったよ。その後、バンドの売上やツアーで生活していた。俺は1996年頃まではコンピューター・ゲームのサウンド・エディターもやっていたよ」

■2016年にリリースされたベスト盤「POWER POP TO DIE FOR」(Waterslide/Target Earth)で執筆してくれた長編バイオグラフィーによると、成功を掴めずにもがいてたって書いてあったけど、当時って通常のライヴにはどの位の人が来てたの？

「1989年から94年頃に限って言えば、俺たちはつきまくってた。けれど、それ以降メンバーの幾人かが脱退し、新しいやつが加入したりで、それまでのように注目されることが徐々になくなってしまったんだ。大きなレーベルも俺たちに興味を示さなくなったし、解散前の最後のアルバム「STEREOIDS」だって低予算でレコーディングをする感じだったし。1999年、俺たちが停止したときは、会場の規模もこれまでよりも半分程度の大きさになっ





てたよ。もちろん、ライヴの本数もかなり減ってたしね」

■そういえば、アルバム「STEREOIDS」はスウェーデン国内は君の友人であるDolores Recordingsが、流通をするはずだったって言ってたよね。結局はその話は流れちゃったけど、彼らと仲が良かったって意外だった。

「Dolores Recordingsのイスマイルとは一時期オフィスをシェアしてたんだよ。で、その上の階には同じくDoloresのマッツもいたんだ。不運にも「STEREOIDS」の流通を頼んだ時期にマッツが破産しちゃったんだ。で、彼の倉庫にあるもの全てが数ヶ月に渡り差し押さえられてしまった。だから、国内で売る時期に1枚も売ることが出来なかったよ」

■そうなんだ。Doloresと言えば、RANDYとかSTARMARKETと一緒にやったりもしてたの？90年代、EPITAPHやFAT WRECKのようなメロコア・バンドが世界中で人気を集め、スウェーデンの多くのバンドもそのスタイルを模倣したでしょ。やっぱりあの頃は対バンもそういったバンドになっていったの？当時はそういったバンドについてどう思っていた？

「俺はRANDYもSTARMARKETも大好きだよ。スウェーデン国内でもソフトコア（日本で言う所謂メロコア）が炸裂したし、俺は90年代中期にGROOVEっていう音楽雑誌を発刊してて、そういったバンドにインタヴューもやってたよ。そういったバンドと一緒にやったかについては、俺が覚えている限りないな」

■そうだ、これは聞いておかないと。EL ZINE読者はポップ・パンクやパワーポップよりもハードコア・パンクを掘り下げている人が多いと思うんだ。スカンジナビアのハードコア・バンドと一緒にやったりはした？ヨルゲン自身もハードコアを聴いたりしていた？今のPSYCHOTIC YOUTHのハロイネは、ヨーテボリ・シーンの初期の頃からシーンにいた人だってことは聞いてるんだけど、君はどうだった？

「ハロイネこそがパンクについてはアインシュタインだよ（←博識があるって言いたいようだ）。俺自身についてだと、さっきも言ったように音楽雑誌をやっていたから所謂ソフトコアなNO FUN AT ALL、MILLENCOLIN、BLENDERといったバンドの方が知り合いなんだ。「STEREOIDS」に収録してる"Super Stupid"や"Going Nowhere"は実はちょっと意識して作ったんだ。そういえば、数年前にロカビリー・フェスティヴァルでNO FUN AT ALLのスティーブンと会って、奴もロカビリーをやってるから、1800人の観客の前でドゥーワップの曲を2人で一緒に歌ったよ。ハードコア・バンドのいくつかとも恐らく一緒にやったことはあるけど、よくわからない。ハロイネに聞いたほうがいいと思う」

■ハロイネはヨーテボリ・シーンの生き証人だもんね（笑）。トラル・パンク・バンドとかとは交流はなかったの？DIA PSALMAなんてメタリックになったら一時期すごい人気だったでしょ。フェスとかで一緒にやってないの？

「DIA PSALMAとは94年にフェスで一緒にやった。プロモーターが完全にDIA PSALMAの人気を見誤って大変なことになったよ。500人収容のハコに彼らのファン5000人が入ろうとして11人が病院送りになったんだよ。俺たちはDIA PSALMAのすぐ後だったんだけど、みんな恐れてその会場に入ってこなかった…。DLKも好きだし、マートとも仲いいよ。すごくいい奴だよ。ヨーテボリにあるヨーテボリっていうライヴハウスで俺は多くのトラル・パンク・バンドをブッキングしてたしね」

■話は変わるけど、1999年の活動停止。何故その決断をしたの？やっぱり家族との問題？それともPSYCHOTIC YOUTHとして続けていくことに飽きてしまったのかな？

「全てが終わりに向かってたんだね。俺たち全員、家族との問題を抱えていた。離婚や、ライヴの度に子供をほったらかして行くことになるし、そうすると奥さんが出てっちゃったりさ。アルバム「STEREOIDS」で、アメリカではBOMPと契約することが決まって、俺たちは1ヶ月以上に渡る長期アメリカ・ツアーをすることにしたんだ。そしたら、ドラマーとベーシストが練習に来なかったんだよ、俺たちはそのツアーに行きたくないってさ。それで俺たちはおしまい。俺とウルフ（ギタリスト）は話し合って、もうこのバンドを葬ろうって決めたんだ。その後、俺たちは最後のライヴを俺の地元で1本だけやったんだ。その日の模様は俺たちのライヴ・アルバム「ALIVE UNDER THE MIDNIGHT SUN」(Target Earth)で聴くことが出来るよ。Target Earthにはまだ在庫があるはずだから、気になったらチェックしてみて」

■活動停止期間中、ヨルゲンはロカビリー・バンドTHE BUCKSHOTSを始めたでしょ？ロカビリーってスウェーデンでは未だに人気があるの？90年代初頭に世界中でサイコビリーの人気が高まった頃に、日本ではロカビリーも再評価されたんだけど。

「スウェーデンじゃ2003年から2014年頃までロカビリーがマジで最高に盛り上がったんだよ。俺たちは丁度その間にいたんだ。今じゃ、そのシーンはほぼ壊滅したけど。けど、熱狂的な奴らは未だにいて、奴らの家も50年代の家みたいにしちゃってて、家の前にこれまた巨大なキャデラックを置いてたりするんだよ。THE BUCKSHOTSは2008年に解散して、その後はレッド・ウエストとしてソロでやり始めたんだ。当時の俺の嫁とブギウギ・プレーヤーとして5枚以上アルバムをリリースしたぜ。まあ、奥さんとの関係も去年破局したから、俺はヴィンテージ車の1950年製ビュイック・スペシャルも売り払ったんだけどね」

■2015年、再びPSYCHOTIC YOUTHは戻ってきた。またやろうと思ったきっかけは？ウルフとは長い付き合いだったから彼は当然の復活だったとは思うんだけど、ドラマーのトミーとベーシストのハロイネはどういったきっかけでメンバーになったの？

「復活の理由は俺の古くからの友人であるYUM YUMSのモーテンからの電話。2015年春にカート・ベイカーがスカンジナビア半島のツアーをするんだけど、彼がPSYCHOTIC YOUTHを指名してるってね。もう、俺の結婚生活は破綻してたから、50'sミュージックよりも違ったこともやりたかったし。だから、前のメンバーに再始動しないかって聞いたんだけどウルフしかやりたがらなかった。だから、

レッド・ウエストの最初のラインナップだったトミーとハロイネに声をかけたら、彼らはやりたがってくれた。数回だけ、一緒に練習して6年振りになる俺のパワーポップ・ソングをやりにツアーに出たんだ」

■日本ツアーする前は、日本でライヴをやるのが夢だったって言ってたよね。実際に来てみてどんな印象を持った？日本の状況やバンドは君にはどう見えた？

「まず、第一に、とにかく、日本のみんなは最高だった！俺たちみたいなのが、いつだって歓迎されて喜んでもらえたんだから。ヨーロッパだと観客はもっと大人しいんだ。ビール飲みながら、バンドが演奏してるのをただ見てる。本当に日本のファンに出会わなかったら、バンドを継続していこうって思わなかっただろうし、ニュー・アルバムをリリースすることもなかっただろうね。次に、日本のバンドがすごく良かった。THE HUM HUMSが俺の一番のお気に入りなんだけど、PelotanもFelix!(The Band)、ROCKBOTTOM、BANANA ERECTORS、PLUM CRAZYSも俺のお気に入り。スウェーデンにいると日本のシーンが恋しくなる」

■ツアー中、一番面白かったことは？

「ライヴの後にお客さんと会ったり、出演したバンドや関係者みんなと打ち上げで話せたりするのが楽しかった。あと、渋谷もそうだけど人でパンパンに混雑してる交差点で、事故やトラブル無く渡れてるのも驚いた！」

■そういえば、みんな渋谷の交差点には驚いてたね。再結成後、日本以外はどこの国に呼ばれて行ったの？みんな待ち望んでいたんじゃない？

「新しいアルバムの制作中はスウェーデン国内でいくつかライヴをやって、スペインに行ってTHE BOYSとマドリードで一緒にやったよ。THE BOYSは俺の子供の頃のヒーローだったんだ。だから過去に"Weekend"のカヴァーもやったんだ」

■THE BOYSは日本にも何度か来てるよ。ダンカン抜けちゃったでしょ？スペインはどうだった？

「今、俺の友達のヨーテボリのSATORってバンドにいたケントがベースで、FULL METAL JACKETZのマーティンがドラムでTHE BOYSに加入してるんだ。スペインのお客さんはすごく良かったよ。俺たちが自分たちでマーチャンダイズを売ってるのを見てビックリしてたみたいだけど」

■ニュー・アルバムについて聞かせて。「STEREOIDS」から18年振りだよね。日本ツアーの最終日が終わった夜、絶対に新作を作るぜって俺に言った約束を守ってくれたね。やっぱり理由は？

「日本のファンのおかげ。彼らと会い、絶対にやってみるべきだと心が動かされた」

■どんな作品にしようというアイデアはレコーディング前にはあったの？

「太陽と心地良いサウンドって考えていた。けれど、俺の離婚が重なり、今まさに俺の状況さながらの傷心ソングいっぱいになった(笑)。まさに、このアルバムは歌詞から俺の本音を感じ取れる！DM3をラフにしたような感じで、キャッチーなパワーポップが好きな人には絶対に気に入ってもらえる作品だと思う」

■今作ではTHE KIDSの"This Is Rock'N'Roll"のカヴァーをやっているね。彼らは2008年に日本にも来てるんだけど、これまでに会ったことはある？

「いや、正直に言うとレコーディング中にYouTubeで彼らのこの曲を聴くまで、彼らの曲を聴いたこともなかったんだ。ノルウェーにもTHE KIDSってバンドがいて、それがつまらなかったから、同じバンドじゃないかと思ってこれまで彼らの曲をわざと避けていたんだよ」

■レコーディングはスムーズに進んだの？

「10年前に自宅の地下にあった4部屋を改装してスタジオにしているんだ。録音費用も一切気にすることがなかった。今作じゃ出来るだけライヴに近いサウンドにしたかったんだ。だからみんな同じ部屋に入って3、4回合わせて、次にドラムとベースだけをそのまま録音して、後から残りを重ねて録音していった。全部の作業を2週間で多分終わらせたかな。で、その後はYUM YUMSを手がけているクリスチャン・ジャコブセンに送ってミックスをやってもらった。彼はYUM YUMSのモルテンの娘と結婚して、モルテンも一緒の家に住んでいるからモルテンも共同プロデューサーって感じだよ」

■今後の予定や言いたいことがあればどうぞ。

「まずはスウェーデンでレコ発を2回やって4月からドイツを皮切りにスペインのフェスに出たりツアーに行くよ。昨夜ポール・コリンズから連絡があって5月に彼とカート・ベイカー・コンボと俺の地元で一緒にやるんだ。未来は明るい、はず(笑)。日本にも再び行きたいよ。日本のみんなのおかげで俺たちは新しいアルバムを作るきっかけをもらった。本当にありがとう！」

■最後の質問。生涯に渡り大好きなレコード10作をあげて。これで解放してあげます！

「マジか、一番大変なやつだろこれ。頭の中に浮かんだ10作はこれ。

THE YUM YUMS/...Whatever rhymes with baby
THE PLIMSOULS/One night in America
DM3/The best of DM3
THE KRISPIES/Solid gold rockstars
LINK WRAY/Rock'n'rumble
THE STOOGES/Fun house
VELVET CRUSH/Teenage symphonies to God
REDD KROSS/Show world
STRAY CATS/Stray Cats
ELVIS PRESLEY/The rockin' days」



KALT BRUCHING ACIDEATH

■ブルチンはいつからやってる？
TR「結成したのは11年夏ごろで、ライヴ始めたのは2012年くらい」
YT「俺がABRAHAM CROSSみたいなバンドをやりたいなと思って。Teraiを誘って、メンバーを探して」
■元々知り合いだったの？
YT「僕とTakumiとTeraiの3人は、同じ某大学の哲学科なんです」
TK「前のベースも同じ大学・学部の同じ学年でした」
■哲学科！何勉強したの？
YT、TR「フェミニズムを勉強しました」
TK「東洋哲学。もう覚えてないけど」
YT「全然何の身にもならなかったけど（笑）。前のベースが13年の冬くらいに辞めて。それでYuyaを前から知ってたから、同い年だし、

EL ZINE vol.20の“Young Punks Go For It”の巻頭対談においてや、前号vol.23でのKAFKAのマユズミ君からなど、その名前だけは何度か言及されていたので、この長いバンド名に見覚えのある人もいるかもしれないですが、東京のハードコア・バンド・KALTBRUCHING ACIDEATH（通称ブルチン）が、満を持して（？）のEL ZINE初登場です。
あれは数年前、GRIEFのTシャツを着て新宿のライヴハウスの前でぼーっとしていた私に、酔っ払ったメガネのナーディーな若者が、「あ、いいTシャツですね」と話しかけてきた。それが私のブルチンとの出会いです。Yuto(Vo.以下YT)、Yuya(Ba.以下YY)、Takumi（Dr.以下TK)、Terai aka TRI NOT 808(Gt.以下TR)のメンバー4人に話を聞きました。

インタヴュー、構成：鈴木智士（焔と煙霧：http://tower.void-server.net/）　[2016年12月18日　池袋某居酒屋にて]



年上と一緒にやろうとも思ってなかったから、誘って一緒にやり始めました」

■最初からこのバンド名だったの？覚えられにくそうな名前を…。

YT「そうです。SPKの曲からだけど、本当は"Kaltbruchig"なんだけど、間違えて"Kaltbruching"にして、まあいいやって」

TR「僕はノイズとかすごい好きで、Yutoに貸したりして、YutoがすごいSPKを気に入ってて」

YT「いつも俺はいろいろTeraiに教えてもらって」

TR「で、ある日夜中にメールが来て、このバンド名にしようって。いいんじゃないかなと」

■何でまたSPKだったのか…。

TR「たまたまだよね」

YT「元々はSORE THROATの曲名から探してて、でも大体もう使われてて、いいのがなくて。ちょうどそのころノイズをよく聴いてて、これはちょうどいいなと思って」

TR「僕はいつも「長いバンド名のクラストやってるんですよ」って言います」

一同「意味がわからん（笑）」

TK「酔っ払ってるときにTeraiがバンド名を言うと、長いからよくわからない、ってことか」

TR「そのころは、ハードコアとかクラストの人が、ノイズやインダストリアルが好きって認識がなかったんです。昔から僕はそういうのが好きで」

■SPINE WRENCHとかは聴いてなかった？

TR「全然聴いてなかったです。バンド始めてから、DEVIATED INSTINCTとかNAUSEAがそういうインダスとかが超好きで、っていうのを知りました」

■Teraiは会うといつもいろんなマイナーな音楽の話を振ってきて、この前は自作のジャンデックのトートバッグまでくれたけど…（笑）。

TK「今日も何かCD-Rくれたよね」

■ああ、じゃあそうやってメンバー間で、これかっこいいよ、って貸し借りしてるんだ。

YT「そうですね。僕もいろいろおすすめしたり。Teraiと2人でいるときは、音源の話以外まったくしないくらいで。LINEでずっとそういう話をしたり。今日も、はるまげ堂でROTの音源買うって言ったら、ついでにこれも買っといて、って感じです」

■そういう交流がないバンドもあると思うけど。

YT「多分みんな好みが似てるからかもしれないですね」

TR「音楽的に、ブルチンは、たとえばD-Beatって限られてるわけじゃないし、みんないろんなのが好きだから」

■じゃあそんなブルチンのバックグラウンドを探るべく、それぞれ今思いつく「好きなバンド3つ」をあげましょうか。

YT「難しいなこれ…。でもテンション上がるな」

YY「ずっとなんですけど、SDS、ナックルヘッド。とりあえずこの2バンドです。最初にパンクを好きになって聴いたのがこの2つで、それがそのまま好き。見た目もかっこいいし、言い方はあれだけど、わかりやすいというか。あとはCRASSですかね。僕は地元が青森で、パンクのレコ屋とかもなかったけど、なぜか地元のCD屋に『Penis Envy』が置いてあって、最初聴いたときはパンクだと思わなかったけど、結構ハマって、それがあったからAMEBIXやKILLING JOKEに抵抗なく入っていきました」

■最初に聴くバンドってのは重要だよね。じゃあ次はTeraiお願いします。

TR「このインタヴューの話があってから、誌面っぽいこと考えてて（笑）。個人的に、ずっと好きなのが、デレク・ベイリーです。ギターで音作りに迷うと、デレク・ベイリーを歯を食いしばって聴いて、タッチがすごいなとか、ああこうなんだとか、今の自分がどういうニュアンスを重視して音楽を聴いているのかわかるというか。あと思い入れのあるのは、何だろう…。MAZZY STARはずっと好きです。Hope Sandovalが、ジザメリの兄貴と付き合ってて、レコーディング中に音止めて解散とか。MAZZY STARはかっこいいですよね。Hope Sandovalの新譜もよかったです」

■『Among My Swan』はいいアルバムだね。あと1つは？

TR「あとはSTRUGGLE FOR PRIDEかなあ。ハードコアを見て、初めて「これだ」と思ったのがSFP。ノイズが好きで、それをどうハードコアに持ってくるかがわかんなくて。20歳のときに見て、ノイズをこんな悪い感じでやっていいんだって。オタクっぽくないノイズのやり方とか。自分がなれないゆえの、憧れみたいなのがあります」

TK「最初はハードコアやD-Beatをあんまり聴いてなくて、あるときHIS HERO IS GONEを聴いて、あ、聴きやすいなあと思って。地元の茨城はレコ屋もなくて、音源も買えない、ジンも買えない状況だったので、音楽を聴くといったら友達を通してでした。友達がハードコアが好きで教えてもらいましたね。こういうのもあるんだと思って。あとはベタですけど、最初に聴いた激しい音楽がメタリカ」

TR「あるあるだ。『Saint Anger』くらいじゃない？」

TK「そうかな。今思うとそんなに激しくないけど、ツーバスがドコドコ鳴ってて。中学生くらいかな。ロバート・トゥルージロが加入した頃」

TR「僕はUKギター・ロックっ子だったので、ラウド・ロックはナシって決めてました。LIMP BIZKIT大嫌い、LINKIN PARK大嫌い」

■みんな嫌いだよ。そういや最近出たメタリカの新譜はよかったの？

TK「聴いてないです」

YY「結構アリでしたよ」

■じゃあTakumi君あと1つ。

TK「あとはVIVISICKですかね。それまでは知らなかったけど、対バンしたときに初めて見て、すごいよかった。曲もキャッチーで。あとずっとブレずにやってるってのもすごいなあと思って」

TR「じゃあ次Yuto君」

YT「ABRAHAM CROSSはずっと好きです。あと2つは、最近聴いてるのがMINDROTと、PRAY U PREY。PUPはPROPHECY OF DOOMのShrewがやってるバンドです」

■それはどんな感じの音？

YT「綺麗な音のPROPHECY OF DOOMみたいな。正直かっこよくはないけど、PROPHECY OF DOOMの人がやってるバンドなので。MINDROTは最近COFFINSのトキタさんに教えてもらって、音源探して聴いたらむちゃくちゃかっこよかったです。カリフォルニアやオークランドのバンドは好きですね」

TR「みんなオークランドのバンドは好きだよね。DYSTOPIAとかSTORMCROWとか」

YT「あとCARCINOGENもかっこいいです。MINDROTのギターと、DYSTOPIAのドラムがやってたバンドで」

YY「LAUDANUMもかっこいいよね、BLACK GANIONとSplit出して、ツアーしてたときに見たけど、音響をがっつり聴かせるようなバンドだった」

■そういうバックグラウンドというか好みがあって、ブルチンみたいな音のアウトプットをしてるけど、こういうのがやりたい、ってのはあるの？特にTeraiは、MAZZY STARからブルチンというのは、そんなに近くないと思うけど。

YT「最初はクラストのバンドやりたくて、ABRAHAM CROSSに影響されたけど、色々聴いてるうちにELECTRO HIPPIESやCARCASSみたいな、クラストからデスメタルへの自然な流れみたいなのがあって。聴いてるものが出す音にも反映されるというか」

■ノイジーなD-Beatみたいなのをやろうとは思わなかった？

YT「GLOOMみたいなノイズ・クラストは、最初は影響受けたけど、特別やろうとは思わなかった」

TK「まわりにそういうバンドが多かったのもあるかも。DROPENDとかAMNESEAとか」



TR「ライヴやり始めた4年くらい前は、クラストっていうとノイズ・クラストみたいなのが多かった」
■それよりも、その時聴いてたデスメタルの影響が強いと。
YT「根本にはクラストがあるんですけどね」
YY「クラスト＋デスメタルみたいな。クラスト要素強めのデスメタル」
TR「ステンチコアって言ってるよね。曖昧で好き」
■ブルチンが始まったときは、ATF（ASOCIAL TERROR FABRICATION）はもうやってたよね？やってる音は割と近いから、影響は受けたのかなと思って。今Takumiは両方のドラムやってるし。
YY「やってる方としては音がかぶってる意識はないですね」
TK「僕も似てるとは思わないけど、どっちもドラムやってて、似せないようにってのは意識してます」
TR「（ブルチンを）始めたときはあこがれのバンドでした。でも曲作るときはATFみたいにデスメタルっぽいリフは作らないように…」
TK「Teraiは弾けないしね（笑）」
TR「弾けないし、もっと簡単なリフで作ってるというか」
YT「いい意味でヘッポコなリフだよね」
TR「ブルチンはデスメタル行く前のクラストですね」
YT「ELECTRO HIPPIESがもうちょっとやってたらこうなってた、という音というか」
■Teraiが本当にやりたいのはノイズ？
TR「そうではないですよ。いわゆる「ノイズ・ミュージック」じゃなくて、ニュアンスというか、鳴らし方が好きなんですよ」
TK「最初ナイフとかでギター弾いてたよね」
YT「でも特別それをバンドに反映させるわけじゃないよね」
TR「鳴らし方というか、ニュアンスを聴いてますね。例えばベロベロに酔った状態で、クラブでハウスを聴いてる頭の状態を音で出すというか。そういうこと考えながらやってます」
TK「最初のコンセプトは「みんなやりたいことをやろう」で、ネタを持ち寄って、それを合わせてやってました。前のベースもアバンギャルドな音楽が好きだったから、遅い曲だったり速い曲だったりと極端で、中間はなかったよね（笑）」
YT「Yuyaが入って、案も出してくれて、形になったのは大きい」
TK「バランスが取れたよね」
■じゃあ次、「若手」という形容詞がつけられることが多いと思うけど、それについてはどう思う？実際そんな若くないよね？個人的には「若手の高年齢化」現象だと思ってるけど、まあ若手に限ったことじゃないか。
YT「俺ら若手とすら言われないですよ」
TR「うそ、思われてるんじゃないの？」
YT「そもそも存在を知られてなかったんじゃないかな」
TR「意外とバンド自体は知られてた気がするよ」
■卑屈になりすぎなんじゃないの？
YT「じゃあ俺の性格なのかな…」
TR「ここ2、3年くらいで対バンが増えてきて、クラストとかともやるようになって」
YY「俺が入ってからだよね（笑）」
■それまではどういうところでライヴやってたの？
TK「金成さんが企画するDFERはよく呼んでもらってたけど」
TR「やれる場所が他になかったかもね」
TK「Yuya君が入ってつながりも増えたし、徐々に認知されていって、音源も出したりしたからなのかな」
YY「質問に戻ると、若手っていう年でもなくない？」
■そうそう、シーン自体がそのまま高齢化してるというか。
TR「クラストとかハードコアで、僕らより若い人がいないんですよ」
■なんで若い人が来ないんだろう。
TK「シーンがウェルカムな状況じゃないから」
TR「情報源がないから。DOLLがないというのは大きいと思う」
TK「そもそもネットで情報が終わっちゃうし」
TR「たどり着く情報がないんだろうね。メタルとかグラインドとかだと若い人がいるけど、ハードコアだといない。この前来てたHARM DONEとかは若い人がいた」
■HARM DONEはどんな感じの客層だったの？
TR「ユースクルーやニュースクールとかでしたね。今クラストコアというジャンルに触れる接点がないんじゃないですかね。グラインドとかデスメタルは、例えばラウドパーク→CARCASSやNAPALM DEATH→UNHOLY GRAVEとかの線があるけど、クラストはそういうのがないかなと。少し上の世代だと、ファッション雑誌にクラストが載ってて、それで知って、という人も多いみたいで」
YT「俺らはパンク・ロックの格好じゃないというか、普通というか」
YY「ポゴ・パンクとかは、東京はいないけど、名古屋大阪は若い子がいるらしくて。それって派手で取っ掛かりがあって入りやすいからかなと」
TR「Yuto君は元々ラフィンとか好きだったでしょ、どうやってクラスト入ったの？」
YT「ラフィンとか見てて、そこでハードコア・パンクのフライヤーとか見て、ネットで調べ





て、一人で見に行って。そのころはISTERISMOとかAVFALLが毎週ライヴやってて。ISTERISMOは見た目もかっこよくて、ボロ履いてて。そういうので知った」

YY「僕は、兄貴がパンク好きで、ポゴのバンドをやってた。その影響で最初はPOGO77とか聴いて、POGO77から出たDVDを見たらABRAHAM CROSSが出てて、そこでクラストにのめり込みましたね。『All Crusties Spending Loud Night』のDVD見て、中でもEFFIGYやZOEが衝撃的でした。ハードコアなのにこんなにメタルなんだと思って」

YT「ABRAHAM CROSSはアシッドというか、サイケっぽいのを出しててすごい惹かれた」

TK「TeraiやYutoがいろいろ聴かせてくれるけど、個人的にはクラストにどっぷり浸かってるという感じではないですが」

YY「高校生の時に青森から東京にライヴ見るために来て、AVFALLとHAAVAの企画とかを見たり、HELLSHOCKやAVSKUMも見に来た。必死にバイトして金貯めて(笑)」

■さっき「シーンがウェルカムじゃない」って意見が出たけど、やっぱりそう思う？上の世代の人たちは多分そこまで「閉じてる」とは思ってないと思うけど、やっぱりニッポン的な上下関係はいつまでもついてまわるし、そういう雰囲気は少しでも年齢が下だとやっぱり感じてるのかな。

TK「海外みたいに上下関係なく、ってのは、日本だとどんな場所でも根付かないだろうから、ある程度は先輩後輩ってのはあっていいのかなと。互いに認め合うというか、リスペクトしあえば、ウェルカムじゃない状況ってのは変わってくると思う」

YT「バンドやってないと認められない、ってのはあるのかも。バンドやってないもっと若い子は、やっぱり入りにくそう」

TK「ただハードコアのシーンは、まだアナログというか、ネットで情報が見つからない、わからないから行きづらい、ってのはあるかも」

■さっき言った、DOLLがない、つまり情報媒体がないからってことか。

YY「フィジカルな関係性の方がいいってのはあるのかも。最初にライヴハウスに行くのは勇気がいるかもしれないけど、行ってしまえばあとは関係ができてく」

YT「ライヴでフライヤーが配られてるってのはいいよね。俺ももらったフライヤー見て、次こんなのがあるんだってまた行ってた」

TK「ハードルは高いように見えて低いんだよね」

YY「最初のハードルだけ高くて、あとは低いというか」

TK「外から見ると、ライヴハウスに行かないとわからないことが多いのかもしれないけど」

YT「ライヴに行けば、「どこから来たの？」って話しかけられるし、俺らも話しかけるし」

TR「パンクの格好してる若い人がいると、おごりたくなるというか(笑)」

一同「いつもおごってるよね(笑)」

■話しかけられるってのはいいことだね。逆にそのハードルが下がることの弊害ってのは何か考える？

TR「別にそこまで最近の話って訳でもないですけど、アニメだったりアイドルだったりのオタク趣味のハードコアの人たちがそういうノリを自分のやってるバンドに持ち込んだり、そういう格好でライヴに来たりしてて。もちろんオタク趣味を否定する気もないし、僕みたいなナードが否定する権限もないと思うんですけど、僕は怖くて近寄りがたい人たちが、薄暗いライヴハウスでギラギラした爆音と暴力を刹那的に表現するハードコアのかっこよさに憧れてバンドをやっているので、やはりハードコアの表現としてオタクなノリを打ち出す人とは距離を感じたりしますね」

■そこはピュアなハードコアという文化を守りたいってこと？

TR「そうですね、そこの表現に関してはカルチャー的に保守でありたいというか、きちんとハードコアのかっこよさをバンドでは提示して行きたいです。オタクなノリを打ち出す事で、ハードコアのライヴの敷居の高さを下げるというか、アクセスのしやすさを実現している部分ももしかしたらあるのかもしれませんが、様々な文化がネットなどでインスタントに消費できてしまう今だからこそ、逆に表現の敷居の高さやハードコアのカルチャーとしてのかっこよさを提示して行く必要性があるべきだと思います。まあ、うちのバンドもそこに関してはまだまだかなぁとは思うし、僕もさえない風貌なんであれですけど…」

■確かにブルチンは敷居が低いというか、なじみやすいキャラクターだよね(笑)。ちなみに同世代で仲いいバンドは？

YT「ASUKA AND THE BUM SERVANTSのアスカとか、元RECONSIDERATIONで、今はTITSやってるユウスケとかは毎週遊んでます。同じ世代ですね。THE ERECTIONSのドラムのタロウとか。今はみんなバンドやって知り合って仲いいけど、実は19歳の時とかに、同じライヴとかにお互い一人でポツンといたことが、今になってわかるとかありますね。ZONE-Bのバーカウンター行くとみんな楽しそうに喋ってるから、俺は下で一人でいて、ああ、あのときにお前も一人でいたんだ、って」

TR「新潟のクボ君」

■じゃあ最後に、これからやりたいことは？

YY「年内にレコーディング、7インチをリリースできればなあと」

TR「10月に企画をやる予定です」

TK「GONGURIに誘われて、9月くらいに韓国行くつもりです」

■アメリカ・ツアーとかは？

YT「俺らびっくりするくらい金がないから…」

TK「全員がツアーに融通きく仕事してるわけじゃないから、なかなか難しいですね」

TR「僕はいつでも行ける環境です！」

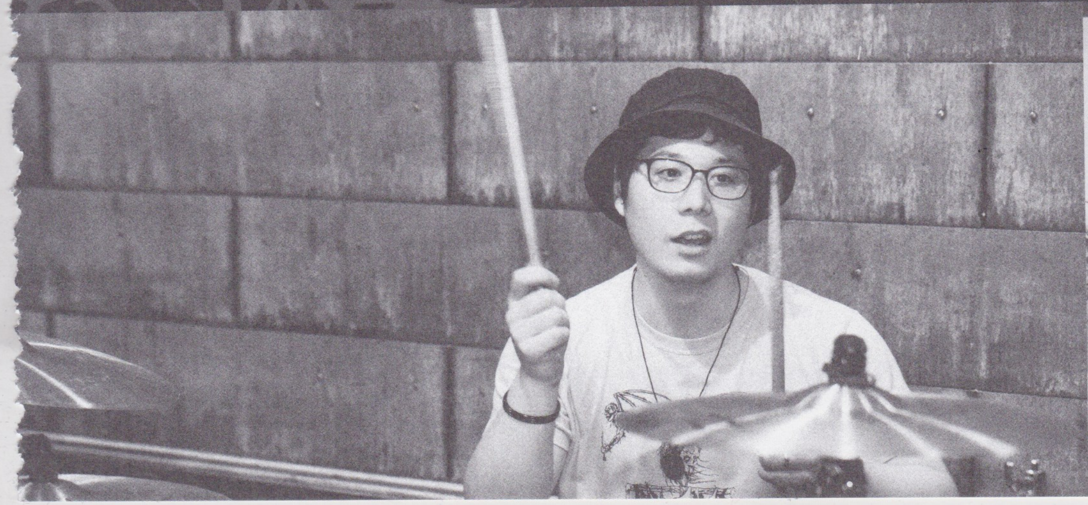
■長期的に、何か展望みたいなのはある？

TK「個人的にはマイペースに長くやってきたい。マイペースにしがみついてというか。このバンドがいいのは、バンドを100%優先でやってないところですね」

YT「生活ありきだからね」

YY「単純に楽しんで続けられればいいなと」

TR「バンドはホビーですよ！」







ABRASIVE WHEELSが“Voice Of Youth”と叫んだのが36年前のこと。パンクは今やスッカリ“Voice Of Aged”が主流になってしまいましたが、弊誌vol.20の特集でインタヴューさせてもらったバンドや、前頁のブルチンなど、精力的な活動をされているお若い方たちはたくさんいます(…たくさんではないか)。
さて、そんな中でも最若手であろう人物が名古屋ハードコア・パンクの新星、INMOHのヴォーカル:Kentさんです。80年代のジャパニーズ・ハードコアを彷彿とさせる“ビッグ・モホーク”とそのサウンドに衝撃を受けた方も多いのではないでしょうか?!
今や貴重とも言える10代のパンクスの声を聞くべく、年末年始に、複数回に渡りメールで質問をぶつけてみました!ショボクレタおっさんたち(…私を含む)、ウカウカしてるとヤラレるぜ!!

■人づてに聞いたので間違っていたら申し訳ないのですが、Kentさんは今、高校生なのですか?ハードコアを聴いている同級生って結構いたりするのでしょうか?

「はい、高校生です。同級生でハードコアをやっている人は聞いたことがないし、そもそもバンドが流行ってないです」

■単純に気になるのですが…、今の高校生の間では何が流行っているのですか?あと、同級生や学校に対する苛立ちとか、「俺はお前らとは違う!」みたいな感情って抱いたりしますか?自分が学生だった頃を思い返すと、ハードコアを聴いたりライヴに行くときだけが楽しくて、学校では無性にイライラしていたなぁ、と思ったり。

「今の高校生は、というか自分のまわりでは、昔から特別に何か流行ってるものがない。今時の若い奴らとかは、みんなが暴走族になるとか、みんながパンクになるとか、昔のようなムーヴメント的なものがない。流行ってるのは、一時的なケータイのゲーム・ブームや、SNSだけ。学校の同級生とかへの、苛立ちをあげるとしたらそういった部分。みんなが、ずっとケータイを握ってることに違和感を感じてる。学校生活で、いやなことは他にはないかな。パンクは俺だけだけどこの髪型でいても許されてるし」

■そもそもの話しですが、Kentさんはどうやってハードコアを知りましたか?これまた人づてなのですが、お父さんはSAMURAI ZINEを発行されていた方なんですよね?ハードコアを聴くにあたって、お父さんからの影響はありましたか?

「小学生の頃は、他の奴らと違うのが格好良いと思ってた時期で、格好つけて聴いてたのが、RAMONESやSEX PISTOLSだった。一番好きだったのがCLASHでハードコアを聴き始めたのは中学校に入ってから。当時からパンクの雑誌とかは、色々買ってたからハードコアのレコードを聴いてみようと思うのは自然なことだった。当時はEXPLOITEDやGBHとかはしっくりこなくて、その頃から日本のハードコアが一番格好良いと思ってた。親父はSAMURAI ZINEを発行していた人みたいですが、むしろ親父からは何も教わっていません。小さい頃から家ではグラインドコアがかかっていたけど、うるさい音楽としか、思ってなくて、自らパンクを聴くようになって、大分してから、グラインドコアにも関心を持つようになったときに、一度だけSOBのライヴに一緒に行ったことがある」

■小学生でパンクを聴き始めるのはかなり早いですね。僕も10歳くらいのときに初めてパンクを聴いたのですが、それは6歳上の兄からの影響でした。Kentさんは自分でRAMONESやSEX PISTOLSを見つけたのですか?それとも、年上の友だちとか、教えてくれた人がいたのでしょうか?

「誰かに教えてもらったりはしてない。海外のバンドとか聴いてたら格好良いかなと思って、ただ単に格好つけて聴いてみたかった。雑誌とか立ち読みするのが好きで、RAMONESとか、SEX PISTOLSとかは、目に入りやすい名前だった。BEATLESや、ROLLING STONESとかは当時は見た目がダサいと思ってあえて聴かなかった」

■パンクを初めて聴いたときっていうのは、インターネット上で、Youtubeとかでしたか?それともCDで?

「最初はブックオフで、たまたま見つけて買った。Youtubeとかで、音楽を聴くのは今でも抵抗を感じるので、それはしなかった」

■それで、どうしてINMOHを始めたのですか?結成はいつぐらいのことですか?また、INMOHの前にバンドはやっていましたか?

「INMOHの結成がいつ頃かは覚えていない。最初に始めた頃は、幼馴染み4人で遊び感覚で始めてパンクを聴いてたのは俺だけだった。今のオリジナル・メンバーは既に自分だけ」

■INMOHというバンド名はINSANE MORALITYの略なのですか?陰毛とも表記していますが、80年代のジャパニーズ・ハードコア的なネーミングにも感じました。どんな意図を込めてこのバンド名をつけたのですか?

「INMOHというバンド名は、最初にバンド名を考えているときにジャパニーズ・ハードコアのイメージにしたいと思って、メンバーに漢字2文字がいいと提案した。当時ギターを弾いてた奴が天然パーマで、そこから陰毛という名前をとった。INSANE MORALITYというのは後付けで、考えた(笑)」

■結成当初に狙っていたサウンド、「こういう音をやりたい!」というのはありましたか?結成当初と現在とでは、サウンドに変化はありますか?

「結成したときはただ単に遊んでただけで、作ってた曲もふざけていた。SEX PISTOLSやRAMONESの替え歌のカヴァーもやったりしていた」

■CD-R音源のばら撒きは、どうしてやろうと思ったのですか?名古屋だけではなく、色んな地域のレコード店さんなどで配布していますが、何枚くらい作ったのですか?

「面白そうだから。色んな人から色んな反応があって今でも面白い。海外にも送ったりして、合計で500枚以上作った。全部手作業で(笑)」

■Kentさんの写真を見ると、モヒカンを立てて鋲を打ったベストを着ていたりと、ビシッとキメていますよね。パンクに惹かれる魅力の一つには、そのファッションというのもありますか?

「それは、当たり前だと思う。ヴィジュアル面は重要な表現の一つだと思うし、それを見てパンクが格好良いと思った。他のシーンのバンドとハードコア・パンクとの大きな違いだと思う」

■INSANE MORALITYという自主企画もされていますか?企画のコンセプトがありましたら聞かせてください。

「企画は数回しかやってないけど、普段パンクのライヴに来ない奴が、ハードコアのライヴを見るという環境が出来ればいいなと思う」





■自分とINMOHに大きな影響を与えたバンドを、好きなだけ挙げてもらえますか?あわせて、「XXXというバンドの、こんなところに影響された」という説明もして頂ければ。

「ジャパニーズ・ハードコア・パンクに強く影響を受けた。今でも自分は日本のハードコア・パンクが一番格好良いと思っている」

■具体的なバンド名は挙げられますか?例えばDEATH SIDEだったり、LIP CREAM、鉄アレイとか。

「よく何が一番好きなのと聞かれるけど、一番はないんですよね。日本のハードコアが一番格好良いと思ってるけど、具体的な名前を出すとキリがないので(笑)。もちろんその3バンドとも大好きです」

■曲作りはKentさんが主にやっていますか?どんな感じで曲を作ったり、歌詞を書いていますか?

「曲は自分が作っている。鼻唄とかで思いついたギターのメロディーを、覚えておいて曲であわせてみたりする。歌詞は、100%自分で考えている」

■INMOHというバンドを通して最も言いたいこと、伝えたいメッセージはありますか?

「バンドは人前に立ちたくてやっている。髪の毛立てて、大きい声出して、自分の格好良いと思ってることを表現して、それをパンクじゃなくても、色んな奴の前で見せつけたい」

■質問と言うよりもこれは相談なのですが、若い人に、ハードコア・パンクに対してもっと興味を持ってもらうには、一体どうしたらいいと思いますか?Kentさんの目から見て、「こういうことをしてみたら?」というアイデアは何かありますか?

「みんなが本気になれば、簡単なことだと思う。俺は、世界で一番ハードコア・パンクが格好良いと思ってるから。認知度が、パンクが衰退していっている最大の理由だと思う」



11月６日　カムデンにて完全に浮かれるオレとネンジ

kriegshög london tour report

TEXT:ナガノ シンゴ

ロンドン・ツアー・レポート　前書き

お前らロックしてるかい?オレは特にしてないぜ!!

と、懐かしい前置きはさておき行って来ましたロンドン・ツアー!!何故オレ達がロンドンに行ったのかは、前号のEL ZINEのインタヴューを見れば書いてあるので買ってくれ(切実)!

さて、読者諸君はまず初めに何故ヴォーカルのマサキじゃなく、ベースのオレがツアー・レポートを書くのか?という疑問が浮かぶだろう。大体こういうのはヴォーカルの仕事なのに、と。

恐らくだが前にやったEL ZINEの"ボクとPOISON IDEA"という企画でマサキに白羽の矢を立て原稿を依頼したものの、POISON IDEA云々よりもマサキ自身の暗い青春やフラストレーションを只々書き綴った限りなく個人的な日記に近い駄文に発刊人の山路氏がうんざりしたからだと思うのだが、どうだろうか?しかも"私とPOISON IDEA"という企画名と勘違いしたマサキの原稿の一人称が全て私となっているのも見逃せない。ともあれ折角の機会なので薄れていく記憶を手繰り寄せながら書いていこうと思う。

10月31日　成田空港

仕事の鬼と化したドラムのネンジさんを除く3人はこの日が出発日。21:30発だけどマサキが成田空港でみんなで飯でも食おうぜって言うんで、19時集合にする。だがいきなりマサキが遅刻(笑)!ヤツは仕事だとかなんとか言っていたが嘘だな。多分サンディエゴ・タイムとかいうヤツだと思われる。

特にやる事のないオレとテラはマサキが来るまで中華屋で飯を食いながらビールを飲む。暫くするとマサキ到着。とりあえず無視する(笑)。

その後、表面上仲直りしたオレ達はWi-Fiのレンタル手続きを済ませ無印良品で首に巻く枕やらなんやらを調達しチェックイン!今回は労働ビザなので楽器も機内に持ち込みOKだし普段着でOK!パコの計らいに感謝!前にアメリカへ行った時は観光ビザだったので楽器は現地に送り、バンドマンっぽくない格好で来いとの事だったが、オレは普段着で行きISTERISMOのショウゴにだいぶヨレヨレのスウェット上下に強制的に着替えさせられた事を思い出す(笑)。バンドで演奏する事がバレると最悪入国出来ないのでしょうがないんだけどね(笑)!その時のリベンジも兼ねて今回のオレは、TURBONEGROヨロシクなブルーデニム・セットアップのガチギメ・スタイルでロンドンにかちこむ事にした。そしてフライト。さよなら日本。いざロンドンへ。

11月1日～2日
アブダビ空港～ヒースロー空港

約8時間のフライトの末、中東アブダビに到着。そうオレ達のフライトはロンドン直行便ではないのだ。世の中そんなに甘くはないのである。

アブダビに着いた瞬間に香るスパイシーな匂い(笑)。そして暑い。機内でビールを飲んでいたのもありはしゃぐオレ。とりあえず写真を撮る。砂漠とか見たかったが、空港だからか夜だからかわからないが外は何も見えず。残念。

とりあえず飯にする。AEDがここの通貨だがそんなの持ってないのでクレジットで全て支払う。便利だなー。

飯を食いながら周りを見てみると高級ブランド店ばかりが目立つ。きっとここに来る人達は金持ちが多いのだろう。待ち時間が約3時間もあるのでとりあえずカルティエの前等で写真を撮ったりしてみる(笑)。

そしてチェックイン。このチェックインの度にブーツを脱いだりペンダントを取ったりするのがかなり面倒くさい。やはりヨレヨレのスウェット上下は正しかったのか!?ともあれ無事チェックインを済ませ2度目のフライト!アブダビからさらに4時間かけてヒースロー空港に到着!長かったぜ!!

チェックアウトを済ませ荷物を受け取ると迎えに来てくれたのはARMS RACEのギターのチャーリー!少し喋って礼をして外へ!ロンドンの地を踏みしめる…。寒っ!ロンドン寒っ!風邪ひくわ!そして噂通りの曇り空!やっぱりか!恐るべしロンドン!

チャーリーと話しながら車に乗る為に道路を渡る。ビートルズ風に歩いたのは言うまでも

ないだろう。車に乗り込みパコの事務所に向かう。景色が良い。建物もなんかシャレオツ。終いにはゴミの散らかり方すら格好よく見えてくる(笑)。暫くして到着。待っていると自転車屋からパコがやって来る!なんでだ?疑問はさておき再会の挨拶!パコと一緒にニコも登場。彼はARMS RACEのベースでパコのレーベルの手伝いをしているらしくオレ達のレコードを袋に入れたりしたらしい(笑)。サンクス!あとRIXEのジャケットの絵もニコが描いてるみたい!んで後でパスタ食う約束をして今回のオレ達のロンドン滞在中に世話になるジーザスの家へ。着くとジーザスはいないみたいで彼女のエミリーが迎えてくれる。オレ達の為に家を片付けてくれていたみたい!ありがとう!ジーザスは今エミリーの家に引っ越しの最中らしくこの家は好きに使っていいよだって!悪魔を召喚出来そうなサタニックな部屋で素敵だ(笑)。ありがとうジーザス!


ジーザス・ハウスの外観!シャレオツ!


サタニック・ジーザス・ハウス from ネンジブログ

荷物等を置き少しゆっくりしてエミリーを残しパスタ屋へ。オレ達とパコ、ニコ、チャーリーで酒飲んでパスタを食う。食い終わりニコ、チャーリーとはここで別れる。そしてオレ達とパコはコーヒー・タイムを挟みパコの事務所へ向かう事に。着くとやっぱりあの自転車屋だ。自転車屋のシャッターを開け中に入ると地下へ行く階段が!秘密基地みたい!興奮するオレ達。階段を降りるとそこがパコのオフィス兼倉庫。大量のレコード!また興奮(笑)!

そしてパコがオレ達の新しい7インチを持って来てくれる!ここでオレ達は初めて現物を見る。


11月1日　パコの事務所にて
新しいレコードを見て浮かれる3人

良いね〜!オレの念願だったドーナツ盤に銀文字!最高!ジャケットもオレの注文通り!面倒くさかっただろうしコストもかかったと思う。

何も言わずに好きにさせてくれたパコに感謝!

そしてみんなでレコードを聴く(笑)。

しかも結構聴く(笑)。良いね〜しか言わない(笑)。LPの再プレスの方はパコに全部任せたんだけどこっちもかなり良い感じ!ひとしきり聴きパコのリリースしたレコードを見せて貰う。欲しいのが何枚かあったので買いたいと伝えるとプレゼントだ!と全部貰った!太っ腹だぜ!ありがとうパコ!

その後はBARへ。ビールやらサイダーやらを飲んでると今回のStatic Shock Festivalの主謀者で、オレ達を呼んでくれたトムがやって来る!挨拶やらお礼をして一緒に飲む!そうこうしているとテラ撃沈。ロンドンではBARで眠ってしまうのは厳禁らしくテラだけ先にジーザス・ハウスへ帰還。因みに店員さんを呼んだり手を挙げるのもダメらしい。どうやって店員さん呼ぶんだ?って聞いたら、目が合うまで見て目で合図するとこっちに来るとの事。惚れてまうやろ(笑)!暫くしてパコがドラムをやってるTHE LOWEST FORMのルークも合流。PumaのTシャツを着ていて個人的に衝撃を受ける(笑)。ルークはレコ屋で働いているみたいで明日行く約束をする。その後も飲み続けているとジーザスとエミリーも合流!ジーザスと再会の挨拶を交わし家のお礼をして飲む!するとお前らフィッシュ&チップス食ったか?と聞かれたので食ってないと言うと、よし!オレが頼むから食ってみろ!てな訳で人生初のフィッシュ&チップス!うーん。別に美味くない(笑)!味がない(笑)。そろそろ帰るかと話してるとオレが奢るからもう一軒BARへ行こうとジーザス。マジか!?今、何時(笑)?だがしかし!折角の誘いなので次のBARに行き飲む(笑)。

飲んでるとイッキ大会が始まる。国が違えどやる事は一緒だな(笑)!バーミアーミー!

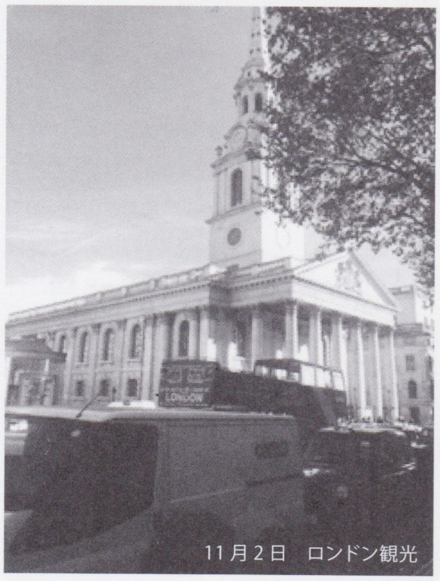

11月1日?2日?
ベロベロになり何故か柱に登ろうとするオレとマサキを楽しそうに支えるジーザス(笑)

そしてたらふく飲んだオレ達は店を出て少しばかりはしゃいだ後、ウーバーを使いジーザス・ハウスへ。ウーバーとは個人がやってるタクシーみたいなもんで、タクシーより安くて便利なんでこっちでは凄く浸透してる感じ。携帯とかで自分達の場所から行き先を入力すると、その近くにいるウーバーの運転手達と料金が表示されるので一番近くにいる運転手に来てもらう。会計は登録してあるクレジット・カードで勝手に精算される。お互いGPSがあるので何処にいるのかすぐ分かる。日本でも外人の多い六本木とかではあるみたいだけど、あまり普及してないみたい。凄く便利なのに普及してないのはタクシー業界となんか色々あるんでしょう(笑)。

んでジーザス・ハウスに無事に着き撃沈。おやすみなさい。

11月2日　ロンドン市内

起床。パコに連絡して一緒にロンドン市内へ買い物に行く。これもロンドン・ツアーの一環だ。オイスターという、日本で言うところのSuicaみたいなのを買ってとりあえず有名な赤色の2階建バスに乗る!しかし前日のはしゃぎ過ぎがたたり体調の優れないオレ達はおとなしく静かに座る(笑)。バスを降りレコ屋に行く。ルークに挨拶して少しレコードを見た後、


11月2日　ロンドン観光


なんだか有名な通り


なんだか有名な赤いバス!

いつかロンドンに行ったら買ってやろうと思っていたオレの念願でもあるGreat Frogへ、MOTORHEADリングを買いに行く。しかもジーザスの彼女のエミリーがここの人達と仲良く、口をきいてくれたみたいでかなりディスカウントして貰った!ラッキー!ありがとう!エミリー!だけど受注生産らしく出来るのは2週間後みたい。楽しみだなー!

その後も景色や建物を眺めたり、コーヒー飲みながら色んな店を見ているとユニクロや無印なんかもある。こっちでも有名みたい。その流れで日本円をポンドに両替。そういえばみんなでベルスタッフ着てベルスタッフの店に行ったらナイス・ジャケット!って店員が言ってました(笑)!まぁそう言うしかないだろうな(笑)!途中ネンジさんがフライト1時間前にもかかわらず羽田空港に到着していない事が発覚!しかも本人は全く焦ってない(笑)。パコ怒る。普段温厚なパコを怒らすネンジ…、恐るべし!!!

暫くやりとりしてなんとかフライトに間に合う(笑)。あぶねー。ネンジあぶねー!

すったもんだの後ルークも合流し地下鉄に乗ったり、H&Mとかより安いロンドンでスゲー有名なファスト・ファッションの店に行ったりしてロンドンを満喫(笑)!するとパコが今日IRON LUNGも来るからみんなで飯を食おうって言うんで、パコが予約した店へ向かう。オレ達が一番乗りで席に座っているとIRON LUNG御一行が登場!挨拶を交わしみんなで飲む!お前らのレコード好きだぜ!なんて嬉しい事を言ってくれる!しゃべって食って飲んだ後は場所を変えて飲もうぜって事でまたBARへ。みんなBAR好きだな(笑)。だがあまり飲めず撃沈。ウーバーを使いジーザス・ハウスへ帰宅しておやすみ!

11月3日　カムデン〜ネンジ到着〜スタジオ

起床。今日パコは忙しいみたいなのでオレ達3人だけでウーバーでカムデンへ買い物!今のとこ飲んで買い物してるだけ(笑)!いいのか!?楽しいから良しとしよう!しかしカムデンは店が多過ぎて1日じゃ全然足りない!飯食ってレコード屋、古着屋、雑貨屋等色々見てるとネンジさんから連絡。労働ビザなのに何故か観光だと言ったもんだからこりゃ怪しいと足止めをくらってる模様。あの人何やってんだよ(怒)!出発前に言ったじゃん!マサキがイラつく(笑)。この後はネンジさんのおかげで買い物に身が入らず。しかし無事通過出来たらしくまた買い物へ(笑)。しかし古着屋の棚はバブアーばっかり!やっぱイギリス人はみんな着るんだね!しかも安い!1万円しないぐらいだったかな?マサキがお買い上げ。

そうこうしてるとネンジさんがヒースロー空港に到着する。ネンジさんもチャーリーが迎えに行ってくれたみたい!ありがとう!チャーリー!みんな買い物を終えウーバーでジーザス・ハウスへ帰宅するとネンジさんとジーザスが出迎えてくれる。あんた何やってんだよ!と言いつつ到着を喜ぶ。因みにネンジさんは羽田からドバイ経由のVIP待遇だ。この後スタジオで練習があるのでコンビニに酒を買いに行く。ジャック・ダニエルが最初からコーラで割られている画期的なジャック・コーク缶を発見し迷わず購入。外に出てこの酒を路上で飲むとどうなるのかをジーザスに尋ねると罰金4〜5万との返答。高っ!どうりで外で飲ん


11月2日　ロンドン観光 マサキがライオン?のようなポーズ 一体なんのつもりだろうか?

11月3日　到着するやヘラヘラするネンジさん



でるヤツがいない訳だ。タバコはOKなのに。日本と逆なんだな。ジーザスはドイツで行なわれるNuclear War Now!のフェスに行くみたいで明後日のお前らのライヴには帰ってくるよ!って事でここで別れる!ウーバーを手配しスタジオへ!中に入りさっき買ったジャック・コークを飲む!マズっ(笑)!自分で作った方がいいな(笑)!ほどほどに練習した後ジーザス・ハウスに帰宅しネンジさんの入国を祝しオレ等だけで飲んでると、マサキにVAASKAのメンバーからパーティーしてるから来いよとビデオ・レターが来る。今日がStatic Shock Festの初日でメイン・ショウの後のカラオケ・パーティーらしい(笑)。場所も遠いし満身創痍のオレ達だったが折角なので行く事にする。もちろんウーバーで(笑)。

会場に到着しマサキはVAASKAの連中と再会を喜ぶ。オレは初めましてかな?会場内でBELGRADOのパトリシアと再会!今回BELGRADOも出演する予定だったがメンバーがビザを取れず来れなくなったみたい。再会を約束していただけにスゲー残念(泣)。でもパトリシアは1人で来たみたい!行動力あるなー!ここでもそこそこ飲んでウーバーで帰宅!やっとツアー・レポートらしくなったところでこの日は終了(笑)!おやすみ!

11月4日　The Dome & The Unicorn

起床してなんやかんや時間が過ぎる。オレ達が明日やる会場のThe Domeで、ARMS RACE等のライヴがあるので観に行く為にウーバーを呼ぶ事にする。しかしここで事件は起きた。

車に乗り込むとマサキのスパイキー・ヘアーを見るなり運転手はこう言った。

「ユーライクテクノ?」

なんで!?唖然とするオレをよそにマサキが言った。

「アイライクテクノ」

オーケー。そういう事ね。乗ったぜ!

「ミートゥー」

オレが言うと、

「オーケー」

運転手が言った。車内に流れ始めるテクノ・ミュージック。

「いいねぇ!最高だぜ!」

オレ達が言う。調子に乗った運転手が音量を上げる。さらに調子に乗ったオレはネンジさんに尋ねる。

「ユーライクテクノ?」

苦笑いで答えるネンジ。

「イエス。ミートゥー」

それを聞いた運転手がさらに音量を上げる。かなりの爆音になり外を歩いてるヤツらがチラチラ見てくる。さらに調子に乗ったオレ達は、

「今のとこの盛り上がり最高だな!」

とか、

「もっとビートをくれ!」

とか言ってみる。勢いに乗りまくった運転手はさらに音量を上げ続ける。ありえない音量に外を歩いてるヤツらはガン見。さすがのマサキも段々下を向いていく!上がり続ける音量!うつむいてゆくマサキ(笑)!

会場に到着する頃には物凄い爆音になり、恥ずかしくなったオレ達はそそくさと会場に入ったのは言うまでもないだろう。最高に面白かったけどね(笑)!

会場に入り中を見渡す。広いなー!ここは結構昔からあるハコでGIRL SCHOOLやPENTAGRAMもここでやった事があるみたい!この辺だったかな?今日のアフター・ショウに出る予定だったTHE LOWEST FORMがメンバーの都合によりキャンセルになったので代わりに出ないか?と要請を受ける。もちろん快諾!

暫く飲んでいると段々人が集まってきてスタート!印象に残ったバンドはまずARMS RACE。チャーリーやニコがいるバンドで演奏がメチャタイト!あとヴォーカルの動きヤバい(笑)!もしかしたら日本に来るかもしれないのでその時は必見だ!次はDIAT。なんか全体的に完成されている感じ(笑)。これじゃわかんないか(笑)。バンドの見せ方とかスゲー良かったしオシャレな感じ!次はRIXE。フロアに厳ついスキンヘッズがいるなーと思ってたらやっぱりRIXEだった(笑)!彼らの1st 7インチはパコ曰くトータル5000枚ぐらいプレスしてるらしい!ベースのヤツが一番カッコいいなーと思って話しかけたら、名前はモモというらしく彼はヘルプらしい(笑)。どんなだ(笑)!

そしてこの日のトリのIRON LUNG。2人であそこまでやるなんて…。凄いとしか言えない。ドラム凄すぎ(笑)。解説終わり!

終わった後はアフター・ショウで別の場所にあるThe UnicornってBARに移動!

外に出るとあまりの寒さにマサキが産まれたての子鹿のように震えているのでオレのマフラーを貸してやる(笑)。

会場というかBARに着くともう結構な人がいる。とりあえず物販の準備をしてるとWANKYSのマークが話しかけてくれた。日本のバンドが好きみたい!気さくな人でした!んでスタート!

全バンド良かったが飲みまくってたせいもあり殆ど覚えてない(笑)。演奏しながらロン毛のベースを丸坊主にしてたバンドもいたな(笑)。

トリはオレ達。自分達の事はなんとも言えないが多分良かったのかな?客も盛り上がってたし。オレは気付かなかったがケンカもあったみたい(笑)!終わった後はそのままBARで飲み解散!終了!

11月5日　The Dome

起床して、パコの家からTシャツをジーザス・ハウスへ運び込み準備して会場に向かう。リハをして飯を食う。ドイツからHeart Firstのフローが来てくれてる!嬉しいね!再会を喜ぶ!オレ達の1st 7インチを持って来てくれる!ありがとう!ジーザスも戻って来てる!なんやかんやでスタート。

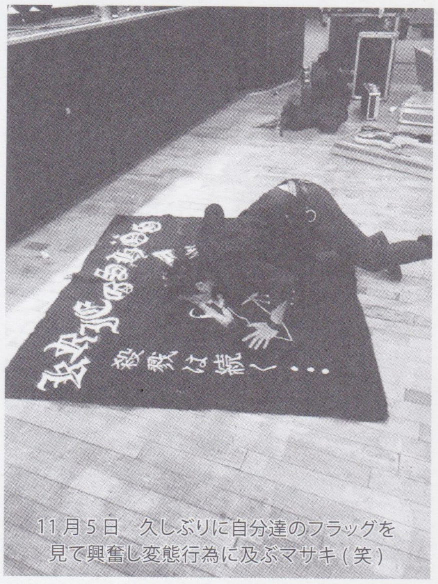
今日は昨日のメイン・ステージの他に地下のステージも使い交互にやるみたい。終わったら移動。忙しい。

観たバンドの事を書こうと思ったが面倒くさいので省略(笑)。あ、でもWARTHOGが見た目のインパクトもあるしスゲー良かった。特にベースのマテウ(笑)。んで、この日もオレ達はトリ。会場が広いのでやりにくかったな。でも楽しめました。終わって自分達の物販をやらないといけないので行くとパトリシアが、私がやるからあなたは休んでて!と追い出される(笑)。次々とレコードやTシャツを売り捌くパトリシア!メチャ売れてる(笑)。やっぱ売り子は女の子に限るな(笑)!サンクス!

因みに今回のロンドン・ツアー用に今やどのバンドも作らない、禁断のメンバー写真Tシャツを作ったんだけどあんまり売れてませんでした!わかってたけどな(笑)!

オレ達は常に挑戦する心を忘れてはいないのだ。

終わった後はパトリシアの案内で近くの



11月5日　久しぶりに自分達のフラッグを見て興奮し変態行為に及ぶマサキ（笑）



The Dome　マサキと肩を組んでるのがStatic Shockのトム

BARへ。しかし待てど暮らせど誰も来やしない。パコに連絡するとみんな別のBARにいるらしい。どんなだ!ウーバーでそっちに移動(笑)!

しかし着いて一杯飲むと営業終了!マジか(笑)!

みんな帰宅!おやすみ!

11月6日　カムデン〜ネンジ帰還

全てのライヴ・スケジュールを終えたオレ達は起床しカムデンへ(笑)。

今日、ネンジさんだけ日本へ帰還するのでお土産を買いに行くためだ(笑)。

前回周れなかったとこやドクターマーチンの1号店等を見たり、いかにもロンドン!なお土産を買ったり飯食ったりしてなんやかんや買い物を終えたオレ達は、ジーザス宅にもどり帰り仕度をして空港まで行くネンジさんを駅まで送る。1人改札を抜けるネンジさんの哀愁たるや(笑)。さよならネンジ(笑)。

その後はウーバーでジーザス宅にもどり一休み。んでStatic Shock Festの最終日の会場へ向かうためにまたウーバーを呼ぶ。この日のウーバーの運転手が最高だった。車が到着し乗り込むオレ達。いかにも英国紳士って感じの運転手は疲れきったオレ達にこう言った。

「お前達は疲れてるのか?」

「ああ」

「そうか…、コレを聴くといい」

するとカー・ステレオからクラシックが流れてくる。

「!!!!!」

最高だ…、一瞬で眠るオレ達(笑)。

会場に到着すると、

「着いたよ。良く眠れたかい?」

素晴らしい。惚れてまうやろ(笑)!この前のヤツとは大違いだ(笑)。

オレ達は運転手に礼を言い会場へ。着くとまだ6時前で酒が買えないらしく、何をしていいかわからずウロウロしているとチャーリーやニコがいて少し喋る。

6時になり酒が解禁されライヴ・スタート。VAASKAを初めて見る。ドラムだと思ってたヤツがヴォーカルだった(笑)!

トリはこの日までシークレットだったARMS RACE。興奮するマサキ。どうやらこの間のライヴでファンになったらしい。

相変わらず肩をいからせながらステージを練り歩き、膝に手を付き客を睨みながらがなるヴォーカル。なんだか怒られてる気分になってくる(笑)。

んで終了後はこのフェスの出演者やスタッフ等で打ち上げ。ベロベロ過ぎて殆ど覚えてないけどWARTHOGのマテウの十字架のピアスと赤いマニキュアを見て、コイツやっぱ最高だなーと思ったのは覚えてる(笑)。

打ち上げも終わりみんなとお別れをしてオレ達はパコの家へ。物販の整理をしてパコに礼をする。明日は早朝のフライトなのでオレ達だけで空港に行くので、パコとはここでお別れだ。ありがとうパコ!パコの尽力が無ければオレ達はロンドンに来る事はなかっただろう!!再会の約束をしてお別れ!オレ達はジーザス・ハウスに戻る。そして泥のように眠る。

11月7日　さよならロンドン

起床しウーバーでヒースロー空港に向かう。あっという間だったなとしみじみするメンバー。だがオレだけは気を抜かない。何故ならツアーは家に帰るまでがツアーだからだ。

そしてチェックアウトを済ませフライト!もちろんアブダビに寄る。変な陶器の人形を見つけ衝動買い(笑)。

そして日本へ!着いたのは8日。成田空港で、行きに食った中華屋で飯食ってそれぞれ帰宅!ツアー終了!!!

いかがだっただろうか?そう、オレ達はツアーと言いつつ2回しかライヴをしていないのだ!楽しかったなー(笑)。

今後はあんまりライヴ出来ないんだけど3月11日に武蔵境スタットでOLEDICKFOGGYと2マンがあるから観に来てね!

その後の予定は未定だ(笑)!!

ではまたどこかで!さよなら!!



11月5日　The Domeにて

PUNK AND DISTRO !

ORION PUNX RECORDS

唐突ですが、"ディストロ"って、パンク・シーンにはなくてはならない存在ですよね。もちろんレコード屋さんと比べれば品揃えの点では劣るけど、その分、「オレはこれが好きなんだ!」臭が濃厚に漂うセレクトだし、好きなバンドや作品をサポートする/紹介するという意味合いにおいても、シーンを構成する上で必要不可欠な存在だと思います。今回はそんなDIYなディストロ:沖縄のORION PUNX RECORDS、福島のculture、津山のVOX POPULIのオーナー3人に、アンケート形式のインタヴューを行なってみました!

■まずはディストロのお名前と、いつからやっているか、始めたキッカケを教えてください。

「ORION PUNX RECORDSのザハ タツヤです。馬鹿衆というバンドでベースも弾いてます。ディストロもバンドも2010年頃から始めました。ディストロ始めたキッカケは好きなレーベルやバンドの作品を沖縄でも流通させたかったからです」

■扱っている作品はどんなものがメインですか?

「POGO 77、HARDCORE SURVIVES、人間堂、VOX POPULIがリリースする作品は毎回入荷しています。あとは個人的に好きなバンドや沖縄にライヴしに来る予定のあるバンドに直接連絡して入荷してみたり。アナログもCDも入荷はしていますがアナログは買う人がだいぶ限られていますね。CDの方が売れやすいです。皆さっさとレコード・プレーヤー買えよ!いつまでも彼女の家のレコード・プレーヤー借りて聴くなよ!(自身にも喝を入れる)」

■惹かれる作品、ディストロしたくなる作品とはどんなものですか?

「完全に自分が好きなものばかり入荷してます。俺が入荷している作品は本州ではパンク、ハードコア専門のレコード店があるからそこに行けば購入可能だけど、ここ沖縄ではその様な店は存在していません」

■扱っている作品はどうやって販売されていますか?販売方法そのものにこだわりは?

「販売方法にこだわりはありません。ディストロやり始めの頃はライヴ会場の物販スペースで展開したりしてましたけど、俺も毎週末ライヴ会場にいる訳ではないので、それよりは毎日開いている友達のお店(パンク堂とNEVER MINDって店)の片隅に俺のディストロ・コーナー設けてもらって管理してもらってます。今はそこでの販売が主流です。お店にはかなり感謝してます。みんな俺の顔を見ずに買い物できるようになって良かったな(^_^;)」

■ディストロをやってて一番嬉しかったことは何ですか?ディストロの魅力とは?

「沖縄で俺しか流通してなかったバンドが、俺のライヴ企画で実際沖縄に来てライヴやってくれて客がバッコンバッコン盛り上がった時、物凄く嬉しい!ちょっと泣く(笑)。その余韻があって今でも頑張れてる(^_^;)」

■音源が売れないと言われ続けて何年も経ちますが、ディストロを始めた当初よりも扱うタイトルを絞ったり、枚数を少なくしたりといったことはありますか?

「上記に挙げたレーベルの作品は確実に入荷していますが、それでもこれは売りにくいなと思う作品は極少量しか入荷できていません。レーベル・サイドには申し訳ないけど、存続のために。無理して買い取って在庫沢山抱えてもしょうがないし誰も喜ばない、打算的ですみません(^_^;)」

■ちょっとネガティヴな話しですが、Rip Offされたりといったトラブルに遭遇したことは?

「ディストロに関しては一切ないです!ディストロに関しては!」

■ディストロを始めたいと考えている人に、アドバイスがありましたらお願いします。

「俺は毎月の給料を居酒屋にばっかり投資してたもんだから、それよりは大好きなパンクに捧げようと思って今までやってきました!今だって居酒屋にいます!今、どうにかギリギリトントンって感じで運営できてます!アナタのそのアクション一つで何か少しは変わるかも!やらなきゃわからないしやらなきゃ変わらないので、それならとりあえずやってみましょう!」

■今後の予定がありましたら教えてください。ディストロだけでなく、やっているバンドやレーベルのことでもOKです。

「今後の予定…、ディストロは今まで通りコツコツと、馬鹿衆は当分活動休止、俺は新しいバンドを立ち上げます。メンバー彼女しか決まってません(^_^;)。ヴォーカルとドラム募集中(^_^;)」

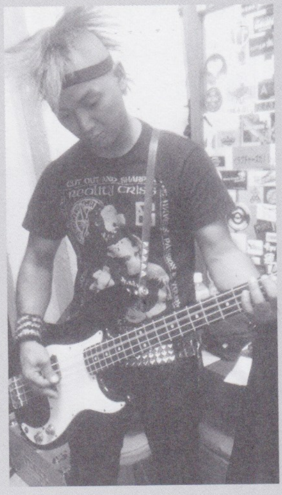
■読者の皆さんにメッセージなり、言いたいことがありましたら自由に書いてください。

「読んでくれてありがとうございました!このEL ZINEの記事の話をどこかでアナタとお話できたらありがたき幸せ!こんな機会を作ってくれた山路さんにも感謝!!!」

ORION PUNX RECORDS RECOMMENDED STUFF 2016

①VA/OLD PUNKS激闘市街戦(POGO77)7"
②ACCIDENTE/PULSO(VOX POPULI)CD
③THE KNOCKERS/KNOCKIN'BLUES(STRAIGHT UP)CD
④POK GAI/RAW POGO(POGO77)7"
⑤馬鹿衆/SET ME FREE(NOYMANN)CD

①ライヴ会場で先行発売しレーベル側でも早い段階でSOLD OUTした作品。2、3枚だったかな、当方でも入荷できました。各バンド1曲ずつ収録、TOMは相変わらずくだらない内容だとインフォに書いていたけど、歌の内容はエッチでくだらなくても楽曲がどこか牧歌的で新境地に辿り着いた様な気がしました!GETできた人はラッキー!お気に入りの1枚!
②スペインの女性ヴォーカル哀愁メロディック・パンク3rd ALBUM。2nd ALBUMよりもメロコア的要素が薄くなりこっちの方がサウンド面で好みだって人も多いかも!俺もその1人です!スペイン、素敵なバンドが多いなー!
③47都道府県ツアー沖縄編の企画を任せてもらった事もあり、個人的に楽しみにしてた作品。仕事中、待ち時間、呑んだ帰り道も頭の中でリピートされるナマラ酒呑み野郎賛美歌のオンパレード!黒&白盤ベストに続いてまたもや家宝入りしました!
④ちょっとナメてました、ポゴ・パンク・バンドって事でまた軽いヘロヘロした感じかなーって先入観で針を落とすとおやおやおや?ドタバタビートにストロングなヴォーカルが乗っかり突き進むカッコイイ、ピュア・ハードコア・パンクじゃありませんかおとうさん(滝汗)。ビール呑みながらアタマ振っていくつになってもおかあさんに怒られる1枚!
⑤世界中の誰よりもきっと俺が1番聴き込んだであろう1枚。自分を売り出すのは照れ臭いですね^_^;オススメです!



コンタクト
orionpunxrecords@docomo.ne.jp

PUNK AND DISTRO II

culture

■まずはディストロのお名前と、いつからやっているか、始めたキッカケを教えてください。
「ディストロ「culture」です、始めたのが2013年ごろで若輩者です(笑)、もともとアート・ブックとかZINEとかが好きで、音楽とかのイヴェントで音源のディストロは結構見るけど、さらに小さい本屋もあったらいいなーと思っていました。それでJOHN HEARTFIELDの作品集が再発された時に、「うぉぉぉ！」って気持ちが一気に盛り上がり、福島じゃ売ってないし、伝えたいから俺がやるしかないっしょ的な感じで「やろう」ってなって始めました」
■扱っている作品はどんなものがメインですか?
「ウチで取り扱っているのは、ほぼ本やZINE等の紙物でほとんどが日本の作品ですね、あとたまにですが音源も入れたりします」
■惹かれる作品、ディストロしたくなる作品とはどんなものですか?
「色々な場所やライヴに行った時に購入して体感して「面白いっ！」とか「かっけー！」と思ったもので地元で手に入りにくい作品ですね。作品は完全に自分が純粋に好きなもので揃えていて、混ぜものなしのラインナップになります」
■扱っている作品はどうやって販売されていますか?販売方法そのものにこだわりは?
「未だにライヴで手売りがメインです(笑)、webも考えているのですが(考えているだけで全然行動出来てません・笑)。作品を説明するやり取りからの会話の広がりが個人的に凄く楽しくて、まだライヴ手売りのみでやっています。でもweb展開もしたい気持ちはハイパーあります(笑)」
■ディストロをやってて一番嬉しかったことは何ですか?ディストロの魅力とは?
「一番嬉しいとはちょっと違いますが、ディストロを展開してそこから会話が発生し、作品を通じての繋がりを感じ点が線になる瞬間が嬉しいです。音で繋がる感じと同じだけど、ちょっと違うレイヤーな感じもあって面白かったりしますね、ハイパー感覚的なものですけど(笑)。それと、単純に好きな作品を取り扱って地元で発信できる事は凄く楽しいし、作品が届いて開封する時のドキワクが入り乱れての高まりは最高です！」
■音源が売れないと言われ続けて何年も経ちますが、ディストロを始めた当初よりも扱うタイトルを絞ったり、枚数を少なくしたりといったことはありますか?
「ウチは正直本よりたまに扱う音源の方が売れます(笑)、ZINEは買いやすい価格帯も結構あるので売れてると思いますがアート・ブックなどは、ライヴハウスの出店などでは売りにくい価格帯のモノもあるので、のんびりやっています。でもタイトル絞ったりとかは考えてなくて、むしろもっと増やしてガンガン攻めてきたい感じです。生業だったらまた別になりますが、今の段階では少なくするとかは考えてないです」
■ちょっとネガティヴな話しですが、Rip Offされたりといったトラブルに遭遇したことは?
「僕はないですね」
■ディストロを始めたいと考えている人に、アドバイスがありましたらお願いします。
「まずお取引する時の金銭のやりとりは常に意識しながらしっかりやった方が良いです。それをちゃんとクリアできれば、後は自分の感性を信じてこの作品がどんだけ最高かを伝えるだけなので楽しいです。アクションすると何かしら返ってくるから、それが色々なきっかけにもなって自身を更新出来る瞬間もあったりするので、考えている方はアクションするのがおススメです」
■今後の予定がありましたら教えてください。ディストロだけでなく、やっているバンドやレーベルのことでもOKです。
「特に決まってないので、出店・ソロ・バンドなんでも誘って下さい！」
■読者の皆さんにメッセージなり、言いたいことがありましたら自由に書いてください。
「これまでに出会った人も、これから出会える人も宇宙は広いけど狭くしてきたいので、2017年も本気で遊んできましょー！あとウチの作品も取り扱ってほしいとか面白情報等ありましたら、お気軽にご連絡下さーい」

culture
RECOMMENDED STUFF 2016

①Spectator/コペ転
②CRY IN PUBLIC ZINE 003/あたらしいくらし
③HUCKLEBERRY ZINE/各号
④TO FUTURE ISSUE 10/核無き世界へ
⑤EL ZINE vol.21

①コペ転(コペルニクス的転回の略)=モノの考え方が正反対に変わること。7人の人のインタヴューが載っていてほぼテキストで構成されているのですが、1人1人の生き方がとても面白くて、転換の瞬間などワクワクしながら読む事ができて、今やこれからを生きるヒントがたくさん詰まっていると思います。
②静岡県三島市のオルタナティヴ・スペースCRY IN PUBLICのメンバーが「あたらしいくらし」をテーマに寄稿により構成されているZINE。個・日常・思考の文章が交り合っていて、ソワソワしたりホッとしたり、見た事もない遠くにある過去の風景が想像で浮かんできたりして、とても面白いです。
③前述にあるCRY IN PUBLICのメンバーでもあるブライアンが制作しているZINE。驚き人物のインタヴューがあったと思ったら、有名アイドルvsつる性植物が紙面で試合したり、植物の種が付いてきたり、パレスチナ問題についての号もあったり、変幻自在で即興性も感じるZINEで最高です！
④EL ZINEの読者の皆様はご存知の方も多いと思うZINEですが、今回のオバマさんが平和公園に来た時の様子がインタヴューで載っていて、その中でも「人間としてのオバマ大統領をどう感じられたか？」の件がとても印象的で、そこからのインタヴューの流れがとても興味深い内容でした。
⑤俺たちのEL ZINEに石塚YOUのインタヴューが！という事で地元では一大ムーヴメント・ワッショイ状態が起きたとか起きないとか…。個人的には3号に渉って掲載されているフランスのPSYCHO SQUATTのインタヴューが面白かったり、ZINEの対談のバチバチでワイワイな雰囲気がテキストから伝わってくる感じがとても良かったです。



【Mail】swindles@hotmail.co.jp
【twitter】swindle_swdls

PUNK AND DISTRO III

VOX POPULI

■まずはディストロのお名前と、いつからやっているか、始めたキッカケを教えてください。

「岡山県津山市のVOX POPULIといいます。2009年に地元のパンク・ショップ"HI-SIDE"が店をたたむことになり、地元でパンク音源が買える環境を失いたくないという想いもあり始めました。名前は当時定期的に発行してたZINEの名前をそのまま使い、その後、同じ名前でレーベルも始めました。いやしかしDISTRO始めてもう8年近くたつのか…」

■扱っている作品はどんなものがメインですか?

「国内外の全てのフォーマットを扱っております。が、どちらかといえばアナログ音源が多いかな」

■惹かれる作品、ディストロしたくなる作品とはどんなものですか?

「基本、自分が欲しいと思った音源を入荷してる感じですね。基本的に、"自分が欲しい音源＝入荷する音源"なので入荷した音源は一枚は自分用にします。インターネットや友達繋がりで知ったバンドの現行バンドで自分のツボの音源はやはり無条件で入荷したくなります。自分がオリジナル盤探してたけど高くて買えなかった昔のバンドの再発は「こんなのあるのか！」ってテンションあがってオーダーしますね。稀にある「取り扱ってください」的な要望はできるだけ応えるようにしてます。パンクの音源発信源のうちの一つの役割を担いたいという気持ちはあるので」

■扱っている作品はどうやって販売されていますか?販売方法そのものにこだわりは?

「DISTROを始めた当初は津山のライヴハウスで販売するのをメインで考えてたし、やはり対面で販売するのが一番かなと。とかいいながら最近、カート機能付きのホームページを新設オープンしました。在庫管理的に便利だし、なにより普段部屋の片隅の箱の中で眠ってる音源たちが行くべき場所に行ったので、地獄の商品アップ作業をした甲斐があったってもんです」

■ディストロをやってて一番嬉しかったことは何ですか?ディストロの魅力とは?

「"VOX POPULIがオススメしてたあのバンド聴いたらメチャクチャかっこよくてー"みたいなんはもちろん嬉しいし、海外から津山にきたツアー勢が楽しそうに箱漁ってるのも嬉しいですね。DISTROの魅力…。やってる側からしたら、新作を早く聴けるのは特別感ありますね(笑)。他は…、レーベルやバンドやってるのと同じく、パンクならではの繋がりなんかはやっぱり魅力ですね。他はわからないけど、パンクの場合、例えレーベルやバンドやってなくても気持ちがあればいくらでも同じような人と繋がってくだらない話でもしながら美味しいお酒呑んだり、興味深い話できるのがやっぱり素晴らしい」

■音源が売れないと言われ続けて何年も経ちますが、ディストロを始めた当初よりも扱うタイトルを絞ったり、枚数を少なくしたりといったことはありますか?

「やはりVOX POPULIのようなDISTROでも音源が売れないようになってるのは痛感しますね…。DISTRO始めたころは、少量のオーダーは失礼かなと思って、できるだけ多くのオーダーをするようにしてて、それで売れ残る場合ももちろんあって…。DISTROで生活資金やお小遣いを得ようとはしてないので、儲けはなくていいんですが、やはり赤字続きだと継続できないので、枚数や入荷するタイトルなんかはシビアにならざるを得ないですね。特に近年は海外から輸入するレコードが高騰してて、7インチ盤の仕入れ値が下手したら4桁行くときもあるので慎重にならざるを得ないですね。レーベルもやってるので、トレードを駆使したりしてより買いやすい値段になるようにしていきたいなとは思います」

■ちょっとネガティヴな話しですが、Rip Offされたりといったトラブルに遭遇したことは?

「特に思い当たることはないかな…。人間同士なんで許容範囲のちょっとしたミスがあったくらいです。昔に海外のDISTROで買い物したものが届かなかったことは一度だけあります(笑)」

■ディストロを始めたいと考えている人に、アドバイスがありましたらお願いします。

「やり始めた当初から「絶対的に適役じゃない」と思ってたくらいなので、偉そうにアドバイスできないのですが強いていうなら"パンク愛があるならどうにかなる"ということでしょうか。"パンク・シーンのために！！"という気持ちも大事かもしれないけど、そればかりだと疲れちゃうかなと。何にしてでもそうだけど、楽しくないと続かないです。僕の場合。基本"好きなバンドの音源を周りに聴いてもらう"という、カセット・テープにダビングした音源を友達に聴かせる作業の延長上だと思うので、やりたきゃ最低限迷惑かからないようにだけしてとりあえずやってみればいいんじゃないかと」

■今後の予定がありましたら教えてください。ディストロだけでなく、やっているバンドやレーベルのことでもOKです。

「FINLANDの哀愁メロディック・アナーコ・パンク・バンド"1981"の2度目の日本ツアーを6月中旬に行うのでよろしくお願いします。同時期に同じくFINLANDのハードコア・パンク・バンド"VASTUSTA"も数箇所でライヴする予定です。この号が出てる頃にはデモ・テープ2本を集めた12インチが出回ってるので聴いてみてください。あと、諸事情により発売が遅れてた"ACCIDENTE - PULSO LP"もさすがに発売されてるだろうからよろしくお願いします」

■読者の皆さんにメッセージなり、言いたいことがありましたら自由に書いてください。

「EL ZINEの読者となれば友達も多いので「また呑もう」ってことですかね。いつも利用してもらってる人もありがとうございます。なにかとサポートしてくれてる人にも感謝であります」

**VOX POPULI
RECOMMENDED STUFF 2016**

①VAASKA/FUTURO PRIMITIVO(VOX POPULI)7"
②ACCIDENTE/PULSO(VOX POPULI)LP
③HAT TRICKERS/CLOCKWORK SOLDIERS(VOLTAGE)LP
④RUNKKU RADIO/KAUPUNKI(RATBITE)7"
⑤POST MORTEM/BETTER OFF DEAD(VOMIT PUNK ROCK)LP

①②に自分のレーベルの作品を持ってきたのは厚かましいけどかっこいいから仕方ない。③以降はリリースに関わってないものを選出。①はあくまで"RAW PUNK"なD-BEATハードコアなVAASKAのバンド最新かつ最高音源。②のACCIDENTEは一昔前なら"メロコア"扱いしまいがちな最高のパンク・ロック。③は完璧、これ以上求めたくないくらい。④は90年代にFINLANDで活動してデモだけを残してたバンドの、そのデモの7"化。全曲最高のSUOMIパンクだけど、"BLITZ - NEW AGE"のカヴァーも完全にSUOMIパンクしてて最高すぎる。⑤は女ヴォーカルUK 80's RAWハードコア・パンクのほぼ全音源集。たまりません。



VOX POPULI website
https://voxpopuli.theshop.jp/

ES GIBT KEIN WERT

JJ DOLL/ST



現行のNYのパンク・バンドって、どこかアートっぽいのが多勢ですよね(それが当地の伝統と言えるかもですが)。このバンドもそういった意味で、実に今のNY的。IVYやDEFORMITY、KALEIDOSCOPEなどでプレイしてきた(いる)、Shivaのギター・ワークが冴えまくるフリーキーなハードコア・パンクで、女性ヴォーカルのスポークン・ワード風の歌唱もクール!メンバー・チェンジを経て、現在も活動中だとか、とっくに解散しただとか…。
(Katorga Works 046)7"

DESPERDICIO/¡Más Destrucción!



1st EPでのDESTRUCCIONヨロシクなジャケット&サウンドに度肝を抜かれた方も多いのではないでしょうか?!そんな仙台発のスパニッシュD-Beatマスターによる2nd EP!昨今のオーヴァー・プロデュースされたD-Beatとは別次元の、アナログで80's な音質による"Crudo D-Beat Punk"がサイコーだ!前作が"Impulso(Impulse:衝動)な破壊"だったのに対して、今作は"Más (More)"だから手にはハンマーが握られている…の?
(Overthrow Records 50)7"

UNSKILLED LAB/ST



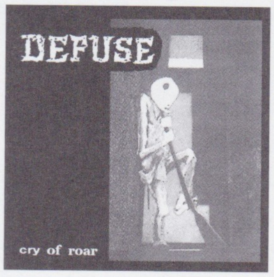
ex THE C-3'Sのバンさん率いる女性3人組バンドの初ヴィニール音源。アヴァンギャルドに捻じれたニューウェイビーなポップ感、アナーコ・パンクや日本の昭和も連想させる仄暗さ、デモデモそんなこんなもヒックルメテ、鋭角から切り込んでくるパンク・ロック!!複雑に絡み合いながらも、詰め込み過ぎない音の隙間も素晴らしい。繊細な紙に、孔版印刷でプリントしているようなアートワークもステキです!
(自主)7"

THE RUSTED/Verkligheten



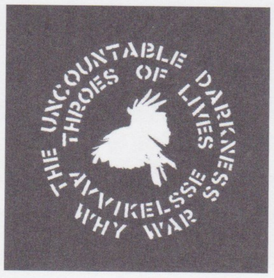
弊誌vol.18でインタヴューさせてもらったバンドの、自主CDに続く4曲入りヴィニール!完璧にヴィシャっている(※"THE VICIOUSみたいだね"の意味)アートワーク含め、Umeåパンク・ロックの血脈を受け継ぐ悲哀のキラー・チューンはよりソリッドな輝きを増している!ちなみに、スウェーデンのRADIOAKTIVA RÄKERの1stシングルも同じタイトルなのはちょっとしたトリビアです。覚えておいて損はないぜ(得もないぜ)!
(Overthrow Records 51)7"

DEFUSE/Cry Of Roar



このバンド名を見て"懐かしい!"と思ったのは、僕だけではないハズ。コロンビアのPOLIKARPA Y SUS VICIOSASとの強烈なスプリットをAnswer Recordsから17年前(!!)に発表していましたが、休止期間を経て久々にリリースされた本作も衰え知らず!ヤワなメロディなんて絶無の、ひたすらにドス黒い騒音と咆哮が渾然一体と化した、これぞトータル・ノイズ・クラスト!阿鼻叫喚せよ!
(MCR Company 285)7"

AVVIKELSSE/ST



「Total Exposure」コンピに収録されていたABSTRAKTのメンバーらによる、大阪新世代クラスト・バンドの1stシングル。北欧、そして大阪の先人たちからの影響もたしかに感じられるが、スウェーデン語で"逸脱"というバンド名が示すように、その模倣に甘んじることなく全てを叩き壊す気概に充ち溢れた全6曲!重厚なイントロから幕を開ける、地獄の黙示録の如き壮絶な仕上がりだ!!
(Crust War Records 053) 7"

FANZINE NEVER DIE!

TURIST I TILLVARON/#3

いきなりタイトルと反しますが、パンク/ハードコアのファンジンって、もうそろそろ絶滅危惧種に認定されるんじゃないかと思われるほどに、世界各地で激減していますよね。でもそんな中、パンク超大国であるスウェーデンから、イケてるファンジンが新たに発行されています!その名も「TURIST I TILLVARON」。元々は同名のレーベルとして始まったみたいですが、昨年2016年に#1を発行すると、最新号にあたる#3を今年1月にリリース。

表紙だけ見るとスキンズ系のファンジン?!と思ってしまうかもですが、イエイエ、内容は多岐に渡ります。

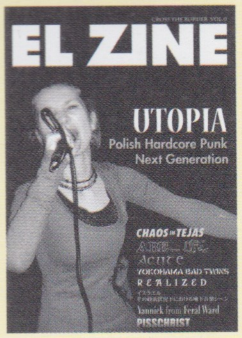
惜しくも昨年他界してしまったTHE BUSINESSのフロントマン:Micky Fitzの追悼記事にDISFEARのインタヴュー、NEGATIVE APPROACHやKILLING JOKE、DISCHARGEなどがスウェーデンで行なったものらしきギグの写真に、隣国フィンランドで開催されている伝説的なパンク・フェスPUNTALA ROCK 2016のレポート(ちなみに第一回目が行なわれたのは1982年!)、LOS CRUDOS/Martinのインタヴュー、パンク映画特集、Johnny ThundersとMC5のWayne Kramerによるバンド:GANG WAR(のドラマーだったJohn Morganへ)のインタヴュー、関係者による2016年のオススメ作品(POISON IDEAの「Calling All Ghosts」やBLANKS 77とTHE PARASITIXのスプリット、更には↑上記のTHE RUSTEDの7インチを挙げている人もいたり)などなど、本当、日本の「ELナントカ」って偏執(変



質)的なファンジンよりも、はるかに守備範囲が広くてバランスが良いのです!

おまけにファンジンと銘打っていますが、マガジンと言っても違和感ないくらいのシッカリした作り。海外ファンジンにありがちな、テキトー&ザツなところがありません。

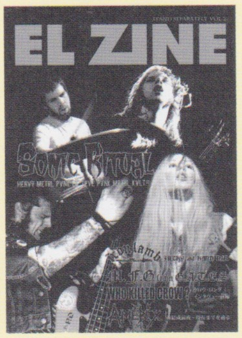
実に面白そうなファンジンなのですが、ただ一つ、唯一にして最大の欠点がありまして、それは…"スウェーデン語オンリーだから一切中身が読めない"ということです(泣)。英語版を出して欲しい…、そう願わずにはいられないファンジン「TURIST I TILLVARON」なのでした。



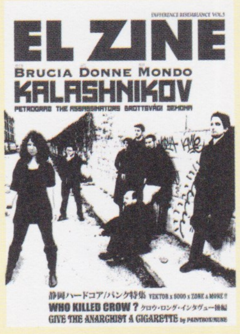
VOL.0 : UTOPIA SOLD OUT!!



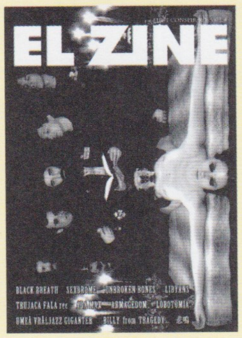
VOL.1 : MOONLESS SOLD OUT!!



VOL.2 : SONIC RITUAL SOLD OUT!!



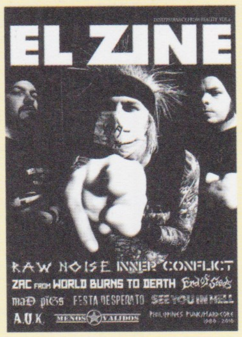
VOL.3 : KALASHNIKOV SOLD OUT!!



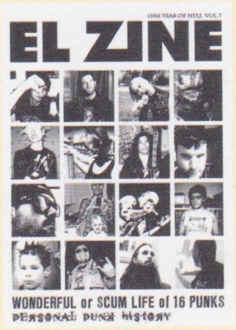
VOL.4 : BLACK BREATH



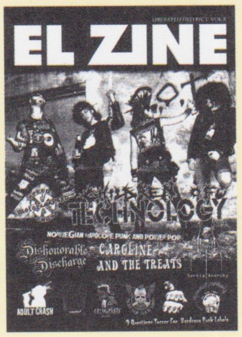
VOL.5 : RUIDOSA INMUNDICIA



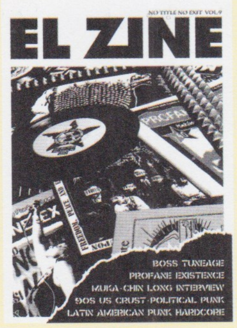
VOL.6 : RAW NOISE



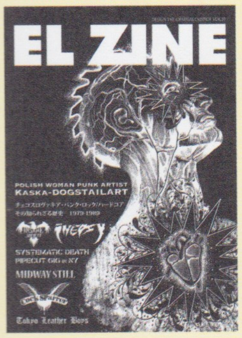
VOL.7 : 16 PUNKS



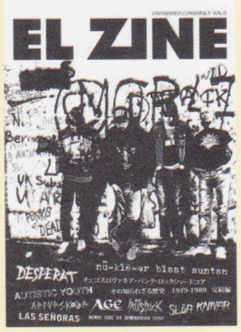
VOL.8 : CHILDREN OF TECHNOLOGY



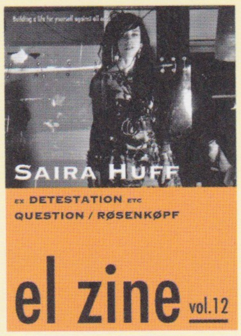
VOL.9 : 90S US CRUST



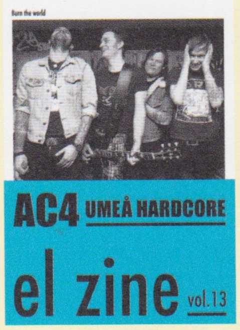
VOL.10 : KASKA DOGSTAILART



VOL.11 : DESPERAT



VOL.12 : SAIRA HUFF



VOL.13 : AC4 SOLD OUT!!



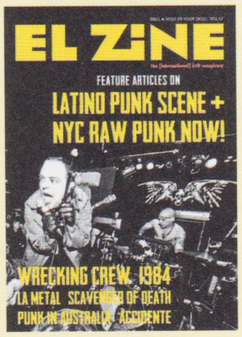
VOL.14 : STEVEN RUUD



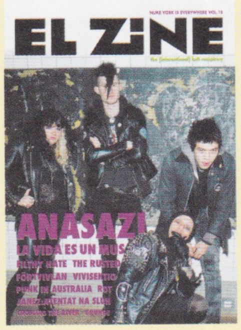
VOL.15 : 1981



VOL.16 : TOM AND BOOT BOYS



VOL.17 : LATINO AND NYC PUNK



VOL.18 : ANASAZI



VOL.19 : METAL PUNK



VOL.20 : YOUNG PUNKS SOLD OUT!!



VOL.21 : BELGRADO



VOL.22 : POISON IDEA



VOL.23 : GORILLA ANGREB

THANKS FOR READING!
FOR PUNKS!
BY PUNKS!

editor's notes

もうココに書いちゃいますけど、次号vol.25は4月末に出します(恐らく)!…と言うのも、今号の作業と並行してvol.25のインタヴューもいくつか行なったので、現時点で既に10ページくらいはできているんですよね。だから、4月末には出せるんじゃないかな〜と。でもその先は完全に未定です。ここ最近、隔月ペースで出してしまっているので、時間的にも資金的にもアレがアレでアレなんです(汗)。けど、ファンジン作るのって楽しいから、…イヤ、そんな楽しいもんじゃないけど(…どっちだ!?)、ほら、RESISTANCE 77とか、自分が子供の頃から好きだったバンドに色々と話しを聞けるのは楽しいですよね(…結局楽しいのか)。でも、そうでもないかな?ウーン、ジレンマ!!ではまた4月に!!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した　※EL ZINE vol.24　2017年2月24日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com
※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます

TOTAL CONTROL Photo by Mateus Mondini



the [international] kvlt conspiracy EL ZINE DEMONIZATION OF SOCIALISM VOL.24

EL ZINE VOL.24 600 YEN



the [international] kvlt conspiracy

EL ZINE

DEMONIZATIÓN OF SOCIALISM VOL.24

